松山市文化財調査報告書124

鶴が峠遺跡 Ⅱ

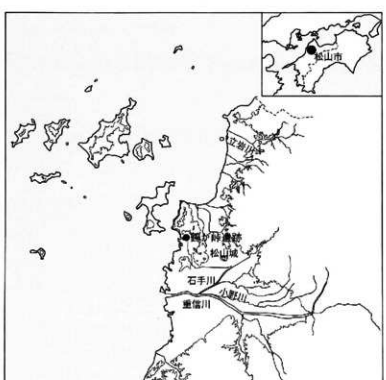
2008

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

鶴が峠遺跡Ⅱ



2008

松山市教育委員会

財団法人　松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

序

本報告書は、昭和55年、56年の２ヶ年にわたり、松山市西部の石風呂町・松ノ木町において実施された大規模土地区画整理事業にともなう発掘調査成果報告の第２巻目です。

平成18年度は「鶴が峠遺跡Ⅰ」として、主に調査地東部域、A区からG区についての報告をいたしましたが、今年度も引き続き、残りのエリアH区からL区の報告を行います。今回の調査区では、主に古墳時代中・後期の古墳群が検出され、豊富な土器類や装身具をはじめとする副葬品や埴輪類が出土しており、なかでも各種の形象埴輪は、質、量ともに当平野では貴重な例として注目されます。

このような成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力のたまものと心より感謝申し上げる次第です。

本書が、今後各方面でご活用いただければ幸いに存じます。

平成20年３月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長　　中村時広

例　言

1．本報告書は、松山市石風呂町・松ノ木町において松山市教育委員会が実施した、鶴が峠遺跡の発掘調査報告書である。2分冊の報告のうち、A～G区までの成果は「鶴が峠遺跡Ⅰ」として2007（平成19）年度に刊行されている。本報告は残りの調査区、H～L区の成果報告である。

2．鶴が峠遺跡の調査は、東急不動産株式会社によって、1980（昭和55）年から計画・実施された土地区画整理事業に伴う事前調査として、1980（昭和55）年1月から1981（昭和56）年9月までの2カ年にわたって実施された。

3．遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、池田学（平成4年退職）、松村淳（平成5年退職）、丹生谷道代、矢野久子、多知川冨美子が行った。

4．遺構の撮影は、調査担当者が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

5．遺物の縮尺は、土器・土製品を1／4にすることを原則とし、石器・石製品を1／2、鉄器・鉄製品はその大きさに応じて1／2、1／3、1／4で、また、玉類についても1／1、1／2を使い分けて掲載した。

6．使用した方位は磁北である。

7．本報告にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されているとともに、その一部は、併設の松山市考古館において常設展示されている。

8．本報告書の執筆・編集は、栗田茂敏が行った。

本文目次

第1章　はじめに …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．環　境
（1）地理的環境 …… 2
（2）歴史的環境 …… 2
3．組　織 …… 5
第2章　調査の成果 …… 7
1．H区の調査 …… 7
（1）弥生時代の遺構と遺物 …… 7
（2）古墳時代の遺構と遺物 …… 18
2．J区の調査 …… 74
（1）縄文・弥生時代の遺構と遺物 …… 74
（2）古墳時代の遺構と遺物 …… 80
3．L区の調査 …… 89
（1）弥生時代の遺構と遺物 …… 89
（2）古墳時代の遺構と遺物 …… 98
第3章　まとめ …… 157

挿図目次

図1　調査地と周辺の主要遺跡 …… 3
図2　調査地の区割りと調査実施部分 …… 8
図3　H区遺構配置図 …… 9
図4　H区SK1 …… 11
図5　H区SK1出土遺物 …… 12
図6　H区SK2 …… 12
図7　H区SK3 …… 13
図8　H区SK3出土遺物 …… 14
図9　H区SK4 …… 15
図10　H区SK5 …… 16
図11　H区SK5出土遺物 …… 17
図12　H区出土弥生遺物 …… 18
図13　H区完掘後コンター図 …… 19
図14　H区1号墳 …… 21
図15　H区1号墳出土遺物 …… 22
図16　H区2号墳 …… 23

図17　H区3号墳 …… 24
図18　H区2号墳出土遺物 …… 25
図19　H区3号墳出土遺物 …… 25
図20　H区4号墳 …… 26
図21　H区5号墳 …… 27
図22　H区6号墳 …… 28
図23　H区7号墳周溝出土遺物 …… 28
図24　H区7号墳横穴式石室平面図 …… 29
図25　H区7号墳横穴式石室展開図 …… 31
図26　H区7号墳横穴式石室遺物出土状況（1） …… 34
図27　H区7号墳横穴式石室遺物出土状況（2） …… 35
図28　H区7号墳横穴式石室出土遺物（1） …… 36
図29　H区7号墳横穴式石室出土遺物（2） …… 37
図30　H区7号墳横穴式石室出土遺物（3） …… 38
図31　H区7号墳横穴式石室出土遺物（4） …… 39
図32　H区7号墳横穴式石室出土遺物（5） …… 40
図33　H区7号墳横穴式石室出土遺物（6） …… 41
図34　H区7号墳横穴式石室出土遺物（7） …… 42
図35　H区8号墳丘・周溝出土遺物 …… 43
図36　H区8号墳横穴式石室平面図 …… 45
図37　H区8号墳横穴式石室展開図 …… 46
図38　H区8号墳横穴式石室礫床 …… 47
図39　H区8号墳横穴式石室遺物出土状況（1） …… 49
図40　H区8号墳横穴式石室遺物出土状況（2） …… 50
図41　H区8号墳横穴式石室出土遺物（1） …… 51
図42　H区8号墳横穴式石室出土遺物（2） …… 52
図43　H区8号墳横穴式石室出土遺物（3） …… 53
図44　H区9号墳周溝出土遺物 …… 54
図45　H区9号墳横穴式石室平面図 …… 55
図46　H区9号墳横穴式石室展開図 …… 57
図47　H区9号墳横穴式石室遺物出土状況（1） …… 60
図48　H区9号墳横穴式石室遺物出土状況（2） …… 61
図49　H区9号墳横穴式石室出土遺物（1） …… 62
図50　H区9号墳横穴式石室出土遺物（2） …… 62
図51　H区9号墳横穴式石室出土遺物（3） …… 63
図52　H区9号墳横穴式石室出土遺物（4） …… 64
図53　H区9号墳丘採集遺物 …… 65
図54　H区祭祀跡遺物出土状況 …… 67

図55　H区祭祀跡出土遺物（1）……69
図56　H区祭祀跡出土遺物（2）……70
図57　H区祭祀跡出土遺物（3）……71
図58　H区採集古墳時代遺物……72
図59　H区採集古代以降の遺物……73
図60　J区SK1……74
図61　J区の調付と遺構配置図……75
図62　J区SK1出土遺物……77
図63　J区出土縄文・弥生土器……78
図64　J区出土石器・石製品……79
図65　J区1号墳丘出土遺物……80
図66　J区調査前コンター図……81
図67　J区1号墳全測図……82
図68　J区1号墳丘横断面図……83
図69　J区1号墳竪穴式石室平面図……85
図70　J区1号墳竪穴式石室展開図……86
図71　J区1号墳竪穴式石室出土遺物……87
図72　J区出土埴輪……88
図73　L区調査前コンター図……89
図74　L区SB1……90
図75　L区遺構配置図……91
図76　L区SB1出土遺物……93
図77　L区SK1……93
図78　L区SK1出土遺物……94
図79　L区SK2……94
図80　L区SK2出土遺物……94
図81　L区SK4……95
図82　L区SK4出土遺物……96
図83　L区SK5……96
図84　L区SK5出土遺物……96
図85　L区出土弥生土器・土製品……97
図86　L区出土石器・石製品……98
図87　L区完掘後コンター図……99
図88　L区1号墳周溝遺物出土状況……101
図89　L区1号墳周溝出土遺物（1）……103
図90　L区1号墳周溝出土遺物（2）……104
図91　L区1号墳周溝出土遺物（3）……105
図92　L区1号墳周溝出土遺物（4）……106

図93　L区1号墳周溝出土遺物（5）…… 107
図94　L区1号墳周溝出土遺物（6）…… 109
図95　L区1号墳周溝出土遺物（7）…… 110
図96　L区1号墳周溝出土遺物（8）…… 111
図97　L区1号墳丘出土古墳時代遺物 …… 111
図98　L区2号墳周溝遺物出土状況 …… 112
図99　L区2号墳周溝出土遺物（1）…… 113
図100　L区2号墳周溝出土遺物（2）…… 114
図101　L区2号墳周溝出土遺物（3）…… 115
図102　L区2号墳周溝出土遺物（4）…… 116
図103　L区2号墳丘採集遺物 …… 117
図104　L区3号墳周溝遺物出土状況 …… 119
図105　L区3号墳周溝出土遺物（1）…… 121
図106　L区3号墳周溝出土遺物（2）…… 122
図107　L区3号墳周溝出土遺物（3）…… 123
図108　L区3号墳周溝出土遺物（4）…… 124
図109　L区3号墳出土盾形埴輪想定復元図…… 125
図110　L区3号墳周溝出土遺物（5）…… 126
図111　L区3号墳周溝出土遺物（6）…… 127
図112　L区出土古墳時代遺物 …… 127
図113　L区SX1 …… 128

表目次

表1　調査古墳名対照表 …… 1
表2　H区SK1出土遺物観察表　土製品…… 129
表3　H区SK3出土遺物観察表　土製品…… 129
表4　H区SK3出土遺物観察表　石製品…… 129
表5　H区SK5出土遺物観察表　土製品…… 129
表6　H区採集弥生遺物観察表　土製品 …… 130
表7　H区採集弥生遺物観察表　石製品 …… 130
表8　H区1号墳出土遺物観察表　土製品…… 130
表9　H区2号墳出土遺物観察表　土製品…… 131
表10　H区3号墳出土遺物観察表　土製品…… 131
表11　H区7号墳周溝出土遺物観察表　土製品 …… 131
表12　H区7号墳主体部出土遺物観察表　土製品 …… 131
表13　H区7号墳主体部出土遺物観察表　金属製品 …… 132
表14　H区7号墳主体部出土遺物法量計測表　装身具 …… 133

表15　H区7号墳主体部出土遺物観察表　装身具 …… 133
表16　H区8号墳丘・周溝出土遺物観察表　土製品 …… 135
表17　H区8号墳丘出土遺物観察表　石製品 …… 135
表18　H区8号墳上体部出土遺物観察表　土製品 …… 135
表19　H区8号墳主体部出土遺物観察表　金属製品 …… 136
表20　H区8号墳主体部出土遺物法量計測表　装身具 …… 136
表21　H区8号墳出土遺物観察表　装身具 …… 136
表22　H区9号墳周溝出土遺物観察表　土製品 …… 137
表23　H区9号墳上体部出土遺物観察表　土製品 …… 137
表24　H区9号墳主体部出土遺物観察表　金属製品 …… 138
表25　H区9号墳主体部出土遺物法量計測表　装身具 …… 138
表26　H区9号墳主体部出土遺物観察表　装身具 …… 138
表27　H区9号墳丘採集遺物観察表　土製品 …… 140
表28　H区9号墳丘採集遺物観察表　石製品 …… 140
表29　H区祭祀跡出土遺物観察表　土製品 …… 140
表30　H区祭祀跡出土遺物観察表　装身具 …… 142
表31　H区採集古墳時代遺物観察表　土製品 …… 142
表32　H区採集古墳時代遺物観察表　装身具 …… 143
表33　H区採集古代遺物観察表　土製品 …… 143
表34　J区SK1出土遺物観察表　土製品 …… 143
表35　J区SK1出土遺物観察表　石製品 …… 143
表36　J区出土縄文・弥生時代遺物観察表　土製品 …… 143
表37　J区出土遺物観察表　石製品 …… 144
表38　J区1号墳丘出土遺物観察表　土製品 …… 145
表39　J区1号墳主体部出土遺物観察表　金属製品 …… 145
表40　J区1号墳主体部出土遺物観察表　装身具 …… 145
表41　J区出土遺物観察表　土製品 …… 146
表42　L区SB1出土遺物観察表　土製品 …… 146
表43　L区SK1出土遺物観察表　土製品 …… 146
表44　L区SK2出土遺物観察表　土製品 …… 147
表45　L区SK4出土遺物観察表　土製品 …… 147
表46　L区SK5出土遺物観察表　土製品 …… 147
表47　L区出土弥生時代遺物観察表　土製品 …… 147
表48　L区出土遺物観察表　石製品 …… 148
表49　L区1号墳周溝出土遺物観察表　土製品 …… 148
表50　L区1号墳丘出土古墳時代遺物観察表　土製品 …… 151
表51　L区2号墳周溝出土遺物観察表　土製品 …… 151
表52　L区2号墳丘出土遺物観察表　土製品 …… 152

表53　L区3号墳周溝出土遺物観察表　土製品 …… 153
表54　L区出土古墳時代遺物観察表　土製品 …… 156

図版目次

図版1　調査前のH区丘陵（1）（南より）　調査前のH区丘陵（2）（北東より）
図版2　H区SK1完掘状況（北より）　H区SK2完掘状況（南より）
H区SK3遺物出土状況（西より）
図版3　H区SK4完掘状況（西より）　H区SK5調査状況（西より）
H区SK5遺物出土状況（南より）
図版4　H区調査風景（北より）　H区1号墳丘（西より）
図版5　H区2号墳丘（北より）　H区3号墳丘（東より）
図版6　H区4号墳丘（南より）　H区6号墳丘（東より）
図版7　H区7号墳全景（北東より）　H区7号墳横穴式石室調査状況（北より）
図版8　H区7号墳横穴式石室遺物出土状況（1）　H区7号墳横穴式石室遺物出土状況（2）
H区7号墳横穴式石室遺物出土状況（3）
図版9　H区7号墳横穴式石室遺物出土状況（4）　H区7号墳横穴式石室遺物出土状況（5）
H区7号墳横穴式石室遺物出土状況（6）　H区7号墳横穴式石室遺物出土状況（7）
H区7号墳石屋形遺物出土状況
図版10　H区7号墳横穴式石室玄室床面（北より）　H区7号墳横穴式石室石屋形床面
図版11　H区7号墳横穴式石室玄室完掘状況（南より）
H区7号墳横穴式石室石屋形近景（1）（南より）
図版12　H区7号墳横穴式石室石屋形近景（2）（南西より）
H区7号墳横穴式石室玄室西側壁近景（南東より）
図版13　H区7号墳横穴式石室完掘状況（南より）
図版14　H区祭祀跡検出状況（南西より）　H区祭祀跡遺物出土状況（1）（東より）
図版15　H区祭祀跡遺物出土状況（2）（南より）　H区祭祀跡遺物出土状況（3）（西より）
図版16　H区祭祀跡遺物出土状況（4）　H区祭祀跡完掘状況（西より）
図版17　H区8号墳横穴式石室調査状況（南より）　H区8号墳横穴式石室遺物出土状況（1）
H区8号墳横穴式石室遺物出土状況（2）　H区8号墳横穴式石室遺物出土状況（3）
H区8号墳横穴式石室遺物出土状況（4）
図版18　H区8号墳横穴式石室玄室礫床（南より）　H区8号墳横穴式石室玄室奥壁近景（南より）
図版19　H区8号墳横穴式石室玄室東側壁近景（北西より）
H区8号墳横穴式石室玄室西側壁近景（南東より）
図版20　H区8号墳完掘状況（南より）
図版21　H区9号墳全景（北より）　H区9号墳横穴式石室調査状況（南より）
図版22　H区9号墳横穴式石室遺物出土状況（1）　H区9号墳横穴式石室遺物出土状況（2）
H区9号墳横穴式石室遺物出土状況（3）

図版23　H区9号墳横穴式石室遺物出土状況（4）　H区9号墳横穴式石室遺物出土状況（5）
H区9号墳横穴式石室遺物出土状況（6）
図版24　H区9号墳横穴式石室遺物出土状況（7）　H区9号墳完掘状況（1）（北より）
図版25　H区9号墳完掘状況（2）（南より）
図版26　J区調査状況全景（北東より）　J区SK1遺物出土状況（南より）
J区1号墳竪穴式石室遺物出土状況
図版27　J区1号墳竪穴式石室全景（1）（西より）　J区1号墳竪穴式石室全景（2）（北東より）
図版28　H区よりL区を望む（東より）　L区調査前近景（北より）
図版29　L区1号墳周溝遺物出土状況（1）（東より）　L区1号墳周溝遺物出土状況（2）（西より）
図版30　L区1号墳周溝遺物出土状況（3）　L区1号墳周溝遺物出土状況（4）
L区1号墳完掘状況（北西より）
図版31　L区2号墳周溝遺物出土状況（1）（西より）　L区2号墳周溝遺物出土状況（2）（東より）
図版32　L区2号墳完掘状況（南東より）
図版33　L区3号墳周溝遺物出土状況（1）（東より）　L区3号墳周溝遺物出土状況（2）
図版34　L区3号墳周溝遺物出土状況（3）（東より）
L区3号墳周溝遺物出土状況（4）（南東より）
図版35　L区3号墳周溝遺物出土状況（5）　L区3号墳周溝遺物出土状況（6）
L区3号墳周溝遺物出土状況（7）
図版36　L区3号墳周溝遺物出土状況（8）（南より）　L区3号墳完掘状況（東より）
図版37　L区SK2遺物出土状況（南西より）　L区SK4遺物出土状況（南西より）
L区SK5遺物出土状況（南西より）
図版38　L区SB1完掘状況（北西より）　L区SX1完掘状況（北より）
図版39　H区出土弥生遺物
図版40　H区2・3号墳出土遺物、7号墳出土遺物（1）
図版41　H区7号墳出土遺物（2）
図版42　H区7号墳出土遺物（3）
図版43　H区8号墳出土遺物（1）
図版44　H区8号墳出土遺物（2）、9号墳出土遺物（1）
図版45　H区9号墳出土遺物（2）
図版46　H区祭祀跡出土遺物（1）
図版47　H区祭祀跡出土遺物（2）、H区採集古墳時代遺物
図版48　J区SK1出土遺物、J区採集縄文・弥生時代遺物
図版49　J区1号墳出土遺物、L区SB1・SK2・4出土遺物
図版50　L区1号墳丘採集遺物、L区1号墳周溝出土遺物（1）
図版51　L区1号墳周溝出土遺物（2）
図版52　L区1号墳周溝出土遺物（3）
図版53　L区1号墳周溝出土遺物（4）
図版54　L区1号墳周溝出土遺物（5）

図版55　L区2号墳周溝出土遺物（1）
図版56　L区2号墳周溝出土遺物（2）
図版57　L区3号墳周溝出土遺物（1）
図版58　L区3号墳周溝出土遺物（2）
図版59　L区3号墳周溝出土遺物（3）、L区採集盾形埴輪

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

1980（昭和55）年、松山市西部の石風呂町・松ノ木町において、東急不動産株式会社により計画された土地区画整理事業にもとづき、松山市教育委員会文化教育課は、分布確認調査を実施した。計画された区画整理事業は、総面積約25ヘクタールにおよぶ。その用地の内訳は、畑・山林を主とした丘陵地と、水田や畑として利用されている丘陵麓の鞍部や低地部とからなっている。このエリアは、松山市の指定する包蔵地「№11石風呂町弥生遺物包含地・古墳群、岩木山古墳群」に含まれている。分布確認調査は地元町内会の協力を得ながら、踏査を主として実施された。その結果、丘陵上の各所において古墳群が確認されたり、弥生土器が採集されたりしたので、全域を一応トレンチ調査の対象とすることとした。調査は、フォーク状を呈する調査地丘陵や谷部をいくつかのエリアに分け、順にトレンチ調査を行いながら、遺構や遺物が検出された部分に、必要に応じて適宜調査区を設定して進めていくという方法をとった。そのうちでも対象地東部にひろがる低地部は現地表面での海抜２～９mと低く、トレンチを掘削するとすぐに湧水がみられ、確認作業自体困難をきわめたので、調査対象からはずし、基本的に丘陵上を主に調査することとなった。調査区にはA区からL区までの12の区域を設定したが、このうち対象地の最高所であるF区としたエリアでは既に岩盤が露出し、遺構等も薄いと判断された。また、K区とした丘陵とその東の鞍部I区は、当初開発区域として組み込まれていたが、用地取得がならず、最終的に計画からはずれ、現状のまま保存されることとなったので、これら３つのエリアについては調査対象からはずすこととなった。

調査は1980（昭和55）年１月21日、A区から開始し、おおよそアルファベット順に進めてゆき、翌1981（昭和56）年９月28日終了した。この間、A区を除く丘陵各所で土坑をはじめとする弥生時代の遺構群や古墳の検出、あるいは遺物の出土がみられている。これら、調査された遺構に関する遺構名は、調査当時、A区からE区までを通し番号としていた。しかしながら、その後G区以降の調査では続きの番号をとらず、各区ごとにあらためて１から始まる通し番号をとるといった不統一な部分がある。こういった状況ではいらぬ混乱を招く恐れがあるので、本報告にあたって遺跡全体の通し番号に改めることも考えたが、既にL区の古墳などはL区１号墳～３号墳として広く通用しており、また、2001（平成12）年刊行の愛媛県埋蔵文化財調査センターの報告書、「鶴が峠古墳群（L区）」では、本調査検出の３基に続くL区４号墳～９号墳の遺構番号を当てている。このような事情を鑑み、報告としての統一性を図るため、表１で示したように、本報告では逆

表１　調査古墳名対照表

調査時	愛媛県内古墳分布	本報告
1号墳(B区)	8号墳(B・C区古墳)？	B区1号墳
2号墳(C区)		C区1号墳
3号墳(C区)		C区2号墳
4号墳(E区)	6号墳(J区4号墳)	E区1号墳
5号墳(D区)		古墳と認定せず
6号墳(E区)	7号墳(J区6号墳)	E区2号墳
G区1号墳	4号墳(G区古墳)	G区1号墳
G区2号墳		G区2号墳
G区3号墳		G区3号墳
G区4号墳		G区4号墳
J区1号墳	5号墳(J区1号墳)	J区1号墳
H区1号墳		H区1号墳
H区2号墳		H区2号墳
H区3号墳		H区3号墳
H区4号墳		H区4号墳
H区5号墳		H区5号墳
H2区6号墳		H区6号墳
H2区7号墳	9号墳	H区7号墳
H2区8号墳	10号墳	H区8号墳
H2区9号墳	11号墳	H区9号墳
L区1号墳	1号墳	L区1号墳
L区2号墳	2号墳	L区2号墳
L区3号墳	3号墳	L区3号墳

にA～E区の各遺構についても区ごとに1から始まる通し番号にふりかえることとした。例えば、調査時E区で検出された2基の古墳を4号墳、6号墳として調査したが、本報告ではそれぞれE区1号墳、E区2号墳とするといった具合である。G区以降の遺構についての変更はない。

2．環　境

(1) 地理的環境

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の2大河川がある。この2河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約4kmの通称「出合」で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみてみると、平野北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、扇状地の北に延びる沖積低地、平野南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、両河川の中間にあって、石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。そのうち、平野北方の沖積低地は、東方の高縄山系南西面と、西方の太山寺山塊東面との間の、東西幅約2～4km、南北長約7kmにわたってひろがる地溝性の低地で、調査地はこの沖積低地西方に位置する松山市石風呂町、太山寺山塊の南麓にあたる丘陵地である。西北2kmの伊予灘には、松山の海の玄関口松山観光港、南西1kmにはもうひとつの主要な港、三津港が位置し、また北方の斎灘に面する現海岸線まで約3kmという地点にあたる。

(2) 歴史的環境

鶴が峠遺跡周辺の道後平野北西部域における環境を概観してみる。このエリアでの遺物・遺構の確認例のうちで最も遡るものは縄文時代後期の遺物群で、馬木町所在の蓬莱寺遺跡や、太山寺町の大渕遺跡において、包含層資料として後期中葉から後葉までの遺物の出土がみられている。遺構として人間の生活の痕跡が確実に確認できるのは縄文時代晩期中葉以降のことである。船ケ谷町所在の船ケ谷遺跡では晩期突帯文を遡る時期の河川、杭列、住居址が多量の土器、石製品、木製品とともに検出されている。大渕遺跡では、後期に引き続き、晩期前葉から晩期末までの遺物の出土があり、晩期後半の遺物を出土する土坑群が調査されている。また、晩期後半の遺物を出土する包含層からは大量のイネ花粉や炭化籾の検出とともに、丹塗り壺、カジ紋壺や石庖丁、石鎌などの大陸系磨製石器の出土もあり、当平野における稲作関連の最も古い例として注目されている。これらの遺跡は先述の沖積低地に立地する遺跡であるが、例が少なかったこの低地上での発掘調査例も少しずつ増加しており、弥生時代に関しては注目される調査例もみられはじめている。太山寺町の市営三光団地内において近年行われた大渕遺跡3次調査では中～後期の土器が流路内から出土している。また、西長戸町の船ケ谷遺跡4次調査の流路からは前期から後期の遺物が出土したほか、前期から後期まで各期の井戸が検出さ

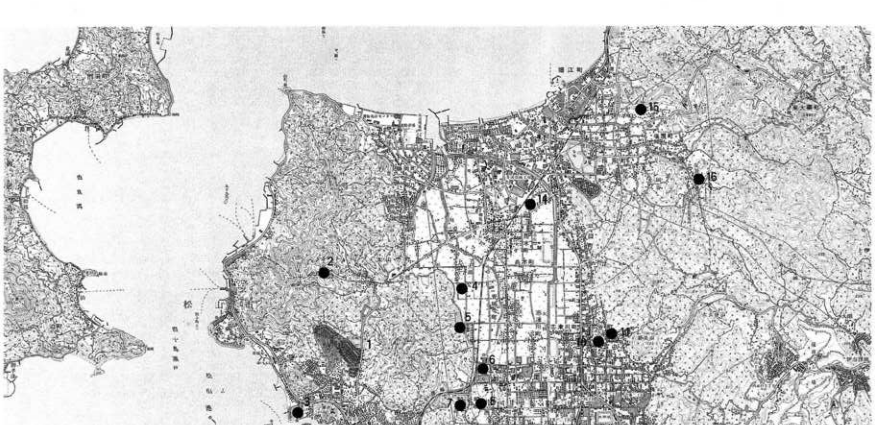


図１　調査地と周辺の主要遺跡　（S＝1：50000）

れている。これらの井戸のうち、前期の1基は壺形土器の底部を抜いたものを井戸側として利用していて注目された。この低地周辺で弥生時代の遺構・遺物が多く確認されているのは低地を臨む周辺の丘陵麓、あるいは駕から低地にいたる緩斜面上である。主な遺跡を挙げておくと、溝から前期中葉の土器とともに板鍬、柳葉形磨製石鏃などを出土した山越遺跡2次調査地、弥生時代各期の遺物の出土のうち、前期突帯文系甕の出土が特徴的な谷町座拝坂（ざわいざか）遺跡、中～後期の溝を多く検出し、なかでも後期の円形周溝状遺構の検出で注目される姫原遺跡などがある。

古墳時代の集落そのものの確認例はさほど多いものではないが、先述の大渕遺跡3次調査で前期の竪穴式住居数棟と古式土師器を多量に出土する流路や後期の掘立柱建物数棟が検出されていたり、西長戸で行われた船ケ谷遺跡2次調査で4世紀末から6世紀前半の祭祀土坑を伴う集落遺構が調査されている。同じく、船ケ谷遺跡4次調査では、古墳時代初頭から後期の集落や流路の検出があり、陶質土器や軟質土器、非陶邑系須恵器など多量の遺物の出土がみられている。これらの集落に対して古墳そのものは周辺の丘陵上に数多く分布している。太山寺山塊北面の勝岡町高月山古墳群の7基の古墳のうち2号墳は、箱式石棺を主体部とする小長方墳で、周溝内より布留Ⅰ式期併行の土師器壺や銅鏃を出土しており、この地域のみならず平野内でも最も古い段階の古墳のひとつである。この古墳群の周辺には同様に箱式石棺を主体部とする古墳群、赤子谷古墳群、坂浪古墳群などが分布しており、この坂浪古墳群中の塔ノ口山古墳では長宜子孫銘内行花文鏡、画像鏡の2面の鏡片が出土し、古い段階の首長墳ともいわれているが、須恵器や人物埴輪等の出土も伝えられており、墳形・主体部とともにその実態については不明な部分が多い。その他、調査地南東1.8kmの低丘陵上にかつて存在した小規模な前方後円墳船ケ谷向山古墳では、くびれ部円筒埴輪樹立列とともに馬、鶏、蓋などの形象埴輪が出土しており、5世紀末頃の年代を与えられている。

沖積低地東方の高縄山系南西麓にも多くの古墳群が分布しているが、そのなかでも福角町所在の市指定文化財北谷古墳や権現町所在の塚本1号墳など、大型石材を用いた横穴式石室を主体部とする6世紀末から7世紀前半代の円墳・方墳というこのエリアでの首長系譜に連なる古墳がよく知られている。また、瀬見古墳群内に属する谷町室岡山薬華寺境内には、阿蘇溶結凝灰岩を刳り抜いた舟形石棺の身部がある。出土地、出土状況等の詳細は不明だが、県内唯一の刳り抜き式石棺の例であり、先ほどの船ケ谷遺跡4次調査の陶質土器や軟質土器の出土例とともに、瀬戸内海上交通ルートの要衝の一角を遺後平野北西部が担っていたことがしのばれる。

古代以降のこの地域についても不明な部分が多く、麻拝坂遺跡の奈良～平安時代の2棟の掘立柱建物、あるいは姫原遺跡の溝、また、船ケ谷遺跡3次調査の掘立柱建物、柵列、井戸等で構成された中世村落遺構などが、遺跡として知られている主なものである。さて、調査地東を南北に走る遍路道、県道183号線を北へ1km上ってゆくと、四国霊場52番札所太山寺がある。739（天平11）年、行基開基と伝えられる寺本堂は、創建以来2度の災害を経て、1305（嘉元3）年の再建になるもので、国宝に指定されている。また、南西1kmの海岸に面した独立丘陵上の港山城跡は14世紀の築城と伝えられ、河野氏の海浜守護としての役割を考えられている。

文献

『松山市の文化財』　松山市教育委員会 1980
『松山市史料集 第2巻 考古編Ⅱ』　松山市教育委員会 1987

阪本安光「松山市・船ケ谷遺跡」愛媛県教育委員会 1984
「愛媛県内古墳－分布調査報告－」愛媛県教育委員会 1991
栗田茂敏・武正良浩『大渕遺跡－１・２次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000
古岡和哉「大渕遺跡－３次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000
長井数秋「農耕文化の形成と発展」『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県教育委員会 1982
梅木謙一・武正良浩「山越遺跡－２次調査－」『山越・久万ノ台の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
西尾幸則「鵜が畔遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会 1986
松村　浄ほか「座抒坂遺跡」『和気・堀江の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
高尾和長『船ケ谷遺跡－２次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1999
相原清二「姫原遺跡」『和気・堀江の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
宮崎泰好「高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会 1988
池田学・宮崎泰好「船ケ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1989
岡野　保『北谷古墳（墳丘・石室実測調査報告書）』松山商科大学史跡研究会 1980
栗田茂敏『北谷主神ノ木古墳・塚本古墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991
藤田富司「讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集報 第12号』倉敷考古館 1976
加島次郎『船ケ谷遺跡－３次調査地－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1999
山之内志郎・高尾和長『船ケ谷遺跡－４次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2002

3．組　織

調査組織

松山市教育委員会	教育長	西原多喜男
文化教育課	課長	藤原　渉
	課長補佐	坪内　晃幸
	第二係長	大西　輝昭
	主任	西尾　幸則
	調査員	池田　学
		松村　淳

刊行組織

松山市教育委員会	教育長	土居　貴美
事務局	局長	石丸　修
	企画官	仙波　和典
	〃	田中　郁夫
	〃	田浦　雅文
文化財課	課長	家久　則雄
	主幹	森川　憲克
	主査	栗山　正芳

(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	古岡　一雄
埋蔵文化財センター	所長兼考古館長	井生谷博一
	次長兼教育普及担当リーダー	重松　幹雄

次長兼調査担当リーダー　山城　武志
主任調査員　栗山　茂敏

調査地　愛媛県松山市石風呂町乙41－8外
調査期間　1980（昭和55）年1月21日～1981（昭和56）年9月28日
調査面積　4,500㎡

第２章　調査の成果

１．H区の調査（図２・３）

H区は、G区の南西に続く低丘陵である。G区の最高所、標高28.5mから南西へ一旦降った標高15mを境にして、再び緩やかに登り、標高21.5mを最高所とする丘陵となっている。この丘陵上で、弥生時代の土坑４基と、H区１号墳～９号墳までの９基の古墳、祭祀跡と考えられる遺構を１箇所検出した。検出された古墳のうち、主体部が遺存していたのは７～９号墳の３基で、いずれも横穴式石室を主体部としている。

（１）弥生時代の遺構と遺物

a．土坑

ＳＫ１（図４）

H調査区中央寄りの最高所で１号墳と３号墳が並んで検出されているが、このうち南西側の３号墳周溝東側直近で検出された。掘り方は２×1.7m程度の楕円形状、底面は直径1.7mのほぼ円形をなす。深さ1.5mで、断面形は若干袋状を呈している。弥生時代の遺構ではないが、弥生土器を出土した穴なので、便宜上ここで扱っておく。最上層には、30～40cm程度、地山である赤褐色、黄褐色、暗褐色のマサ土がブロック状に混淆状態で入っており、この層に弥生土器片が含まれている。その下層にはマサ土や黄褐色の砂が西から流入堆積したような状況を呈している。このような状況から、この土坑は弥生時代の遺物を出土するとはいえ、近現代の芋ツボのような穴が自然に埋まって浅くなったところへ、整地等で弥生時代の遺構とともに削った地山の土を入れて埋めたものと考えられる。

ＳＫ１出土遺物（図５）

弥生土器

甕（１～３）　１は、口径18.0cmを測るもので底部を欠く。折り曲げによる頸部に２本のヘラ描沈線、沈線間に刺突を施す。口端部は丸くおさめ、端部のやや下位に刻み目を施している。外面のハケ目は施で消され、下位に僅かに斜め方向のハケ目が看取されるのみである。２も口縁部折り曲げによる口頸部から胴部上位の片で、頸部には１条の沈線、面をなす口端部には刻み目が施されている。３は、直径6.8cmを測る平底の底部から胴部下位の片で、外面には斜め方向の磨きがみられる。胎土や焼成は、１・２と共通しており、どちらかの底部である可能性が高い。

ＳＫ２（図６）

１号墳の墳丘西端で、周溝に切られて検出された土坑で、長径２m、短径１mの楕円形状のプランをなす。坑底はフラットで、最も残りのよい西側長側辺付近で25cmを測る。黄～暗褐色系の粘質土で埋まっており、弥生土器の小片が若干出土したが、図化に至るものはなかった。

一区
二区
三区
四区
五区
六区
七区
八区
九区
十区
十一区
十二区
十三区
十四区
十五区
十六区
十七区
十八区
十九区
二十区
二十一区
二十二区
二十三区
二十四区
二十五区
二十六区
二十七区
二十八区
二十九区
三十区
三十一区
三十二区
三十三区
三十四区
三十五区
三十六区
三十七区
三十八区
三十九区
四十区
四十一区
四十二区
四十三区
四十四区
四十五区
四十六区
四十七区
四十八区
四十九区
五十区
五十一区
五十二区
五十三区
五十四区
五十五区
五十六区
五十七区
五十八区
五十九区
六十区
六十一区
六十二区
六十三区
六十四区
六十五区
六十六区
六十七区
六十八区
六十九区
七十区
七十一区
七十二区
七十三区
七十四区
七十五区
七十六区
七十七区
七十八区
七十九区
八十区
八十一区
八十二区
八十三区
八十四区
八十五区
八十六区
八十七区
八十八区
八十九区
九十区
九十一区
九十二区
九十三区
九十四区
九十五区
九十六区
九十七区
九十八区
九十九区
百区
百一区
百二区
百三区
百四区
百五区
百六区
百七区
百八区
百九区
百十区
百十一区
百十二区
百十三区
百十四区
百十五区
百十六区
百十七区
百十八区
百十九区
百二十区
百二十一区
百二十二区
百二十三区
百二十四区
百二十五区
百二十六区
百二十七区
百二十八区
百二十九区
百三十区
百三十一区
百三十二区
百三十三区
百三十四区
百三十五区
百三十六区
百三十七区
百三十八区
百三十九区
百四十区
百四十一区
百四十二区
百四十三区
百四十四区
百四十五区
百四十六区
百四十七区
百四十八区
百四十九区
百五十区
百五十一区
百五十二区
百五十三区
百五十四区
百五十五区
百五十六区
百五十七区
百五十八区
百五十九区
百六十区
百六十一区
百六十二区
百六十三区
百六十四区
百六十五区
百六十六区
百六十七区
百六十八区
百六十九区
百七十区
百七十一区
百七十二区
百七十三区
百七十四区
百七十五区
百七十六区
百七十七区
百七十八区
百七十九区
百八十区
百八十一区
百八十二区
百八十三区
百八十四区
百八十五区
百八十六区
百八十七区
百八十八区
百八十九区
百九十区
百九十一区
百九十二区
百九十三区
百九十四区
百九十五区
百九十六区
百九十七区
百九十八区
百九十九区
二百区
二百一区
二百二区
二百三区
二百四区
二百五区
二百六区
二百七区
二百八区
二百九区
二百十区
二百十一区
二百十二区
二百十三区
二百十四区
二百十五区
二百十六区
二百十七区
二百十八区
二百十九区
二百二十区
二百二十一区
二百二十二区
二百二十三区
二百二十四区
二百二十五区
二百二十六区
二百二十七区
二百二十八区
二百二十九区
二百三十区
二百三十一区
二百三十二区
二百三十三区
二百三十四区
二百三十五区
二百三十六区
二百三十七区
二百三十八区
二百三十九区
二百四十区
二百四十一区
二百四十二区
二百四十三区
二百四十四区
二百四十五区
二百四十六区
二百四十七区
二百四十八区
二百四十九区
二百五十区
二百五十一区
二百五十二区
二百五十三区
二百五十四区
二百五十五区
二百五十六区
二百五十七区
二百五十八区
二百五十九区
二百六十区
二百六十一区
二百六十二区
二百六十三区
二百六十四区
二百六十五区
二百六十六区
二百六十七区
二百六十八区
二百六十九区
二百七十区
二百七十一区
二百七十二区
二百七十三区
二百七十四区
二百七十五区
二百七十六区
二百七十七区
二百七十八区
二百七十九区
二百八十区
二百八十一区
二百八十二区
二百八十三区
二百八十四区
二百八十五区
二百八十六区
二百八十七区
二百八十八区
二百八十九区
二百九十区
二百九十一区
二百九十二区
二百九十三区
二百九十四区
二百九十五区
二百九十六区
二百九十七区
二百九十八区
二百九十九区
三百区
三百一区
三百二区
三百三区
三百四区
三百五区
三百六区
三百七区
三百八区
三百九区
三百十区
三百十一区
三百十二区
三百十三区
三百十四区
三百十五区
三百十六区
三百十七区
三百十八区
三百十九区
三百二十区
三百二十一区
三百二十二区
三百二十三区
三百二十四区
三百二十五区
三百二十六区
三百二十七区
三百二十八区
三百二十九区
三百三十区
三百三十一区
三百三十二区
三百三十三区
三百三十四区
三百三十五区
三百三十六区
三百三十七区
三百三十八区
三百三十九区
三百四十区
三百四十一区
三百四十二区
三百四十三区
三百四十四区
三百四十五区
三百四十六区
三百四十七区
三百四十八区
三百四十九区
三百五十区
三百五十一区
三百五十二区
三百五十三区
三百五十四区
三百五十五区
三百五十六区
三百五十七区
三百五十八区
三百五十九区
三百六十区
三百六十一区
三百六十二区
三百六十三区
三百六十四区
三百六十五区
三百六十六区
三百六十七区
三百六十八区
三百六十九区
三百七十区
三百七十一区
三百七十二区
三百七十三区
三百七十四区
三百七十五区
三百七十六区
三百七十七区
三百七十八区
三百七十九区
三百八十区
三百八十一区
三百八十二区
三百八十三区
三百八十四区
三百八十五区
三百八十六区
三百八十七区
三百八十八区
三百八十九区
三百九十区
三百九十一区
三百九十二区
三百九十三区
三百九十四区
三百九十五区
三百九十六区
三百九十七区
三百九十八区
三百九十九区
四百区
四百一区
四百二区
四百三区
四百四区
四百五区
四百六区
四百七区
四百八区
四百九区
四百十区
四百十一区
四百十二区
四百十三区
四百十四区
四百十五区
四百十六区
四百十七区
四百十八区
四百十九区
四百二十区
四百二十一区
四百二十二区
四百二十三区
四百二十四区
四百二十五区
四百二十六区
四百二十七区
四百二十八区
四百二十九区
四百三十区
四百三十一区
四百三十二区
四百三十三区
四百三十四区
四百三十五区
四百三十六区
四百三十七区
四百三十八区
四百三十九区
四百四十区
四百四十一区
四百四十二区
四百四十三区
四百四十四区
四百四十五区
四百四十六区
四百四十七区
四百四十八区
四百四十九区
四百五十区
四百五十一区
四百五十二区
四百五十三区
四百五十四区
四百五十五区
四百五十六区
四百五十七区
四百五十八区
四百五十九区
四百六十区
四百六十一区
四百六十二区
四百六十三区
四百六十四区
四百六十五区
四百六十六区
四百六十七区
四百六十八区
四百六十九区
四百七十区
四百七十一区
四百七十二区
四百七十三区
四百七十四区
四百七十五区
四百七十六区
四百七十七区
四百七十八区
四百七十九区
四百八十区
四百八十一区
四百八十二区
四百八十三区
四百八十四区
四百八十五区
四百八十六区
四百八十七区
四百八十八区
四百八十九区
四百九十区
四百九十一区
四百九十二区
四百九十三区
四百九十四区
四百九十五区
四百九十六区
四百九十七区
四百九十八区
四百九十九区
五百区
五百一区
五百二区
五百三区
五百四区
五百五区
五百六区
五百七区
五百八区
五百九区
五百十区
五百十一区
五百十二区
五百十三区
五百十四区
五百十五区
五百十六区
五百十七区
五百十八区
五百十九区
五百二十区
五百二十一区
五百二十二区
五百二十三区
五百二十四区
五百二十五区
五百二十六区
五百二十七区
五百二十八区
五百二十九区
五百三十区
五百三十一区
五百三十二区
五百三十三区
五百三十四区
五百三十五区
五百三十六区
五百三十七区
五百三十八区
五百三十九区
五百四十区
五百四十一区
五百四十二区
五百四十三区
五百四十四区
五百四十五区
五百四十六区
五百四十七区
五百四十八区
五百四十九区
五百五十区
五百五十一区
五百五十二区
五百五十三区
五百五十四区
五百五十五区
五百五十六区
五百五十七区
五百五十八区
五百五十九区
五百六十区
五百六十一区
五百六十二区
五百六十三区
五百六十四区
五百六十五区
五百六十六区
五百六十七区
五百六十八区
五百六十九区
五百七十区
五百七十一区
五百七十二区
五百七十三区
五百七十四区
五百七十五区
五百七十六区
五百七十七区
五百七十八区
五百七十九区
五百八十区
五百八十一区
五百八十二区
五百八十三区
五百八十四区
五百八十五区
五百八十六区
五百八十七区
五百八十八区
五百八十九区
五百九十区
五百九十一区
五百九十二区
五百九十三区
五百九十四区
五百九十五区
五百九十六区
五百九十七区
五百九十八区
五百九十九区
六百区
六百一区
六百二区
六百三区
六百四区
六百五区
六百六区
六百七区
六百八区
六百九区
六百十区
六百十一区
六百十二区
六百十三区
六百十四区
六百十五区
六百十六区
六百十七区
六百十八区
六百十九区
六百二十区
六百二十一区
六百二十二区
六百二十三区
六百二十四区
六百二十五区
六百二十六区
六百二十七区
六百二十八区
六百二十九区
六百三十区
六百三十一区
六百三十二区
六百三十三区
六百三十四区
六百三十五区
六百三十六区
六百三十七区
六百三十八区
六百三十九区
六百四十区
六百四十一区
六百四十二区
六百四十三区
六百四十四区
六百四十五区
六百四十六区
六百四十七区
六百四十八区
六百四十九区
六百五十区
六百五十一区
六百五十二区
六百五十三区
六百五十四区
六百五十五区
六百五十六区
六百五十七区
六百五十八区
六百五十九区
六百六十区
六百六十一区
六百六十二区
六百六十三区
六百六十四区
六百六十五区
六百六十六区
六百六十七区
六百六十八区
六百六十九区
六百七十区
六百七十一区
六百七十二区
六百七十三区
六百七十四区
六百七十五区
六百七十六区
六百七十七区
六百七十八区
六百七十九区
六百八十区
六百八十一区
六百八十二区
六百八十三区
六百八十四区
六百八十五区
六百八十六区
六百八十七区
六百八十八区
六百八十九区
六百九十区
六百九十一区
六百九十二区
六百九十三区
六百九十四区
六百九十五区
六百九十六区
六百九十七区
六百九十八区
六百九十九区
七百区
七百一区
七百二区
七百三区
七百四区
七百五区
七百六区
七百七区
七百八区
七百九区
七百十区
七百十一区
七百十二区
七百十三区
七百十四区
七百十五区
七百十六区
七百十七区
七百十八区
七百十九区
七百二十区
七百二十一区
七百二十二区
七百二十三区
七百二十四区
七百二十五区
七百二十六区
七百二十七区
七百二十八区
七百二十九区
七百三十区
七百三十一区
七百三十二区
七百三十三区
七百三十四区
七百三十五区
七百三十六区
七百三十七区
七百三十八区
七百三十九区
七百四十区
七百四十一区
七百四十二区
七百四十三区
七百四十四区
七百四十五区
七百四十六区
七百四十七区
七百四十八区
七百四十九区
七百五十区
七百五十一区
七百五十二区
七百五十三区
七百五十四区
七百五十五区
七百五十六区
七百五十七区
七百五十八区
七百五十九区
七百六十区
七百六十一区
七百六十二区
七百六十三区
七百六十四区
七百六十五区
七百六十六区
七百六十七区
七百六十八区
七百六十九区
七百七十区
七百七十一区
七百七十二区
七百七十三区
七百七十四区
七百七十五区
七百七十六区
七百七十七区
七百七十八区
七百七十九区
七百八十区
七百八十一区
七百八十二区
七百八十三区
七百八十四区
七百八十五区
七百八十六区
七百八十七区
七百八十八区
七百八十九区
七百九十区
七百九十一区
七百九十二区
七百九十三区
七百九十四区
七百九十五区
七百九十六区
七百九十七区
七百九十八区
七百九十九区
八百区
八百一区
八百二区
八百三区
八百四区
八百五区
八百六区
八百七区
八百八区
八百九区
八百十区
八百十一区
八百十二区
八百十三区
八百十四区
八百十五区
八百十六区
八百十七区
八百十八区
八百十九区
八百二十区
八百二十一区
八百二十二区
八百二十三区
八百二十四区
八百二十五区
八百二十六区
八百二十七区
八百二十八区
八百二十九区
八百三十区
八百三十一区
八百三十二区
八百三十三区
八百三十四区
八百三十五区
八百三十六区
八百三十七区
八百三十八区
八百三十九区
八百四十区
八百四十一区
八百四十二区
八百四十三区
八百四十四区
八百四十五区
八百四十六区
八百四十七区
八百四十八区
八百四十九区
八百五十区
八百五十一区
八百五十二区
八百五十三区
八百五十四区
八百五十五区
八百五十六区
八百五十七区
八百五十八区
八百五十九区
八百六十区
八百六十一区
八百六十二区
八百六十三区
八百六十四区
八百六十五区
八百六十六区
八百六十七区
八百六十八区
八百六十九区
八百七十区
八百七十一区
八百七十二区
八百七十三区
八百七十四区
八百七十五区
八百七十六区
八百七十七区
八百七十八区
八百七十九区
八百八十区
八百八十一区
八百八十二区
八百八十三区
八百八十四区
八百八十五区
八百八十六区
八百八十七区
八百八十八区
八百八十九区
八百九十区
八百九十一区
八百九十二区
八百九十三区
八百九十四区
八百九十五区
八百九十六区
八百九十七区
八百九十八区
八百九十九区
九百区
九百一区
九百二区
九百三区
九百四区
九百五区
九百六区
九百七区
九百八区
九百九区
九百十区
九百十一区
九百十二区
九百十三区
九百十四区
九百十五区
九百十六区
九百十七区
九百十八区
九百十九区
九百二十区
九百二十一区
九百二十二区
九百二十三区
九百二十四区
九百二十五区
九百二十六区
九百二十七区
九百二十八区
九百二十九区
九百三十区
九百三十一区
九百三十二区
九百三十三区
九百三十四区
九百三十五区
九百三十六区
九百三十七区
九百三十八区
九百三十九区
九百四十区
九百四十一区
九百四十二区
九百四十三区
九百四十四区
九百四十五区
九百四十六区
九百四十七区
九百四十八区
九百四十九区
九百五十区
九百五十一区
九百五十二区
九百五十三区
九百五十四区
九百五十五区
九百五十六区
九百五十七区
九百五十八区
九百五十九区
九百六十区
九百六十一区
九百六十二区
九百六十三区
九百六十四区
九百六十五区
九百六十六区
九百六十七区
九百六十八区
九百六十九区
九百七十区
九百七十一区
九百七十二区
九百七十三区
九百七十四区
九百七十五区
九百七十六区
九百七十七区
九百七十八区
九百七十九区
九百八十区
九百八十一区
九百八十二区
九百八十三区
九百八十四区
九百八十五区
九百八十六区
九百八十七区
九百八十八区
九百八十九区
九百九十区
九百九十一区
九百九十二区
九百九十三区
九百九十四区
九百九十五区
九百九十六区
九百九十七区
九百九十八区
九百九十九区
一千区
一千一区
一千二区
一千三区
一千四区
一千五区
一千六区
一千七区
一千八区
一千九区
一千十区
一千十一区
一千十二区
一千十三区
一千十四区
一千十五区
一千十六区
一千十七区
一千十八区
一千十九区
一千二十区
一千二十一区
一千二十二区
一千二十三区
一千二十四区
一千二十五区
一千二十六区
一千二十七区
一千二十八区
一千二十九区
一千三十区
一千三十一区
一千三十二区
一千三十三区
一千三十四区
一千三十五区
一千三十六区
一千三十七区
一千三十八区
一千三十九区
一千四十区
一千四十一区
一千四十二区
一千四十三区
一千四十四区
一千四十五区
一千四十六区
一千四十七区
一千四十八区
一千四十九区
一千五十区
一千五十一区
一千五十二区
一千五十三区
一千五十四区
一千五十五区
一千五十六区
一千五十七区
一千五十八区
一千五十九区
一千六十区
一千六十一区
一千六十二区
一千六十三区
一千六十四区
一千六十五区
一千六十六区
一千六十七区
一千六十八区
一千六十九区
一千七十区
一千七十一区
一千七十二区
一千七十三区
一千七十四区
一千七十五区
一千七十六区
一千七十七区
一千七十八区
一千七十九区
一千八十区
一千八十一区
一千八十二区
一千八十三区
一千八十四区
一千八十五区
一千八十六区
一千八十七区
一千八十八区
一千八十九区
一千九十区
一千九十一区
一千九十二区
一千九十三区
一千九十四区
一千九十五区
一千九十六区
一千九十七区
一千九十八区
一千九十九区
二千区
二千一区
二千二区
二千三区
二千四区
二千五区
二千六区
二千七区
二千八区
二千九区
二千十区
二千十一区
二千十二区
二千十三区
二千十四区
二千十五区
二千十六区
二千十七区
二千十八区
二千十九区
二千二十区
二千二十一区
二千二十二区
二千二十三区
二千二十四区
二千二十五区
二千二十六区
二千二十七区
二千二十八区
二千二十九区
二千三十区
二千三十一区
二千三十二区
二千三十三区
二千三十四区
二千三十五区
二千三十六区
二千三十七区
二千三十八区
二千三十九区
二千四十区
二千四十一区
二千四十二区
二千四十三区
二千四十四区
二千四十五区
二千四十六区
二千四十七区
二千四十八区
二千四十九区
二千五十区
二千五十一区
二千五十二区
二千五十三区
二千五十四区
二千五十五区
二千五十六区
二千五十七区
二千五十八区
二千五十九区
二千六十区
二千六十一区
二千六十二区
二千六十三区
二千六十四区
二千六十五区
二千六十六区
二千六十七区
二千六十八区
二千六十九区
二千七十区
二千七十一区
二千七十二区
二千七十三区
二千七十四区
二千七十五区
二千七十六区
二千七十七区
二千七十八区
二千七十九区
二千八十区
二千八十一区
二千八十二区
二千八十三区
二千八十四区
二千八十五区
二千八十六区
二千八十七区
二千八十八区
二千八十九区
二千九十区
二千九十一区
二千九十二区
二千九十三区
二千九十四区
二千九十五区
二千九十六区
二千九十七区
二千九十八区
二千九十九区
三千区
三千一区
三千二区
三千三区
三千四区
三千五区
三千六区
三千七区
三千八区
三千九区
三千十区
三千十一区
三千十二区
三千十三区
三千十四区
三千十五区
三千十六区
三千十七区
三千十八区
三千十九区
三千二十区
三千二十一区
三千二十二区
三千二十三区
三千二十四区
三千二十五区
三千二十六区
三千二十七区
三千二十八区
三千二十九区
三千三十区
三千三十一区
三千三十二区
三千三十三区
三千三十四区
三千三十五区
三千三十六区
三千三十七区
三千三十八区
三千三十九区
三千四十区
三千四十一区
三千四十二区
三千四十三区
三千四十四区
三千四十五区
三千四十六区
三千四十七区
三千四十八区
三千四十九区
三千五十区
三千五十一区
三千五十二区
三千五十三区
三千五十四区
三千五十五区
三千五十六区
三千五十七区
三千五十八区
三千五十九区
三千六十区
三千六十一区
三千六十二区
三千六十三区
三千六十四区
三千六十五区
三千六十六区
三千六十七区
三千六十八区
三千六十九区
三千七十区
三千七十一区
三千七十二区
三千七十三区
三千七十四区
三千七十五区
三千七十六区
三千七十七区
三千七十八区
三千七十九区
三千八十区
三千八十一区
三千八十二区
三千八十三区
三千八十四区
三千八十五区
三千八十六区
三千八十七区
三千八十八区
三千八十九区
三千九十区
三千九十一区
三千九十二区
三千九十三区
三千九十四区
三千九十五区
三千九十六区
三千九十七区
三千九十八区
三千九十九区
四千区
四千一区
四千二区
四千三区
四千四区
四千五区
四千六区
四千七区
四千八区
四千九区
四千十区
四千十一区
四千十二区
四千十三区
四千十四区
四千十五区
四千十六区
四千十七区
四千十八区
四千十九区
四千二十区
四千二十一区
四千二十二区
四千二十三区
四千二十四区
四千二十五区
四千二十六区
四千二十七区
四千二十八区
四千二十九区
四千三十区
四千三十一区
四千三十二区
四千三十三区
四千三十四区
四千三十五区
四千三十六区
四千三十七区
四千三十八区
四千三十九区
四千四十区
四千四十一区
四千四十二区
四千四十三区
四千四十四区
四千四十五区
四千四十六区
四千四十七区
四千四十八区
四千四十九区
四千五十区
四千五十一区
四千五十二区
四千五十三区
四千五十四区
四千五十五区
四千五十六区
四千五十七区
四千五十八区
四千五十九区
四千六十区
四千六十一区
四千六十二区
四千六十三区
四千六十四区
四千六十五区
四千六十六区
四千六十七区
四千六十八区
四千六十九区
四千七十区
四千七十一区
四千七十二区
四千七十三区
四千七十四区
四千七十五区
四千七十六区
四千七十七区
四千七十八区
四千七十九区
四千八十区
四千八十一区
四千八十二区
四千八十三区
四千八十四区
四千八十五区
四千八十六区
四千八十七区
四千八十八区
四千八十九区
四千九十区
四千九十一区
四千九十二区
四千九十三区
四千九十四区
四千九十五区
四千九十六区
四千九十七区
四千九十八区
四千九十九区
五千区
五千一区
五千二区
五千三区
五千四区
五千五区
五千六区
五千七区
五千八区
五千九区
五千十区
五千十一区
五千十二区
五千十三区
五千十四区
五千十五区
五千十六区
五千十七区
五千十八区
五千十九区
五千二十区
五千二十一区
五千二十二区
五千二十三区
五千二十四区
五千二十五区
五千二十六区
五千二十七区
五千二十八区
五千二十九区
五千三十区
五千三十一区
五千三十二区
五千三十三区
五千三十四区
五千三十五区
五千三十六区
五千三十七区
五千三十八区
五千三十九区
五千四十区
五千四十一区
五千四十二区
五千四十三区
五千四十四区
五千四十五区
五千四十六区
五千四十七区
五千四十八区
五千四十九区
五千五十区
五千五十一区
五千五十二区
五千五十三区
五千五十四区
五千五十五区
五千五十六区
五千五十七区
五千五十八区
五千五十九区
五千六十区
五千六十一区
五千六十二区
五千六十三区
五千六十四区
五千六十五区
五千六十六区
五千六十七区
五千六十八区
五千六十九区
五千七十区
五千七十一区
五千七十二区
五千七十三区
五千七十四区
五千七十五区
五千七十六区
五千七十七区
五千七十八区
五千七十九区
五千八十区
五千八十一区
五千八十二区
五千八十三区
五千八十四区
五千八十五区
五千八十六区
五千八十七区
五千八十八区
五千八十九区
五千九十区
五千九十一区
五千九十二区
五千九十三区
五千九十四区
五千九十五区
五千九十六区
五千九十七区
五千九十八区
五千九十九区
六千区
六千一区
六千二区
六千三区
六千四区
六千五区
六千六区
六千七区
六千八区
六千九区
六千十区
六千十一区
六千十二区
六千十三区
六千十四区
六千十五区
六千十六区
六千十七区
六千十八区
六千十九区
六千二十区
六千二十一区
六千二十二区
六千二十三区
六千二十四区
六千二十五区
六千二十六区
六千二十七区
六千二十八区
六千二十九区
六千三十区
六千三十一区
六千三十二区
六千三十三区
六千三十四区
六千三十五区
六千三十六区
六千三十七区
六千三十八区
六千三十九区
六千四十区
六千四十一区
六千四十二区
六千四十三区
六千四十四区
六千四十五区
六千四十六区
六千四十七区
六千四十八区
六千四十九区
六千五十区
六千五十一区
六千五十二区
六千五十三区
六千五十四区
六千五十五区
六千五十六区
六千五十七区
六千五十八区
六千五十九区
六千六十区
六千六十一区
六千六十二区
六千六十三区
六千六十四区
六千六十五区
六千六十六区
六千六十七区
六千六十八区
六千六十九区
六千七十区
六千七十一区
六千七十二区
六千七十三区
六千七十四区
六千七十五区
六千七十六区
六千七十七区
六千七十八区
六千七十九区
六千八十区
六千八十一区
六千八十二区
六千八十三区
六千八十四区
六千八十五区
六千八十六区
六千八十七区
六千八十八区
六千八十九区
六千九十区
六千九十一区
六千九十二区
六千九十三区
六千九十四区
六千九十五区
六千九十六区
六千九十七区
六千九十八区
六千九十九区
七千区
七千一区
七千二区
七千三区
七千四区
七千五区
七千六区
七千七区
七千八区
七千九区
七千十区
七千十一区
七千十二区
七千十三区
七千十四区
七千十五区
七千十六区
七千十七区
七千十八区
七千十九区
七千二十区
七千二十一区
七千二十二区
七千二十三区
七千二十四区
七千二十五区
七千二十六区
七千二十七区
七千二十八区
七千二十九区
七千三十区
七千三十一区
七千三十二区
七千三十三区
七千三十四区
七千三十五区
七千三十六区
七千三十七区
七千三十八区
七千三十九区
七千四十区
七千四十一区
七千四十二区
七千四十三区
七千四十四区
七千四十五区
七千四十六区
七千四十七区
七千四十八区
七千四十九区
七千五十区
七千五十一区
七千五十二区
七千五十三区
七千五十四区
七千五十五区
七千五十六区
七千五十七区
七千五十八区
七千五十九区
七千六十区
七千六十一区
七千六十二区
七千六十三区
七千六十四区
七千六十五区
七千六十六区
七千六十七区
七千六十八区
七千六十九区
七千七十区
七千七十一区
七千七十二区
七千七十三区
七千七十四区
七千七十五区
七千七十六区
七千七十七区
七千七十八区
七千七十九区
七千八十区
七千八十一区
七千八十二区
七千八十三区
七千八十四区
七千八十五区
七千八十六区
七千八十七区
七千八十八区
七千八十九区
七千九十区
七千九十一区
七千九十二区
七千九十三区
七千九十四区
七千九十五区
七千九十六区
七千九十七区
七千九十八区
七千九十九区
八千区
八千一区
八千二区
八千三区
八千四区
八千五区
八千六区
八千七区
八千八区
八千九区
八千十区
八千十一区
八千十二区
八千十三区
八千十四区
八千十五区
八千十六区
八千十七区
八千十八区
八千十九区
八千二十区
八千二十一区
八千二十二区
八千二十三区
八千二十四区
八千二十五区
八千二十六区
八千二十七区
八千二十八区
八千二十九区
八千三十区
八千三十一区
八千三十二区
八千三十三区
八千三十四区
八千三十五区
八千三十六区
八千三十七区
八千三十八区
八千三十九区
八千四十区
八千四十一区
八千四十二区
八千四十三区
八千四十四区
八千四十五区
八千四十六区
八千四十七区
八千四十八区
八千四十九区
八千五十区
八千五十一区
八千五十二区
八千五十三区
八千五十四区
八千五十五区
八千五十六区
八千五十七区
八千五十八区
八千五十九区
八千六十区
八千六十一区
八千六十二区
八千六十三区
八千六十四区
八千六十五区
八千六十六区
八千六十七区
八千六十八区
八千六十九区
八千七十区
八千七十一区
八千七十二区
八千七十三区
八千七十四区
八千七十五区
八千七十六区
八千七十七区
八千七十八区
八千七十九区
八千八十区
八千八十一区
八千八十二区
八千八十三区
八千八十四区
八千八十五区
八千八十六区
八千八十七区
八千八十八区
八千八十九区
八千九十区
八千九十一区
八千九十二区
八千九十三区
八千九十四区
八千九十五区
八千九十六区
八千九十七区
八千九十八区
八千九十九区
九千区
九千一区
九千二区
九千三区
九千四区
九千五区
九千六区
九千七区
九千八区
九千九区
九千十区
九千十一区
九千十二区
九千十三区
九千十四区
九千十五区
九千十六区
九千十七区
九千十八区
九千十九区
九千二十区
九千二十一区
九千二十二区
九千二十三区
九千二十四区
九千二十五区
九千二十六区
九千二十七区
九千二十八区
九千二十九区
九千三十区
九千三十一区
九千三十二区
九千三十三区
九千三十四区
九千三十五区
九千三十六区
九千三十七区
九千三十八区
九千三十九区
九千四十区
九千四十一区
九千四十二区
九千四十三区
九千四十四区
九千四十五区
九千四十六区
九千四十七区
九千四十八区
九千四十九区
九千五十区
九千五十一区
九千五十二区
九千五十三区
九千五十四区
九千五十五区
九千五十六区
九千五十七区
九千五十八区
九千五十九区
九千六十区
九千六十一区
九千六十二区
九千六十三区
九千六十四区
九千六十五区
九千六十六区
九千六十七区
九千六十八区
九千六十九区
九千七十区
九千七十一区
九千七十二区
九千七十三区
九千七十四区
九千七十五区
九千七十六区
九千七十七区
九千七十八区
九千七十九区
九千八十区
九千八十一区
九千八十二区
九千八十三区
九千八十四区
九千八十五区
九千八十六区
九千八十七区
九千八十八区
九千八十九区
九千九十区
九千九十一区
九千九十二区
九千九十三区
九千九十四区
九千九十五区
九千九十六区
九千九十七区
九千九十八区
九千九十九区
一万区
一万一区
一万二区
一万三区
一万四区
一万五区
一万六区
一万七区
一万八区
一万九区
一万十区
一万十一区
一万十二区
一万十三区
一万十四区
一万十五区
一万十六区
一万十七区
一万十八区
一万十九区
一万二十区
一万二十一区
一万二十二区
一万二十三区
一万二十四区
一万二十五区
一万二十六区
一万二十七区
一万二十八区
一万二十九区
一万三十区
一万三十一区
一万三十二区
一万三十三区
一万三十四区
一万三十五区
一万三十六区
一万三十七区
一万三十八区
一万三十九区
一万四十区
一万四十一区
一万四十二区
一万四十三区
一万四十四区
一万四十五区
一万四十六区
一万四十七区
一万四十八区
一万四十九区
一万五十区
一万五十一区
一万五十二区
一万五十三区
一万五十四区
一万五十五区
一万五十六区
一万五十七区
一万五十八区
一万五十九区
一万六十区
一万六十一区
一万六十二区
一万六十三区
一万六十四区
一万六十五区
一万六十六区
一万六十七区
一万六十八区
一万六十九区
一万七十区
一万七十一区
一万七十二区
一万七十三区
一万七十四区
一万七十五区
一万七十六区
一万七十七区
一万七十八区
一万七十九区
一万八十区
一万八十一区
一万八十二区
一万八十三区
一万八十四区
一万八十五区
一万八十六区
一万八十七区
一万八十八区
一万八十九区
一万九十区
一万九十一区
一万九十二区
一万九十三区
一万九十四区
一万九十五区
一万九十六区
一万九十七区
一万九十八区
一万九十九区
二万区
二万一区
二万二区
二万三区
二万四区
二万五区
二万六区
二万七区
二万八区
二万九区
二万十区
二万十一区
二万十二区
二万十三区
二万十四区
二万十五区
二万十六区
二万十七区
二万十八区
二万十九区
二万二十区
二万二十一区
二万二十二区
二万二十三区
二万二十四区
二万二十五区
二万二十六区
二万二十七区
二万二十八区
二万二十九区
二万三十区
二万三十一区
二万三十二区
二万三十三区
二万三十四区
二万三十五区
二万三十六区
二万三十七区
二万三十八区
二万三十九区
二万四十区
二万四十一区
二万四十二区
二万四十三区
二万四十四区
二万四十五区
二万四十六区
二万四十七区
二万四十八区
二万四十九区
二万五十区
二万五十一区
二万五十二区
二万五十三区
二万五十四区
二万五十五区
二万五十六区
二万五十七区
二万五十八区
二万五十九区
二万六十区
二万六十一区
二万六十二区
二万六十三区
二万六十四区
二万六十五区
二万六十六区
二万六十七区
二万六十八区
二万六十九区
二万七十区
二万七十一区
二万七十二区
二万七十三区
二万七十四区
二万七十五区
二万七十六区
二万七十七区
二万七十八区
二万七十九区
二万八十区
二万八十一区
二万八十二区
二万八十三区
二万八十四区
二万八十五区
二万八十六区
二万八十七区
二万八十八区
二万八十九区
二万九十区
二万九十一区
二万九十二区
二万九十三区
二万九十四区
二万九十五区
二万九十六区
二万九十七区
二万九十八区
二万九十九区
三万区
三万一区
三万二区
三万三区
三万四区
三万五区
三万六区
三万七区
三万八区
三万九区
三万十区
三万十一区
三万十二区
三万十三区
三万十四区
三万十五区
三万十六区
三万十七区
三万十八区
三万十九区
三万二十区
三万二十一区
三万二十二区
三万二十三区
三万二十四区
三万二十五区
三万二十六区
三万二十七区
三万二十八区
三万二十九区
三万三十区
三万三十一区
三万三十二区
三万三十三区
三万三十四区
三万三十五区
三万三十六区
三万三十七区
三万三十八区
三万三十九区
三万四十区
三万四十一区
三万四十二区
三万四十三区
三万四十四区
三万四十五区
三万四十六区
三万四十七区
三万四十八区
三万四十九区
三万五十区
三万五十一区
三万五十二区
三万五十三区
三万五十四区
三万五十五区
三万五十六区
三万五十七区
三万五十八区
三万五十九区
三万六十区
三万六十一区
三万六十二区
三万六十三区
三万六十四区
三万六十五区
三万六十六区
三万六十七区
三万六十八区
三万六十九区
三万七十区
三万七十一区
三万七十二区
三万七十三区
三万七十四区
三万七十五区
三万七十六区
三万七十七区
三万七十八区
三万七十九区
三万八十区
三万八十一区
三万八十二区
三万八十三区
三万八十四区
三万八十五区
三万八十六区
三万八十七区
三万八十八区
三万八十九区
三万九十区
三万九十一区
三万九十二区
三万九十三区
三万九十四区
三万九十五区
三万九十六区
三万九十七区
三万九十八区
三万九十九区
四万区
四万一区
四万二区
四万三区
四万四区
四万五区
四万六区
四万七区
四万八区
四万九区
四万十区
四万十一区
四万十二区
四万十三区
四万十四区
四万十五区
四万十六区
四万十七区
四万十八区
四万十九区
四万二十区
四万二十一区
四万二十二区
四万二十三区
四万二十四区
四万二十五区
四万二十六区
四万二十七区
四万二十八区
四万二十九区
四万三十区
四万三十一区
四万三十二区
四万三十三区
四万三十四区
四万三十五区
四万三十六区
四万三十七区
四万三十八区
四万三十九区
四万四十区
四万四十一区
四万四十二区
四万四十三区
四万四十四区
四万四十五区
四万四十六区
四万四十七区
四万四十八区
四万四十九区
四万五十区
四万五十一区
四万五十二区
四万五十三区
四万五十四区
四万五十五区
四万五十六区
四万五十七区
四万五十八区
四万五十九区
四万六十区
四万六十一区
四万六十二区
四万六十三区
四万六十四区
四万六十五区
四万六十六区
四万六十七区
四万六十八区
四万六十九区
四万七十区
四万七十一区
四万七十二区
四万七十三区
四万七十四区
四万七十五区
四万七十六区
四万七十七区
四万七十八区
四万七十九区
四万八十区
四万八十一区
四万八十二区
四万八十三区
四万八十四区
四万八十五区
四万八十六区
四万八十七区
四万八十八区
四万八十九区
四万九十区
四万九十一区
四万九十二区
四万九十三区
四万九十四区
四万九十五区
四万九十六区
四万九十七区
四万九十八区
四万九十九区
五万区
五万一区
五万二区
五万三区
五万四区
五万五区
五万六区
五万七区
五万八区
五万九区
五万十区
五万十一区
五万十二区
五万十三区
五万十四区
五万十五区
五万十六区
五万十七区
五万十八区
五万十九区
五万二十区
五万二十一区
五万二十二区
五万二十三区
五万二十四区
五万二十五区
五万二十六区
五万二十七区
五万二十八区
五万二十九区
五万三十区
五万三十一区
五万三十二区
五万三十三区
五万三十四区
五万三十五区
五万三十六区
五万三十七区
五万三十八区
五万三十九区
五万四十区
五万四十一区
五万四十二区
五万四十三区
五万四十四区
五万四十五区
五万四十六区
五万四十七区
五万四十八区
五万四十九区
五万五十区
五万五十一区
五万五十二区
五万五十三区
五万五十四区
五万五十五区
五万五十六区
五万五十七区
五万五十八区
五万五十九区
五万六十区
五万六十一区
五万六十二区
五万六十三区
五万六十四区
五万六十五区
五万六十六区
五万六十七区
五万六十八区
五万六十九区
五万七十区
五万七十一区
五万七十二区
五万七十三区
五万七十四区
五万七十五区
五万七十六区
五万七十七区
五万七十八区
五万七十九区
五万八十区
五万八十一区
五万八十二区
五万八十三区
五万八十四区
五万八十五区
五万八十六区
五万八十七区
五万八十八区
五万八十九区
五万九十区
五万九十一区
五万九十二区
五万九十三区
五万九十四区
五万九十五区
五万九十六区
五万九十七区
五万九十八区
五万九十九区
六万区
六万一区
六万二区
六万三区
六万四区
六万五区
六万六区
六万七区
六万八区
六万九区
六万十区
六万十一区
六万十二区
六万十三区
六万十四区
六万十五区
六万十六区
六万十七区
六万十八区
六万十九区
六万二十区
六万二十一区
六万二十二区
六万二十三区
六万二十四区
六万二十五区
六万二十六区
六万二十七区
六万二十八区
六万二十九区
六万三十区
六万三十一区
六万三十二区
六万三十三区
六万三十四区
六万三十五区
六万三十六区
六万三十七区
六万三十八区
六万三十九区
六万四十区
六万四十一区
六万四十二区
六万四十三区
六万四十四区
六万四十五区
六万四十六区
六万四十七区
六万四十八区
六万四十九区
六万五十区
六万五十一区
六万五十二区
六万五十三区
六万五十四区
六万五十五区
六万五十六区
六万五十七区
六万五十八区
六

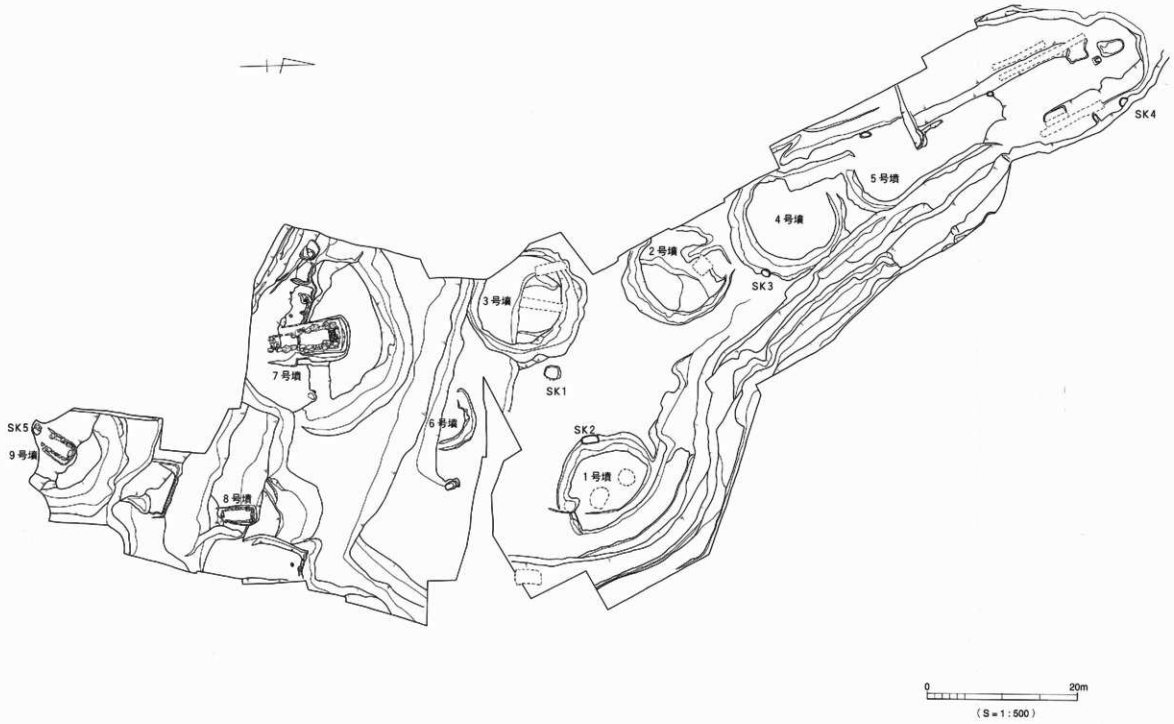
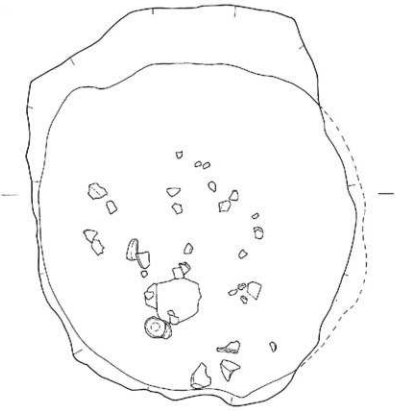

SK4
5号墳
4号墳
2号墳
SK3
3号墳
7号墳
SK1
SK5
9号墳
6号墳
SK2
1号墳
8号墳
0
20m
（S＝1：500）

図3　H区遺構配置図



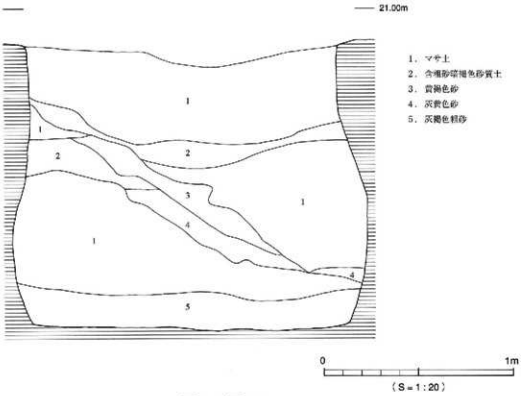


図4　H区SK1

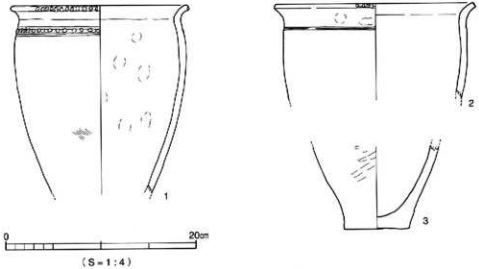


図5　H区SK1出土遺物

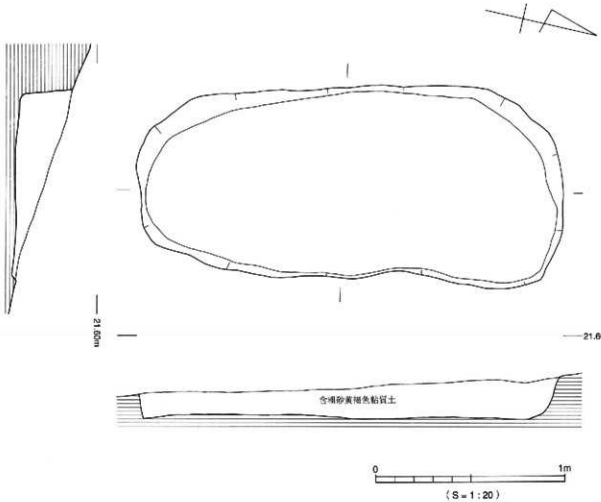


図6　H区SK2

ＳＫ３（図７）

４号墳の南側、周溝に切られた状態で検出された。現況で、長径1.1m、短径0.85mの楕円形プランをなしている。最も残りのよい南東側で、深さ0.5mを測る。弥生土器片が数点出土した。

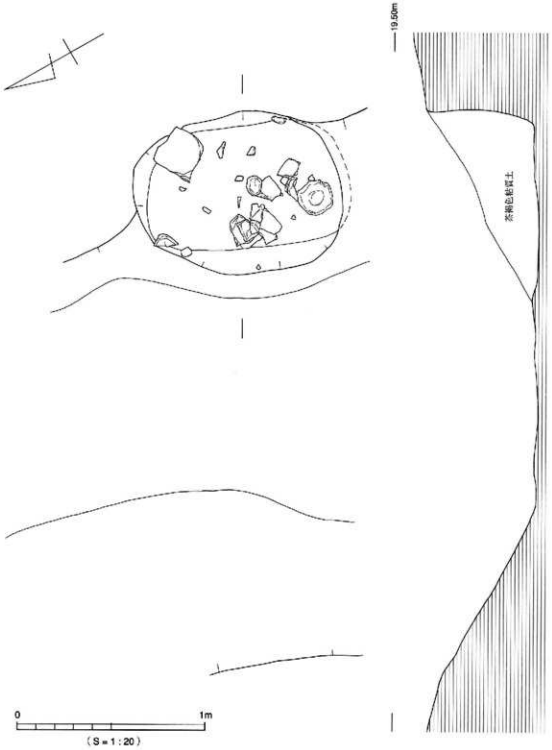


図７　H区SK３

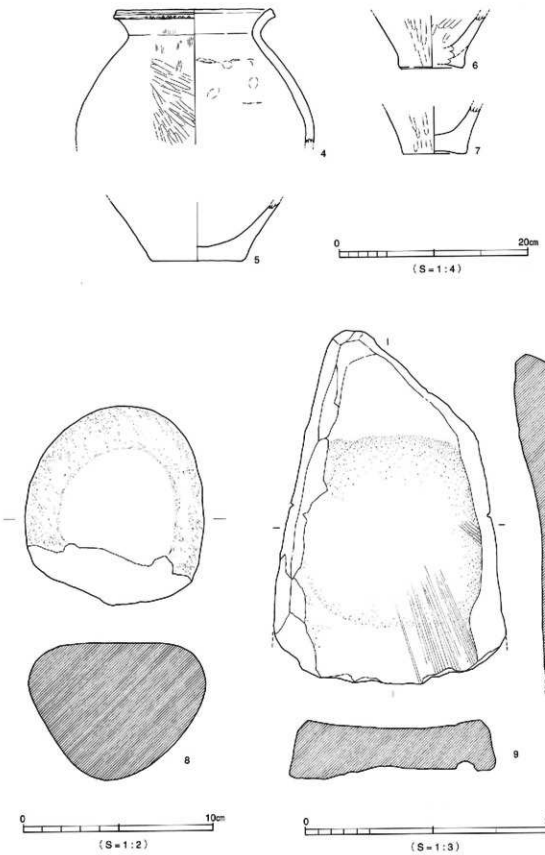


図8　H区SK3出土遺物

ＳＫ３出土遺物（図８）

弥生土器

壺（４・５）　４は口頸部から胴部上位の片で、復元口径16.0cmを測る。外上方に短く開く口縁部は端部に面を持ち、端面にヘラ描による沈線が１条巡り、端部下端には刻み目が施されている。胴部外面の調整は斜めから縦方向のヘラ磨き、内面は丁寧に撫でられている。５は平底の底部、底径9.6cmを測るものである。

甕（６・７）　いずれも若干の歪み底になるもので、外面を縦方向に磨かれている。

石製品

擦り石（８）　横断面おむすび形の砂岩転石の２面を使用する擦り石破損品。

台石（９）　平面形が台形に近い扁平な角礫凝灰岩の一面を擦り面として使用している。

ＳＫ４（図９）

H区の北端、G区との境付近で検出された。その東部は丘陵法面となって失われているが、直径１

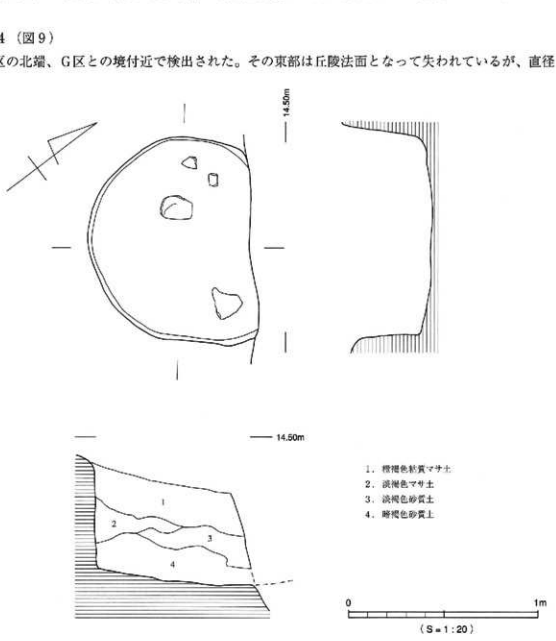


図９　H区SK４

mの円形土坑であったものと考えられる。深さ0.6mを測る。褐色系の埋土とともに弥生土器片の出土があったが、図化可能なものはなかった。

ＳＫ５（図10）

Ｈ区丘陵最南端で、９号墳横穴式石室の羨道部西側壁石材下面で検出された円形土坑で、直径1.1mを測る。断面形は僅かな袋状を呈しており、坑底はほぼフラット、深さは最深部で0.6mの遺存であった。淡褐色の粘土質の土で埋まっており、底近くから小型甕の完形品を出土している。

ＳＫ５出土遺物（図11）

弥生土器

甕（10）　器高13.5cm、口径11.5cm、底径は直径5.3cmのやや突出した平底である。胴部の張りを上位に持ち、短い口縁部をほぼ水平方向につまみ出す。平坦な口縁部上面から頸部の外面に抜ける斜め方向の穿孔が、２孔一組となって相対する２方向に穿たれている。なお、穿孔は焼成前のものである。

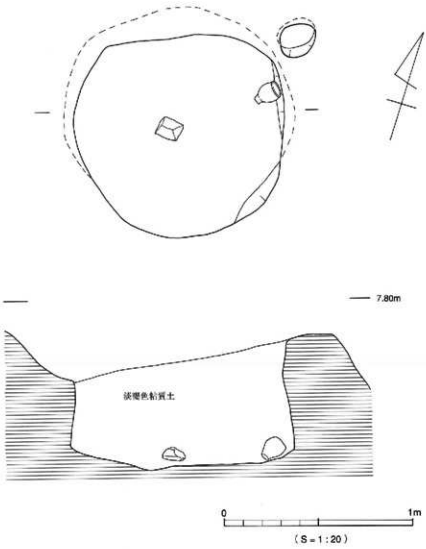


図10　Ｈ区ＳＫ５

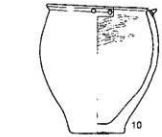


図11　H区SK5出土遺物

b．その他の弥生遺物（図12）

弥生土器

甕（11～14）　口縁部2点のうち11は突帯文系のもの、尖り気味に丸くおさめられた口端部から外面のやや下がった部位まで断面三角形の突帯を貼り付け、その下端部に刻み目を施している。前期後半のもの。12は内外面無文の、折り曲げによる口縁部で、胴部の外面には撫で消されたハケ目の痕跡がうかがえる。中期中葉のものか。底部2点のうち、13は若干窪むが平底といってよいもの、内面にオコゲ状の炭化物が付着している。14は平底のもので、それぞれ底径6.2cm、5.7cmを測る。やはり中期のものであろう。

鉢（15）　同一個体の小破片3点が出土している。それぞれが小片のため、傾きに若干の不安はあるが、鉢形土器になるものと思われる。緩く折り曲げられた口縁部の外面は無文だが、頸部の内面に4条の沈線が巡っている。細く浅い沈線は1本ごとに施され、沈線間は比較的間隔があいている。出自、年代等不詳の部分が多いが、後期前半頃のものか。

壺（16～22）　口縁部16と胴部17は同一個体と思われる胎土・焼成で、どちらも暗赤褐色、堅緻に焼成されている。16は復元口径19.8cm、端部をやや下方に拡張し、上下端に細かい刻み目を施す。頸部外面には沈線が6条まで確認できる。内面には、断面三角形の細い突帯が貼り付けられているが、これらの突帯も刻まれている。胴部上位の片17の外面にも、16と同様の沈線が8条巡っている。前期末～中期初頭のものである。18は胴部上位、肩部の破片で、外面にヘラ描による施文を持つ。4条の沈線で上下に区画された、それぞれの区画をおそらく2本の縦沈線でさらに区画し、その区画に木葉文を描いているものと思われる。19～22は平底の底部片で、これらも中期に属すると考えられる。

石製品

石錘（23）　厚さ1.4cm程度の緑泥片岩転石の周縁を、粗い打ち欠きによって長方形状に整形し、相対する短辺に紐掛けの窪みを設けたもの。重量159.7gを量る。

石鏃（24・25）　両者ともサヌカイトを素材とする凹基無茎式の打製石鏃で、25は尖端部を欠いている。サイズ、形態ともに似通っており、完形の24で重量0.49gを量る。

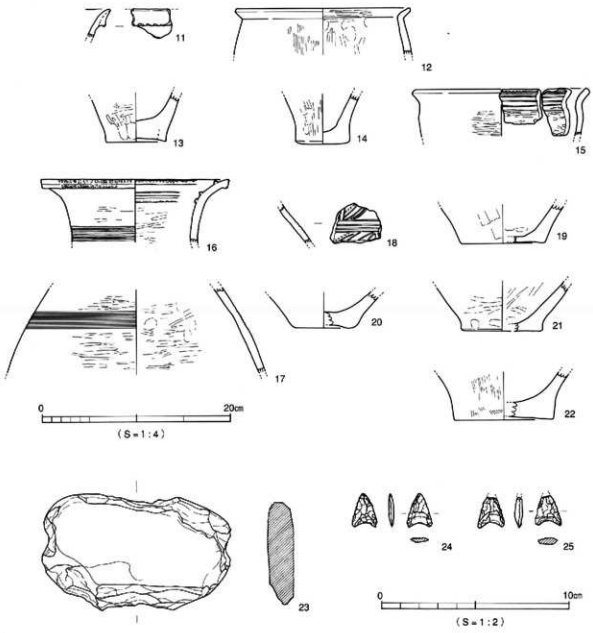


図12　H区出土弥生遺物

(2) 古墳時代の遺構と遺物 (図3・13)

H区最高所および、これより北へ下る尾根線上で1～5号墳までの5基、南へ下る斜面で6～9号墳の4基の古墳が検出されている。調査は、最高所の1号墳から北へ順に5号墳まで下り、日程等の都合上ここで一旦中断して、J区、L区の調査を先に実施し、その後再びH区に戻って残りの南斜面の6～9号墳の調査を行った。これらのうち1～6号墳は、北側のG区同様、盛土の遺存はなく地山面に周溝の痕跡として遺存するのみであった。

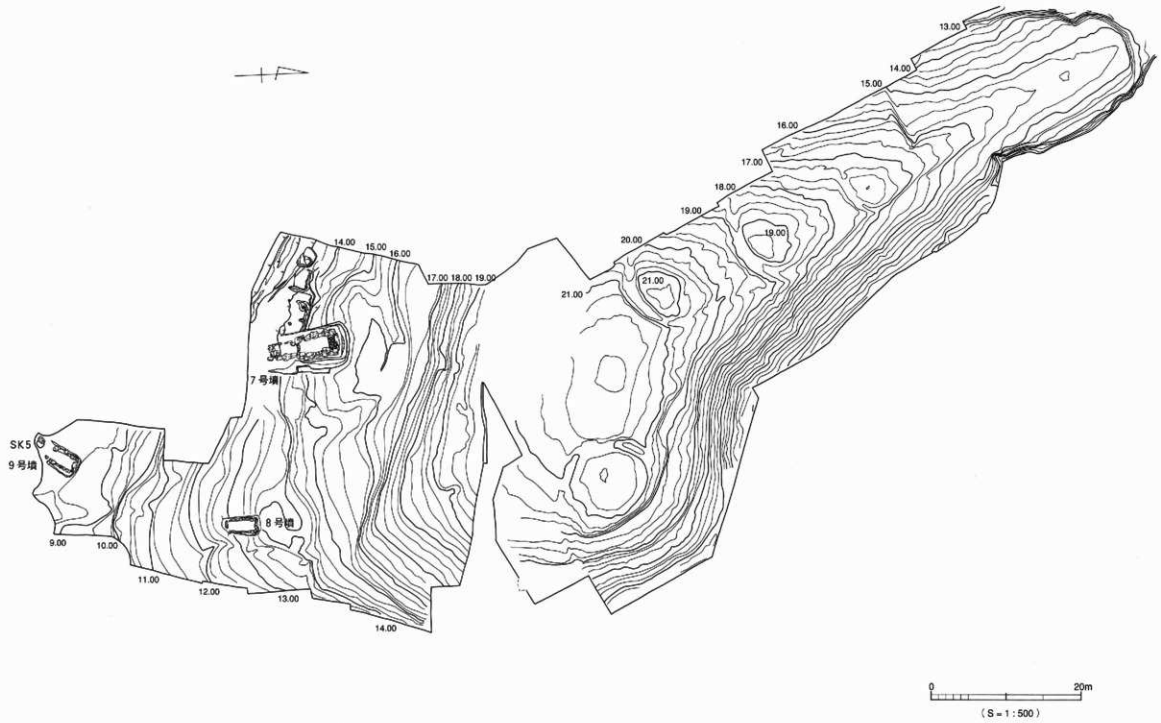


図13　H区完掘後コンター図

a．H区１号墳〔図14〕

墳丘の東半分を果樹園の段カットによって失われ、西半の周溝のみの遺存であった。南北での周溝

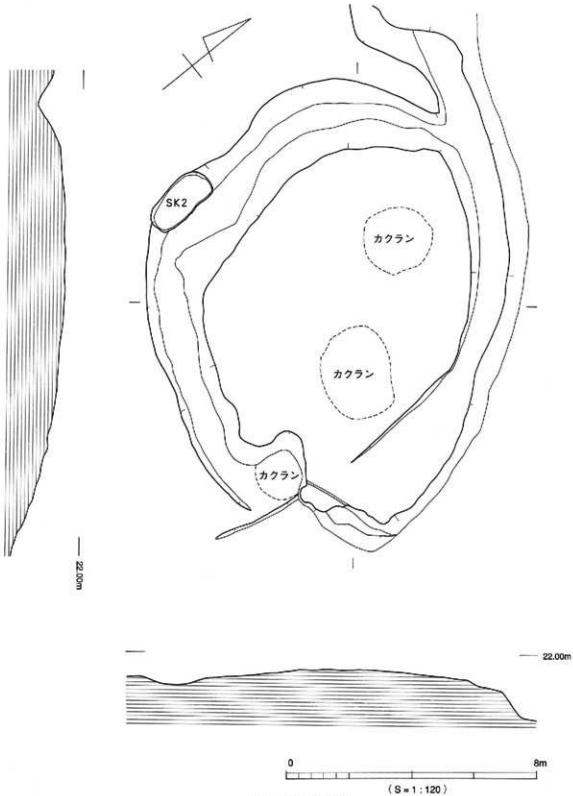


図14　H区１号墳

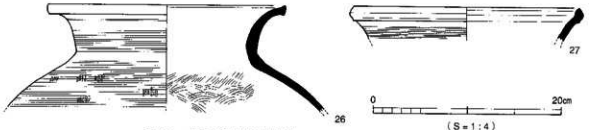


図15　H区１号墳出土遺物

外側までの差し渡しは14mとなっている。先述のように、弥生時代の土坑ＳＫ２を切っている。周溝内より若干の須恵器片の出土があった。

１号墳周溝出土遺物（図15）

須恵器

甕（26・27）　26は、口径25.3cmを測る口頸部。外反しながら外上方へ開く口縁部は、端部を上下に僅かに肥厚させ、外面に丸みをおびた面を持たせる。胴部の外面は叩きの後カキ目を施され、また頸部にもカキ目が施されるが、後に撫でている。胴部の内面は比較的細かな青海波の叩き目である。27は口縁部小片、口端部外面の下端に接して、低い断面三角形の突帯が１条巡るものである。

ｂ．H区２号墳（図16）

１号墳の北西15m、３号墳の北５mで検出された円墳で、東半の周溝が遺存していた。墳丘規模は１号墳とほぼ同じで、南北での差し渡しが周溝外側まで15mとなっている。

２号墳周溝出土遺物（図18）

須恵器

坏（28～30）　いずれも蓋で、天井部、口縁部境に稜を持つものである。28・29は比較的天井が低く、30はこれらに比べて高い。

甕（31～33）　31は口縁下外面に稜を持って大きく開く口頸部片、頸部に櫛描波状文を施されている。32は口頸部を欠く小型のもので、扁平な胴部にやや尖り気味の底部といった算盤玉状の形態をなしている。胴張り部に櫛描波状文を持つ。33は大型品の胴部、最大径を肩部に持ち、その復元径28.8cmを測る。この部位に２条の沈線、その直上に櫛描波状文が施されている。

甕（34）　復元口径16.4cmを測る口頸部片。口端部を僅かに上方に摘み上げ、外面には口端部に接して薄い板状の突帯を貼り付けている。

ｃ．H区３号墳（図17）

周溝外側での差し渡し約20mを測る円墳で、斜面上方である北側の周溝の残りが最もよく、幅４m、深さ0.4m程度残っている。

３号墳出土遺物（図19）

須恵器

甕（35～37）　口頸部あるいは口頸部～肩部の片で、35から順に復元口径24.6cm、20.7cm、21.8cmを測る。いずれも口端部外面に断面三角形の突帯を持つが、35・36とは異なり、37では口端部をやや

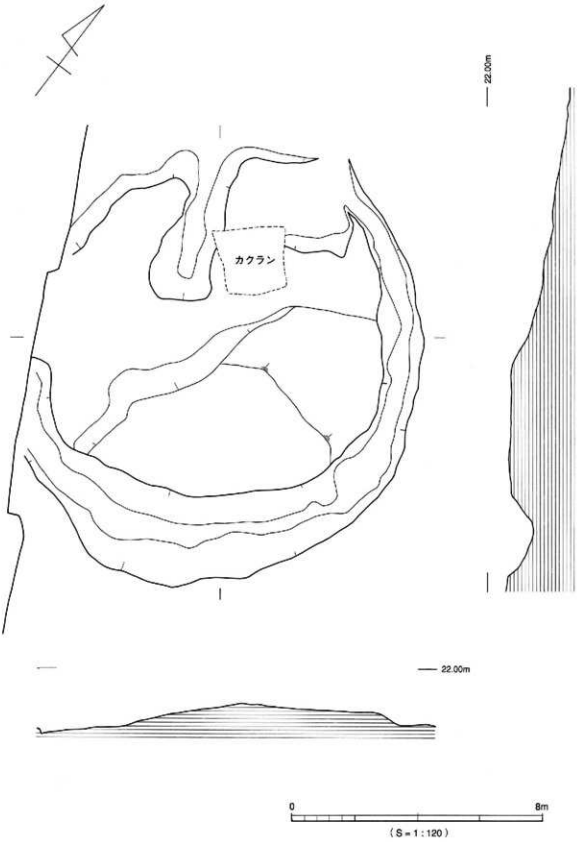


図16　H区2号墳

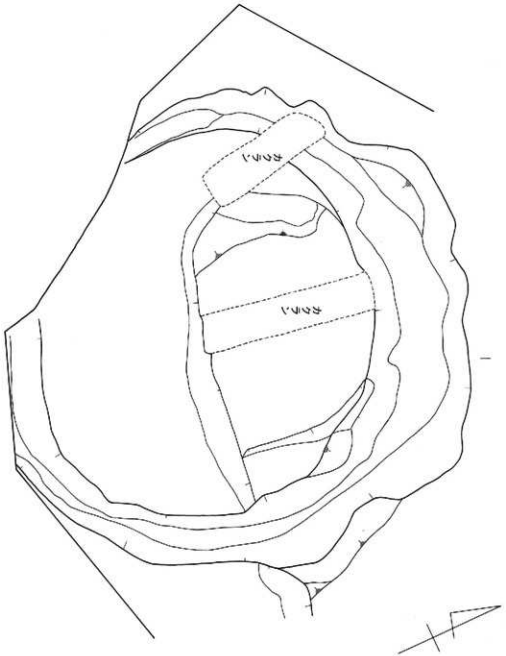


図17 H区3号墳

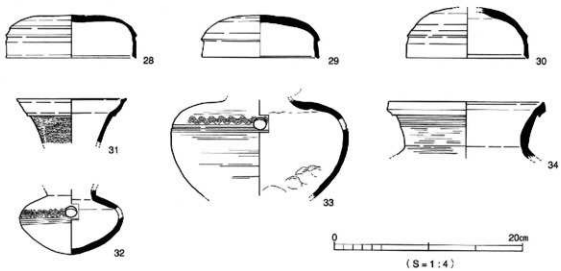


図18　H区２号墳出土遺物

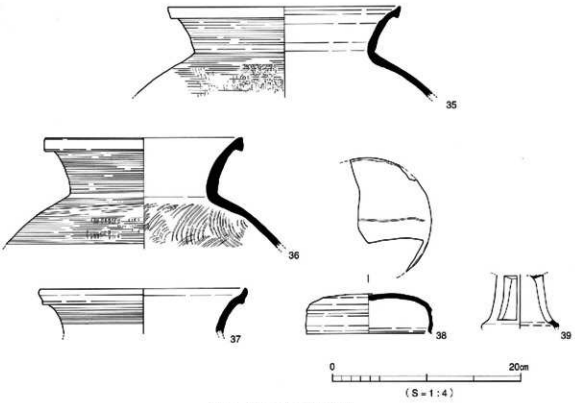


図19　H区３号墳出土遺物

下がった位置に、細い突帯が貼り付けられている。

坏（38）　器高4.2㎝、復元口径13.2㎝を測る蓋。内湾気味の口縁部は端部に鈍い段を持ち、外端で接地する。稜のやや上まで回転ヘラ削りされるやや低めの天井部外面には、細く浅い一本線のヘラ記号がある。糸切痕は時計方向に回っている。

高坏（39）　端脚有蓋高坏の脚部片。透孔は３方向に復元できる。

d．H区4号墳（図20）

H区からG区境に下る斜面で、南より2号、4号、5号墳と連続して、お互いほぼ接するような位置関係で検出されている。墳丘直径13.5m、周溝外側までの差し渡し南北で18.5mの円墳である。遺存のよい斜面上方、南側での周溝最大幅3.5m、深さ0.45mを測る。遺物の出土はない。

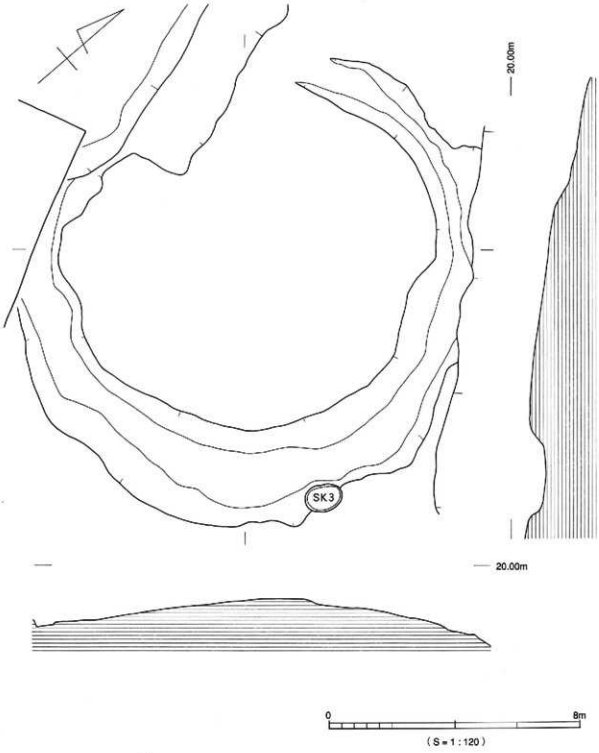


図20　H区4号墳

e．H区5号墳（図21）

前述のような位置関係で検出されたものであるが、東西を果樹園の段カットによって切られ、また南を削平されているため、残っているのは地山面に残された、深さ0.4m、U字状断面を呈する南側周溝の一部のみで、三日月状のプランで検出された。遺物の出土はない。

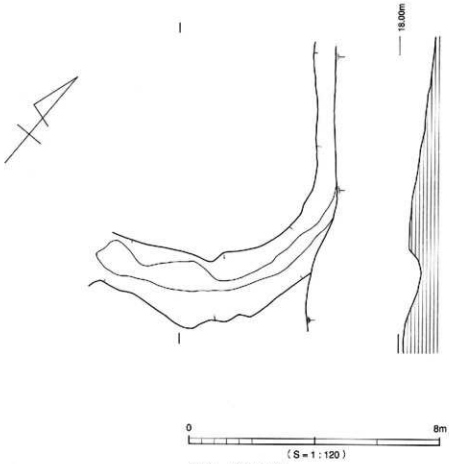


図21　H区5号墳

f．H区6号墳（図22）

H区南斜面、3号墳の東7m、7号墳丘上方で検出された円墳と思われる遺構であるが、これも段カット等によって削平され、やはり斜面上方の周溝のみが三日月状に検出されている。遺物の出土はみられなかった。

g．H区7号墳

墳丘・周溝（図3）

H区の南斜面西部で検出された、横穴式石室を主体部とする古墳である。主体部上方斜面の地山面から周溝が、また下方では僅かな盛土の残存と地山の整形痕が検出されており、これらからすると、墳丘は本来直径20m前後の円墳であったものと思われる。周溝は最大幅約5m、最深部で0.5mの深さ、主体部上方墳丘を半周するかっこうで検出されている。なお、後述するが、主体部羨道西周辺の墳丘に残存した盛土下層から、古墳を遡る時期の祭祀跡と考えられる、焼土・灰、土師器群を伴った

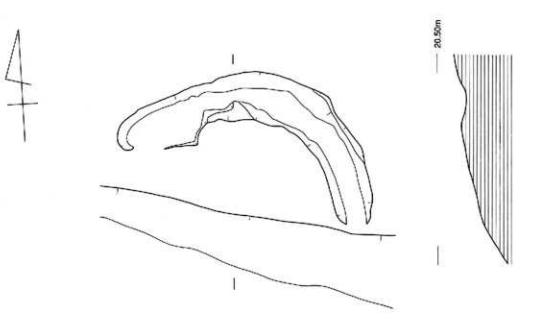


図22　H区６号墳

遺構が検出されている。

７号墳周溝出土遺物

須恵器（図23）

短頸壺（40）　器高6.0cm、口径5.2cmの小型のもの。底部は、切り離しの後軽く撫でられているのみである。暗赤褐色に焼成されている。

主体部（図24・25）

主体部は南に開口する横穴式石室である。大型の石材を用いた、両袖型の大型石室であるが、基底石あるいは、高くてもこれより２段目の石材までしか残っておらず、右袖やこれに続く羨道部分は抜き痕として確認できるのみで、石材の遺存はない。石室壁体を構成する石材には砂岩を用いている。石室規模は、全長9.0m、うち玄室長5.0m、幅2.2mとなっている。残存石材と抜き痕からすると玄門幅は約１mである。左袖石材は羨道壁体よりも0.2m程度内側へ突出していることからすると、羨道幅は1.4m前後であったものと思われる。最も残りのよい奥壁部で残存高1.7mを測る。玄門部の床面には、横長の砂岩石材を１石、さらにその上に扁平な小ぶりの石材を並べて框としているが、羨道床面と玄室床面に段差はなく、框を跨いで玄室に進入する構造となっている。玄室奥より0.9mの床には緑泥片岩の板石を４石立て並べて仕切りとしているが、このうち両側壁寄りの２石は高さ0.7mの高さに縦置きし、これらに挟まれた２石を0.35mの高さに横置きして段差を設けている。また西側壁寄りには奥壁に接した状態で、高さ0.55m

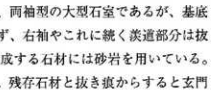


図23　H区７号墳周溝出土遺物

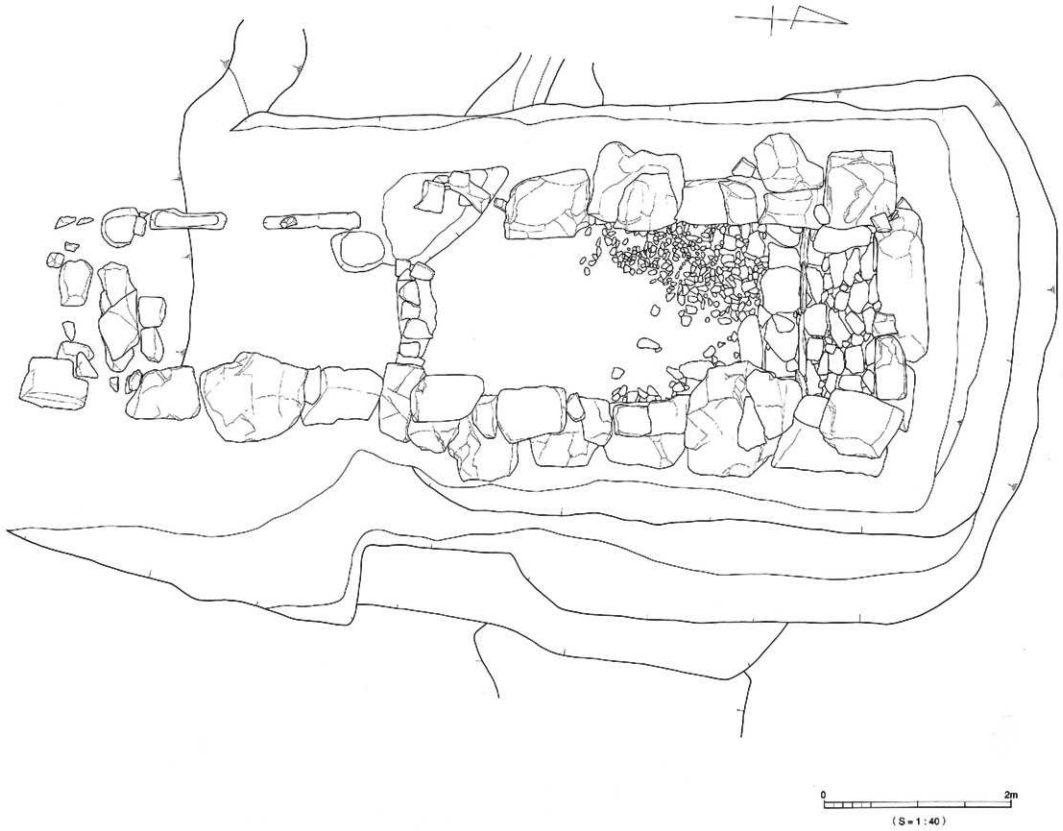


図24　H区7号墳横穴式石室平面図

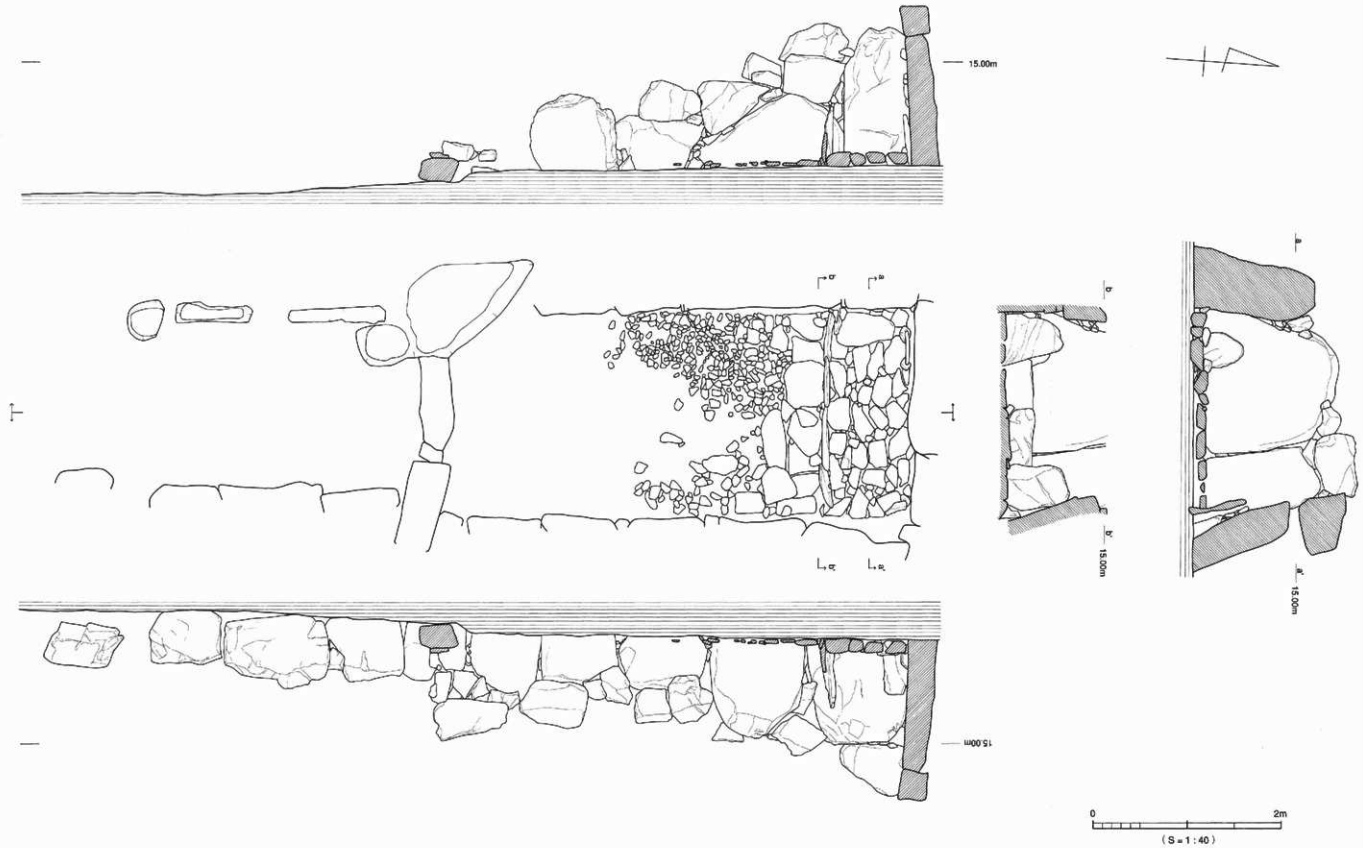


図25　H区7号墳横穴式石室展開図

の板石を、また、東側壁に接して奥壁直近にも高さ0.6mの板石を立てている。これらのことからすると、現存はしていないが、本来、縦置きした4石を支えとした天井石が載って、いわゆる石屋形に近い施設であったものと考えられる。この区画内部の床面には30cm前後の板状砂岩が敷き詰められている。また、区画前面の床には、内部と石材を違え、立石と同様の緑泥片岩板石がおよそ前後の2列にわたって敷きつめられている。この施設より手前の玄室床面は攪乱が著しいが、中ほどより奥の西側壁寄りには、拳大あるいはそれよりもやや大きめの砂岩割り石がまとまって検出されていることから、玄室床面にはこれらを用いた礫床を設けていたものと考えられる。

石室内の遺物出土状況と被葬者（図26・27）

上述のように、石室は半壊状態、玄室床面も攪乱され、玄室奥の石屋形状屍床区画の天井石が抜かれているのをはじめとして、玄室床面に本来敷きつめてあったと考えられる礫床石材も一部を除いてほとんどが現存していない状況であった。副葬土器や鉄製品をみてもおよそ原位置をとどめていると考えられるものはない。主だったものの出土位置をあげていくと、玄室中央付近で須恵器の高坏2個体と平瓶、中央西側壁近くに須恵器の高坏、玄門右袖に須恵器坏蓋と土師器高坏脚部、玄室中軸ラインよりやや東寄りの玄門を少し入った位置で須恵器高坏の出土がある。これらのうち、比較的最終埋葬時の位置をとどめていると考えられるのは玄門右袖の遺物2個体であろうか。その他は玄室内のいずれかから動いてきて現在の位置にあるものと思われる。鉄製品もほとんどのものが破壊され、玄室中央より奥に散らばっている状況であるが、玄室西側壁付近に、直刀片や石突を含む比較的多くの鉄製品があるので、この付近にある程度鉄製品がまとまって副葬されていた可能性がある。また、屍床区画前面の敷石施設上、東側壁近くにもこの石室では比較的よい状態の直刀が検出されており、加えてこの付近で金銅製足金物の出土もあるので、この直刀ひと振りは原位置に近いものと思われる。

ここで装身具や人骨、歯などの出土位置をみてみると、玄室奥の屍床区画からは一対の耳環と18点のガラス小玉の出土がある。後述するように、これら一対の耳環は製作技法に異なった部分はあるものの、同形同大の一対である。さらに18点のガラス小玉はいずれも黄緑色の粟玉に近いきわめて小さいものに統一されており、耳環やこの区画で出土した1点の刀子とともに、ここに想定される被葬者の持ち物と考えられるので、この区画には1体の被葬者が想定できる。ただし、耳環の位置が東西に離れている上、ガラス玉は水洗による出土のため、詳細な出土位置が不明である。施設の状況から、被葬者は東西に安置されていたことは疑いないが、頭位については不詳とせざるを得ない。

その他の玄室出土の耳環6個については、床面がかなり攪乱されているとはいえ、その出土位置やサイズから、少なくともうち4個のセット関係は成立するものと考えられる。うち一対は、屍床区画前面の敷石施設上、西側壁直近での検出である。また他の一対は、玄室中央よりやや奥の東側壁から0.6mほど離れた位置での検出であった。これらセットをなす耳環が被葬者の本来の埋葬位置を示すものではないが、動いたにせよ少なくとも2体分の頭骨が最終的にこれらの耳環とともにこの位置にあったことは間違いない。さらに、玄室中軸ラインの敷石近くに1箇所玉類のまとまりがみられる箇所がある。先の二対の耳環のうち1組は、この付近から動いた可能性が高いといえよう。したがって耳環の組み合わせから、3体の被葬者を想定することができる。加えて、残り2個体の耳環は、それぞれ法量、製作技法が異なっており、セットとは考えにくいことからすると、これら3体の外にさらに2体の被葬者を想定することも可能である。

図26　H区７号墳横穴式石室遺物出土状況（１）

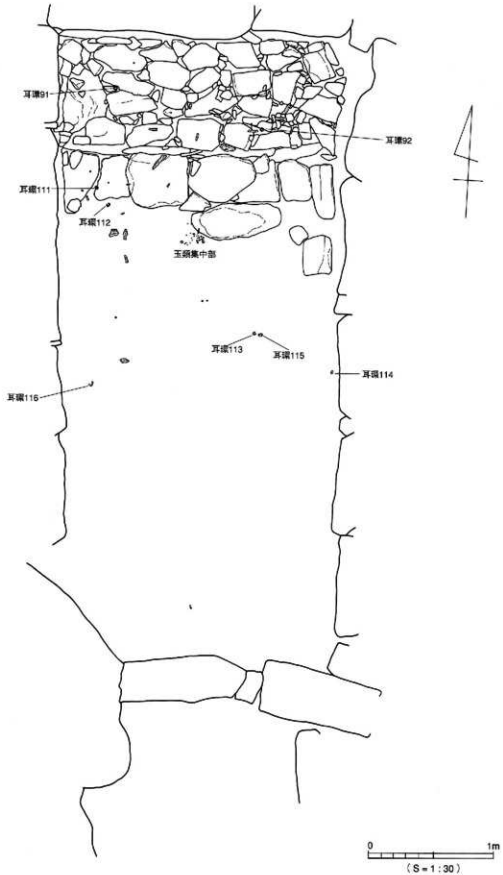


図27　H区７号墳横穴式石室遺物出土状況（２）

主体部出土遺物

須恵器（図28）

蓋（41）　有釜短頸壺の蓋、器高4.4cm、口径10.8cmを測る。天井部から鈍い稜を持って口縁部が垂直に降り、口端部は丸く収められている。天井部の内面は縦撫でされている。轆轤回転は時計方向である。

高坏（42～46）　42は坏部の片、長脚二段透かしの高坏になるものと思われる。坏底部と口縁部の間に2条の稜が巡る。43～45は椀形の坏形態をなすもので、うち長脚の43は、坏部が大きく焼け歪んでいる。脚部外面中位に2条の沈線、坏部外面には幅広の凹線状の撫で窪みが1条巡っている。44は、43よりもやや脚が低いもので、器高11.5cm、口径13.0cm、脚裾径10.6cmを測る。脚部中位と坏部中位の外面にそれぞれ1条ずつの沈線が施されている。焼成は甘く、灰白色の色調を呈する。45も非常に焼きが甘く、瓦質に焼成された、短脚、椀形態もの。器高7.5cm、口径12.3cm、脚裾径9.0cmを測る。46は、器高5.8cm、口径8.7cm、脚裾径7.2cmを測る小型のもの。坏底部と口縁部の境に1条の沈線を持つ。

平瓶（47）　器高12.6cm、口径5.9cm、胴部最大径13.3cmを測る完形品。胴部下位に坏片の熔着がある。

土師器（図28）

高坏（48）　坏部を欠くもので、脚高9.5cm、裾部径12.8cmを測る。円柱状の脚柱部は半分中実に近く、また、裾は面で接地する。裾端部は玉縁状に肥厚している。

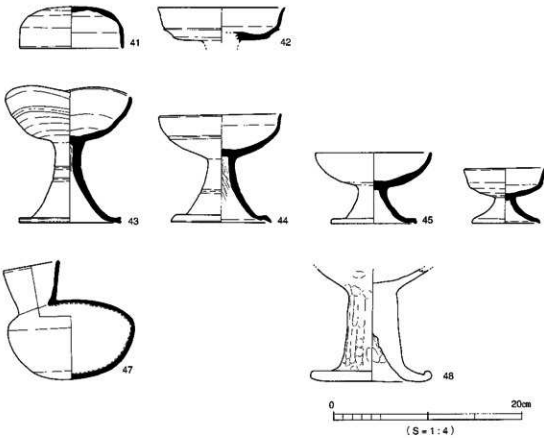


図28　H区7号墳横穴式石室出土遺物（1）

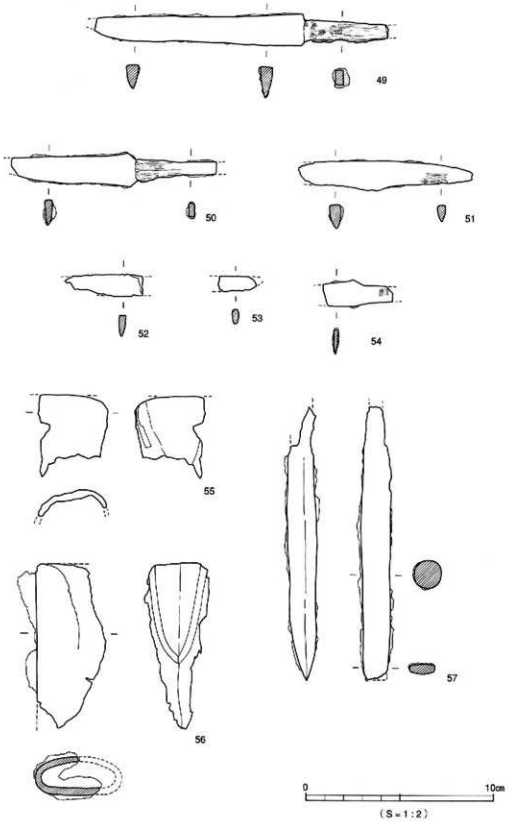


図29　H区７号墳横穴式石室出土遺物（２）

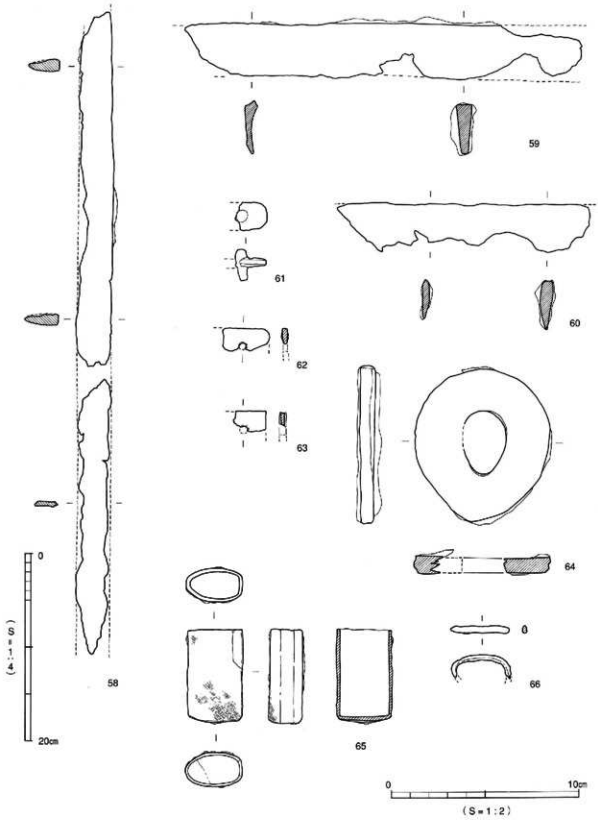


図30　H区7号墳横穴式石室出土遺物（3）

鉄製品（図29～31）

刀子（49～54）　49は、玄室奥、屍床区画からの出土で、実測可能な鉄製品としては、この区画からはこの1点のみである。鋒と茎尻を欠き、現況で長さ15.6cmを測る。棟と刃の双方に関を持つ両関のもので、棟幅は0.5cm、茎には木質の付着がある。50も同様に両関の形態のもの、49よりはやや小ぶりか。54の関部の小破片も同形態のものと思われる。51は刃関のみを有する片関のものである。

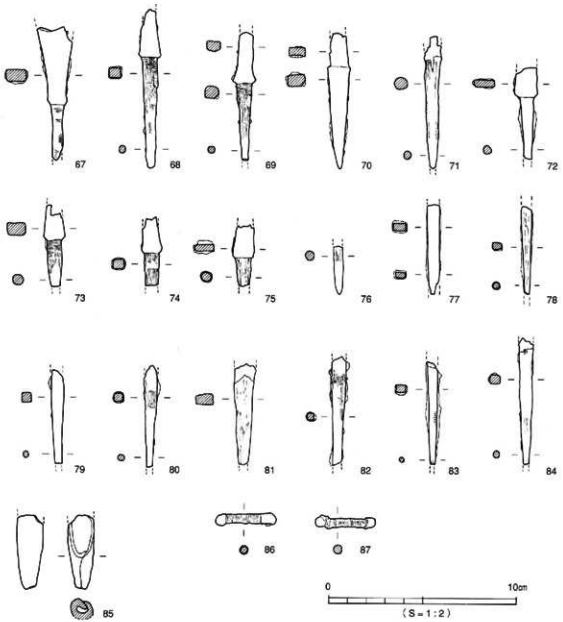


図31　H区7号墳横穴式石室出土遺物（4）

鉄斧（55・56）　55は、袋部と思われる破片、56は袋部の合わせ目の部分で斜めにそがれたように破損している個体で、刃部も遺存していない。

鑿（57）　断面円形の鉄棒の一端を蛤刃状に造りだした工具で、折損しているが、現況法量で、長さ14.5㎝、重量77.7ｇとなっている。

直刀・刀装具（58～66）　58は、石屋形前面の敷石施設上、東側壁近くで出土したもので、現況では接合しないが、出土時には60㎝あまりの１個体として検出されたものである。身幅3.5㎝の平づくりの直刀の身の一部、59・60も同一個体と思われる。61～63は、目釘および目釘孔を伴った茎の一部である。64は鐔、長径8.4㎝、短径7.2㎝の倒卵形、厚さ0.9㎝を測る。中央に3.4×2.4㎝大の相似形の把孔を持つが、小透しは持たない。65・66は石突、65は厚さ0.15㎝の鉄板を素材にした、長さ5.0㎝の袋状を呈する石突本体で、横断面形は3.1×2.4㎝の倒卵形を呈する。66は、後述する８号墳出土の同形態のもの、186から判断すると、65の上端部を縁取っていた部品と考えられる。

鉄鏃（67～84）　18点を掲載したが、完存品は１点もない。おおよその形態が想定できるのは、67で、鏃頭鏃の一部であると考えられる。その他、68～75は篦被部の片、その他は茎の破片である。このうち、81は端部に近づくにしたがって幅・厚みを減じて楔状を呈する形態となっているので、鏃ではなく、刀子の茎のようなものであるかもしれない。

石突（85）　矛または槍の石突と思われるもの。残存長3.9㎝を測る袋状の片である。

両頭金具（86・87）　長さ3.2㎝、直径0.4～0.6㎝程度の鉄棒の両端をかしめるように潰したもの。その間の1.8㎝程の部分に、軸に直交する木質が観察できる。

銅製品（図32）

刀装具（88・89）　器種不明の90も含めて、金の痕跡は残っていないが、本来は金銅製品であったものと思われる。この２点は足金物で、状態のよい88でみてみると、幅0.6㎝、厚さおよそ0.15㎝の銅板を長径4.3㎝、短径2.0㎝の倒卵形の環状に成形し、その頂部に外径0.9㎝、内径0.4㎝の環をとりつけている。

不明品（90）　前２者と同様の厚みの銅板で、やはり同様のアールを持つものであるが、幅がやや広く、0.9㎝となるものである。

装身具（図33・34）

耳環（91・92、111～116）　装身具のうち、91～110までの耳環とガラス小玉は、玄室奥の屍床区画からの出土で、ここに想定される被葬者の持ち物と考えられる。耳環91・92は、ほぼ同形同大ではあるが、分析によれば、91が銅芯銀板貼鍍金であるのに対して、92は銅芯金板貼と製作技法が異なっている。91では鍍金部分のほとんどが剥落し、銀板や銅芯部分が露出している。法量は外径2.8×2.6㎝、

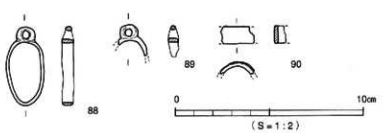


図32　H区７号墳横穴式石室出土遺物（５）

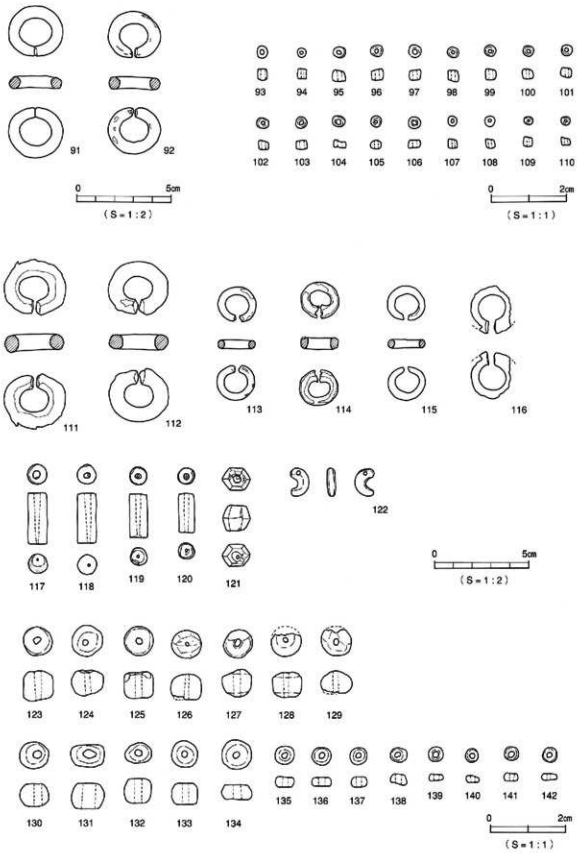


図33　H区７号墳横穴式石室出土遺物（６）

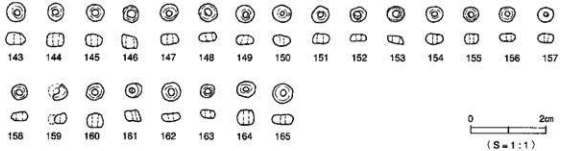


図34　H区７号墳横穴式石室出土遺物（７）

重量8.67ｇとなっている。外径2.7×2.4㎝、重量12.97ｇの92は、部分的な亀裂から銅芯が覗いてはいるが、金板貼りが比較的よい状態で残っている。玄室出土の６個については、床面がかなり攪乱されているとはいえ、その出土位置やサイズから、111・112、113と114のセット関係は成立するものと考えられる。

111・112は、銅芯銀板貼鍍金によるもので、外径約3.1×2.8㎝、重量20ｇ前後のものである。111では、鍍金が主に環内側部分に残存しているが、112では僅かに残るのみで、ほとんど剥落している。113・114は外径2.0×1.84㎝前後、重量にはばらつきがあり、113で3.68ｇ、114で4.95ｇを量る。両者ともに銅芯金板貼によっており、なかでも111は金板の残存が非常に良好である。115もこの２者と似たサイズのものであるが、状態が悪くほとんど銅芯が露出している。銅芯銀板貼鍍金によるものか。116は、復元径３㎝前後の接面から内側面にかけての金板片で、内面には緑青の付着がある。中空の銅芯に金板を貼ったものと考えられる。

ガラス小玉（93～110・130～165）　玄室奥屍床区画からの出土が93～110で、直径およそ３㎜大の小玉、色調はすべて黄緑色で、この区画からの玉類の出土はこれら18点のガラス玉のみである。その他の玉類も含めて多くは、玄室中軸ラインの屍床区画前面敷石施設付近と、同じく東側壁近くの敷石付近で出土している。130～134の比較的大きめのものはすべて紺色、その他の小玉のうち160～163が黄緑色、164・165は黄色、その他が紺から濃い水色系統のものである。

管玉（117～120）　４点ともに片面穿孔による碧玉製の管玉。

水晶玉（121）　直径2.45㎝、高さ1.35㎝の14面体にカットされた切子玉である。

勾玉（122）　頁岩と思われる石材を素材とする小型の勾玉。長さ1.45㎝を測る。

土玉（123～129）　暗茶褐色に焼成された、直径８～９㎜大の丸玉。

h．H区８号墳

墳丘・周溝（図３）

H区の南斜面東部、７号墳の南東で検出された横穴式石室を主体部とする古墳である。主体部間での距離は、７号墳の南東およそ20ｍの位置にあたる。主体部上方斜面の地山面から周溝の一部が最大幅６ｍの規模で検出されているが、果樹園の耕作衰等の攪乱・削平のため墳丘形態・規模ともに不詳である。残存する玄室の規模が後述する９号墳とほぼ同規模で７号墳よりもかなり小さいことや、主体部南側にみられる地山の落ち、さらに横穴式石室の奥壁がほぼ墳丘の中心に置かれることなどから考えると、墳丘は９号墳に近い、周溝までの差し渡し直径15ｍ程度の円墳であったものと思われる。

8号墳墳丘・周溝出土遺物（図35）

須恵器

甕（166・167）　166は大型甕の口縁部片。外面に2条平行の沈線とその上下位の施文帯にヘラ状工具による斜線文を持つ。167は器高32.3cm、口径19.3cm、胴部最大径32.4cmを測るもので、頸部は無文である。

甑（168）　非常に細い頸部からラッパ状に開く口頸部形態をなし、口縁下の外面に稜を持つ。平底の底部に若干撫で肩の胴部形態をなし、胴張り部のやや上位に2条の沈線と穿孔を持つ。淡褐色に

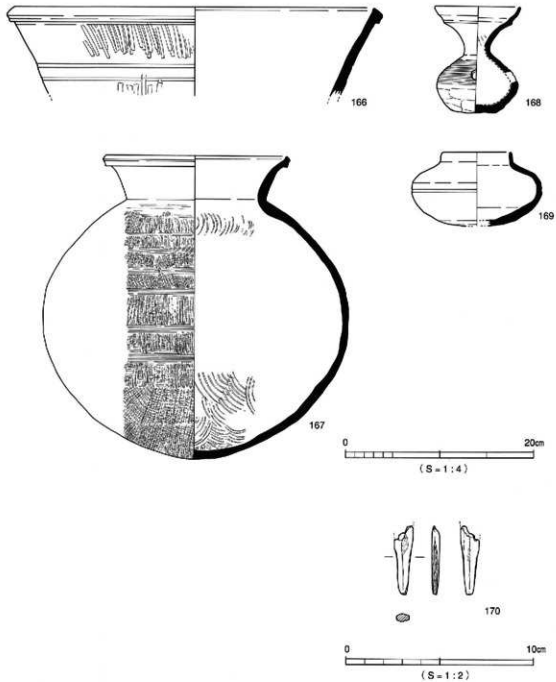


図35　H区8号墳丘・周溝出土遺物

焼成されている。

短頸壺（169）　非常に扁平な胴部から短い口縁部が直上に立ち上がる有蓋短頸壺である。器高7.8㎝、復元口径7.2㎝を測る。

石器

石鏃（170）　墳丘表土掘削中に採集された、有茎磨製石鏃の茎部分である。緑泥片岩製。

主体部（図36～38）

主体部は南に開口する横穴式石室である。しかし、破壊によってその大部分が失われている。斜面の傾斜に倣って、奥側から入り口側にかけて斜めにそぎ取られるように削平されているので、奥側は2・3段残っている部分があるが、手前側は玄室基底石のみ、あるいはそれも残存していない部分がある。残存する壁体や抜き痕から、玄室規模は長さ3.6m、奥壁部や玄門近くでの幅1.1m、中ほどで1.3mとやや胴張りの平面プランをなす。羨道は石材、抜き痕ともに遺存していないが、玄室との境には框石の抜き痕が残っている。短い羨道が付設された無袖の石室であった可能性が高い。羨道の痕跡も残ってないことからすると、段を降りて玄室に進入する形態であったのかもしれない。石室壁体を構成する石材には、7号墳同様砂岩を用いている。玄室床面には5㎝大前後の河原石が敷き詰められた礫床であったものであるが、攪乱され、手前側に掻き出されたような状況になっている。

石室内の遺物出土状況（図39・40）

上述のように、石室は半壊状態、玄室床面も攪乱され、礫床石材も部分的にしか遺存していない状況であった。副葬土器や鉄製品のうち原位置をとどめていると考えられるものは、右袖部にセット状態で据え置かれた4個体の須恵器坏のみであるが、これも本来の副葬位置であるのか、二次的な移動の末の原位置であるのかは不詳である。鉄製品では、破壊され散っているとはいえ、玄室東側壁付近に直刀片や比較的多くの鉄製品が分布しているので、この付近にある程度鉄製品がまとまって副葬されていた可能性がある。

人骨や歯の出土はなかったので、装身具の位置をみてみると、一対ある耳環が玄室奥と中央に離れてはいるが、多くの玉類とともに一対の耳環の片割れが、玄室東奥の部分に集中しているので、この付近に頭位を置いて長軸に平行に埋葬された1体を想定しておいてよかろう。

主体部出土遺物

須恵器（図41）

坏（171～180）　図の上2段に掲載された、蓋・身171～178は、玄室入り口寄りの西側壁直近において据わった状態でセットとして出土した。蓋は内面にかえりを持ち、天井に宝珠つまみを付されるものであるが、173や177のつまみは稜を持った宝珠形をなさず、乳頭状になっている。かえりは、蓋縁部よりも突出せず、その法量は、器高2.6～3.3㎝、口径は9.3～9.7㎝、かえりの径7.7～8.3㎝の間にある。身は平底の底部、体部に稜を持つもので、法量は器高2.7～3.0㎝、口径8.5～9.5㎝の間にある。179・180もこれらと同様の形態・法量をなす蓋であるが、つまみを欠いている。

短頸壺（181）　セットで検出された坏の北西直近で出土した小型の短頸壺で、やや鈍い稜をなす算盤玉形の胴部に直口の口縁を持つ完形品。器高6.2㎝、口径5.1㎝、胴部最大径9.5㎝を測る。

鉄製品（図42）

直刀・刀装具（182～186）　鉄製品のうち刀や刀装具は玄室東側壁近くの中軸よりもやや奥壁寄りに破片としてまとまりをみせているので、本来、1個体としてこの部分に置かれていたものと考えら

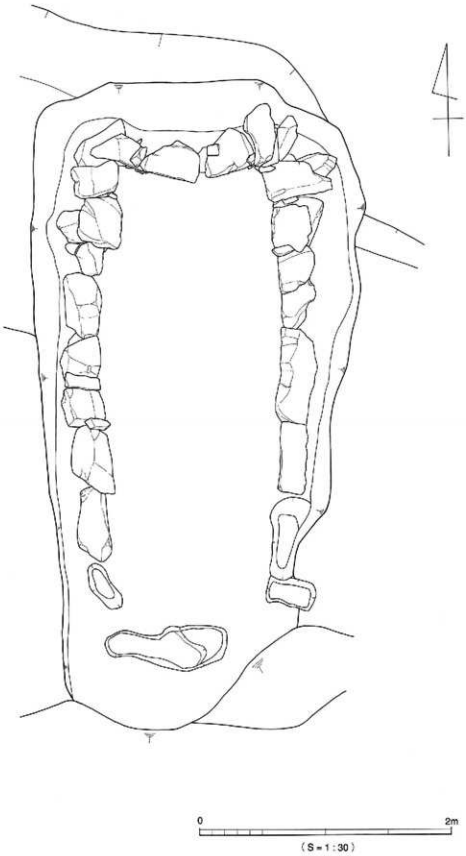


図36　H区8号墳横穴式石室平面図

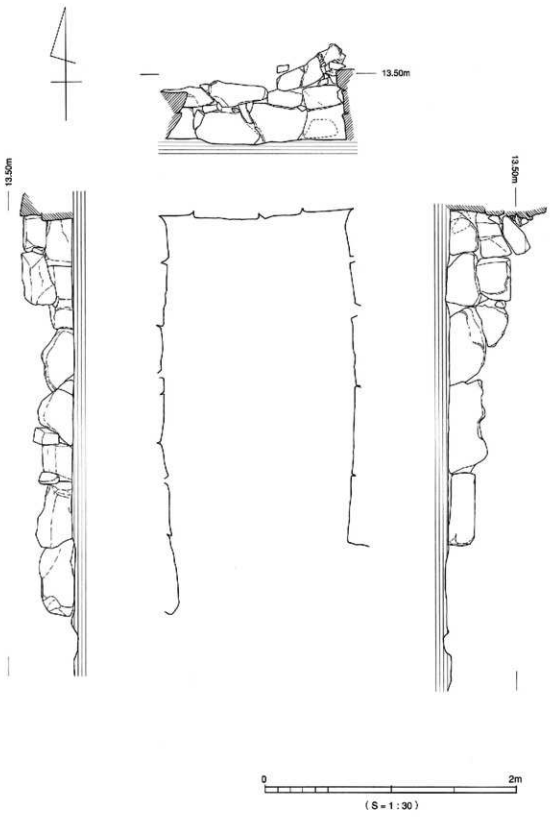


図37　H区８号墳横穴式石室展開図

図38　H区8号墳横穴式石室礫床

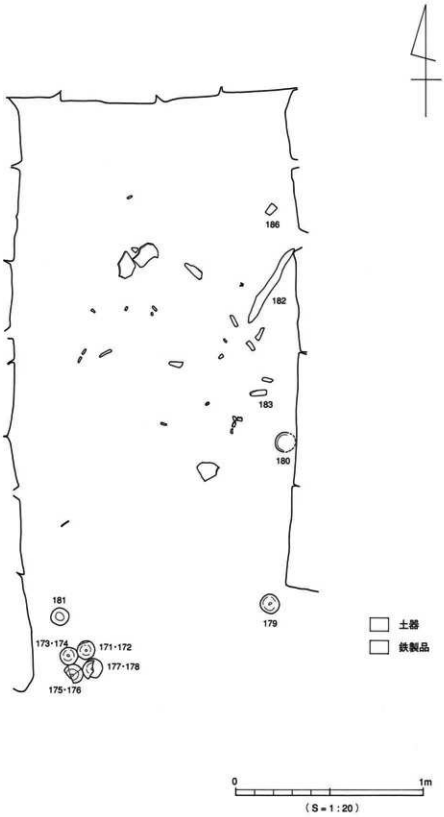


図39　H区８号墳横穴式石室遺物出土状況（１）

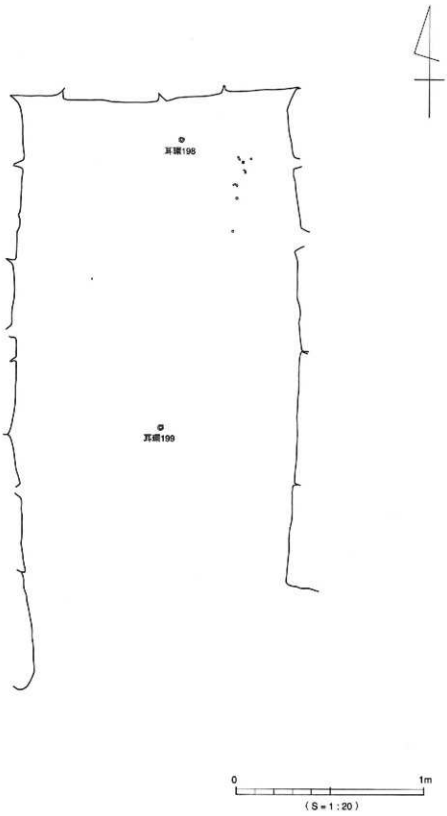


図40　H区８号墳横穴式石室遺物出土状況（２）

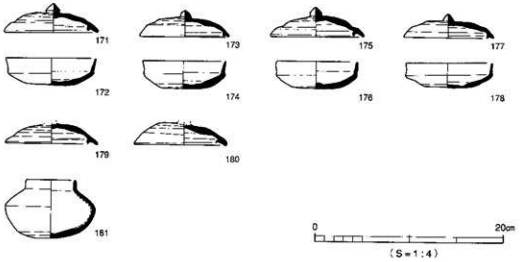


図41　H区８号墳横穴式石室出土遺物（１）

れる。したがって、接合はしないが残存長46.9cm、幅3.7cmの刀身部分182と残存長16.5cm、幅3.6cmの切先部分183は同一個体と考えてよい。184は茎の目釘部分である。186は、７号墳出土と同様の石突である。185も同様のアールを持つ鉄板であるが、刀としては１個体と考えられるので、柄頭の一部であるかもしれない。

鉄鏃（187）　鏃頭鏃の身から刃部の片であるが、刃部の一部を欠いている。

刀子（188）　身幅1.4cmの刃部の破片。

釘（189～196）　玄室長軸ラインより西寄りの南北約1.7m、東西約0.5mの範囲で検出されているので、おおよその範囲に釘付けの組み合わせ式木棺が安置されていたものと考えられる。尖端を欠くが、最も状態のよい190でみてみると、木米、長さは８cm前後、太さ0.5cmあまりの釘で棺材を緊結していたものと思われる。木質の残っている破片には、いずれも釘に直交する木目が観察できる。したがって、189のようなものは、これらの釘とは別の用途に用いられていたものであろう。

金銅製品（図42）

環状金具（197）　上述の直刀の付近での出土であるので、刀装具の一部かとも思われる。銅芯に鍍金が施された金銅製品である。外径2.1×1.3cmの楕円形環状本体の長辺に薄い鉄板を巻いた可動構造の環である。

装身具（図43）

耳環（198・199）　198が奥壁近く、199が玄室中ほどよりやや南と出土位置が離れてはいるが、この玄室内で２個体のみの出土であること、製作技法が両者ともに銅芯銀板貼であって、法量も外径３cm前後と似通っていることから、本来は一対のものであったものであろう。なお、後述の玉類がやはり奥壁近くに集中して分布していることからすると、198の検出位置が本来の被葬者の頭位に近いものと思われる。

勾玉（200・201）　200は瑪瑙製、全長2.35cmを測るもので、半透明の薄い乳白色から橙色の色調を呈している。201はガラス製のもので、穿孔部で欠損し、頭部を欠く。また尾部も欠損している。風化により、表面は不透明に白濁してしまっているが、尾部の折損面に僅かに透明感のある緑色の破面が観察できる。

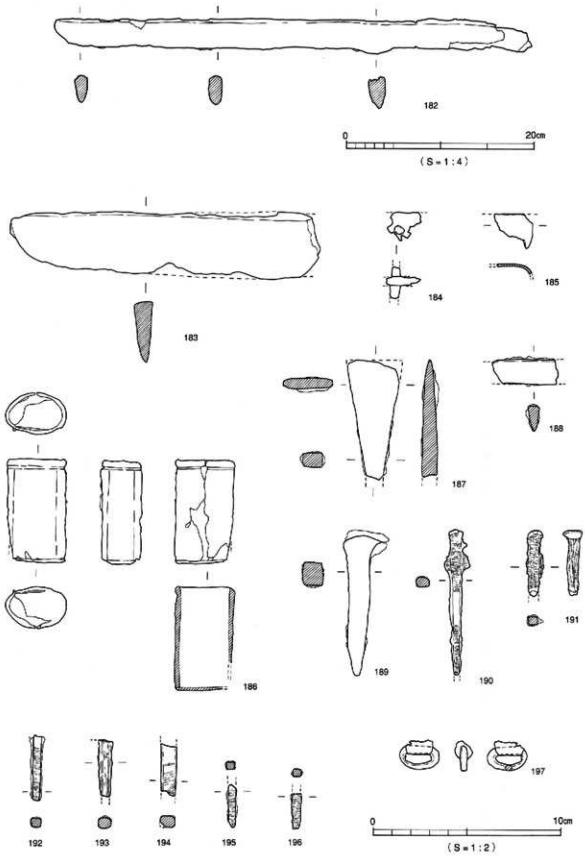


図42　H区8号墳横穴式石室出土遺物（2）

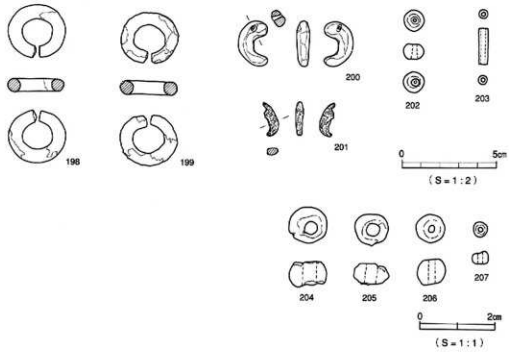


図43　H区８号墳横穴式石室出土遺物（３）

水晶丸玉（202）　直径1.1cm、高さ0.8cmを測る丸玉である。

管玉（203）　全長1.9cm、直径0.5cmの、両面穿孔による碧玉製管玉。

ガラス丸玉（204～207）　204・205は先述のガラス勾玉201のように風化してしまっている。206は濃紺、207の小玉は濃い水色のものである。

ｉ．H区９号墳

墳丘・周溝（図３）

H区の南斜面最南端、８号墳の南で検出された横穴式石室を主体部とする古墳である。主体部間での距離は、８号墳の南およそ20ｍの位置にあたる。ここでも、主体部上方斜面の地山面から周溝の一部が最大幅５ｍの規模で、半円状に検出されているが、調査区の限界のため全容の検出には至らなかった。主体部である横穴式石室の奥壁と墳丘との関係から類推すると、墳丘は直径15m前後の規模の円墳であったものと思われる。

９号墳周溝出土遺物（図44）

須恵器

坏（208）　蓋の片である。天井部と口縁部の境に鈍い稜を持ち、口端部は段をなす。復元口径13.7cmを測る。

鉢（209）　口縁部の小片であるので、径は若干覚束ないが、直立気味の口縁に僅かに張りを持つ体部を持つ鉢である。

甕（210～212）　210は同一個体と考えられる口縁部片とそれ以下の部分とを、双方に存在する口縁下の稜の部分で想定復元したものである。小さめの体部と長めの頸部から稜を介して口縁部が大きく開く。復元口径14.4cmを測る。211は210と同様の口縁部であるが、210と異なり端部を丸くおさめ

るのではなく、鈍い段を持った面に仕上げている。212も210同様の底体部である。底部はやや平底気味となっている。

直口壺（213）　張りを上位に持つやや扁平な体部に、斜め上方に開く直口気味の口頸部を持つ。肩部に1条の沈線を施されている。器高13.6cm、口径8.4cmを測る。橙褐色の焼成である。

提瓶（214・215）　215は、器高23.4cm、口径7.8cm、体部の最大径20.4cm、最大幅13.3cmを測るもので、胴部は張りを持った側で、直径7cm程度の粘土板充填によって塞がれている。口縁部は外反しながら外へ開く。胴部のほぼ全面にカキ目調整が施されている。体側部の上位に鉤状の把手が貼り付けられていたものであるが、欠損している。214は、215とは別個体の提瓶の鉤状把手の片である。

甕（216）　大型甕の口縁部片、口端部に粘土帯を貼り付けて、断面三角形状に下方に肥厚させている。外面には緻密な波状文と、その下位に1条の沈線が施されている。

主体部（図45・46）

9号墳も他の2基同様、主体部は南に開口する横穴式石室である。正確にいえば、主軸はやや南西に振っている。この石室も、破壊によってその大部分が失われており、東側壁や羨道部の石材はほと

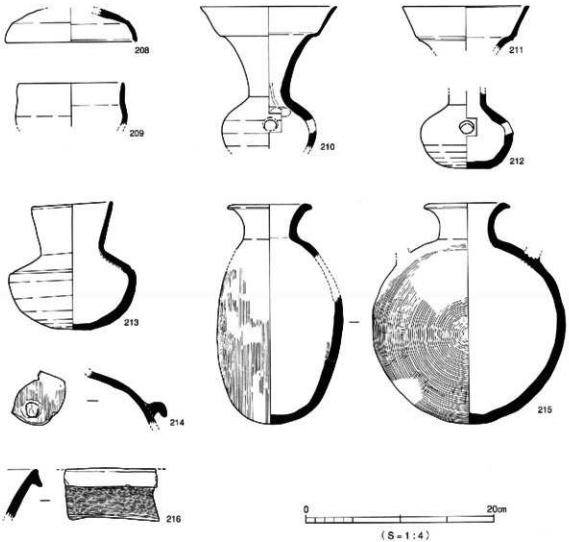


図44　H区9号墳周溝出土遺物

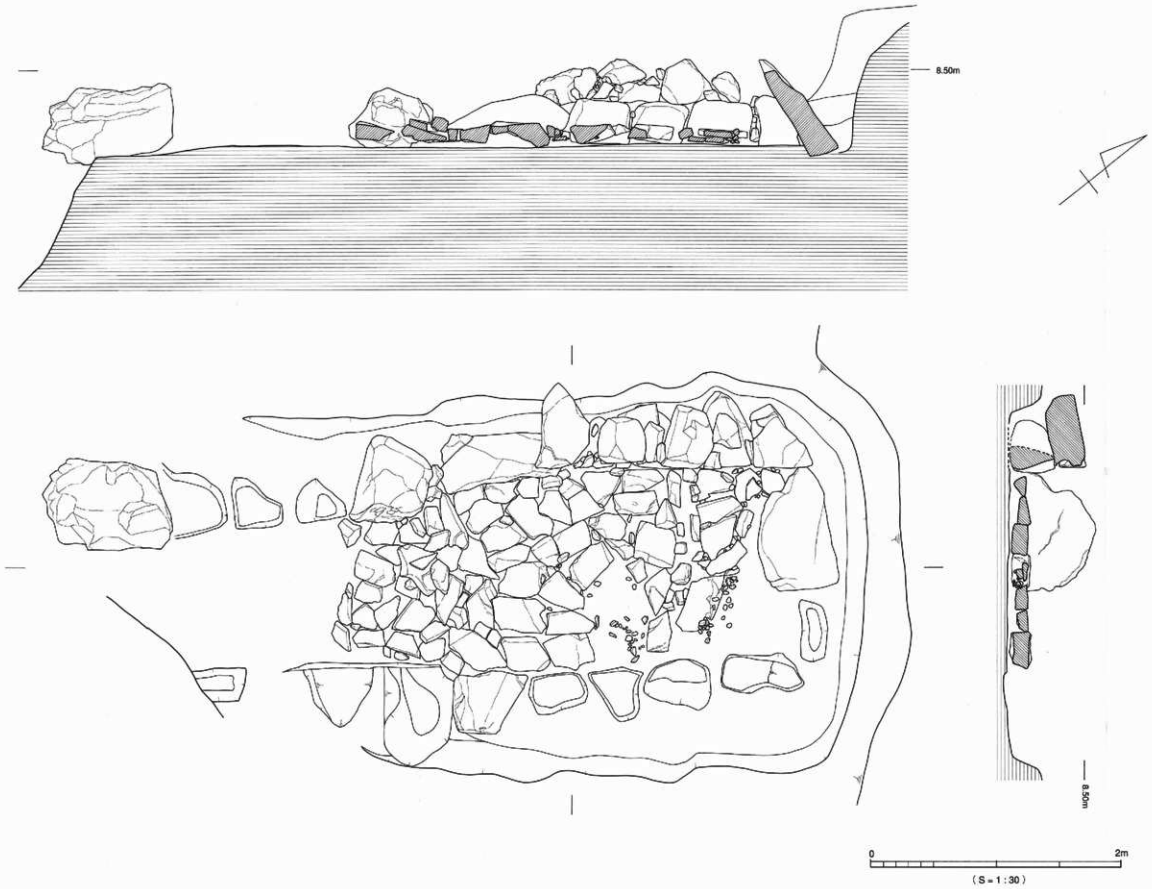


図45　H区９号墳横穴式石室平面図

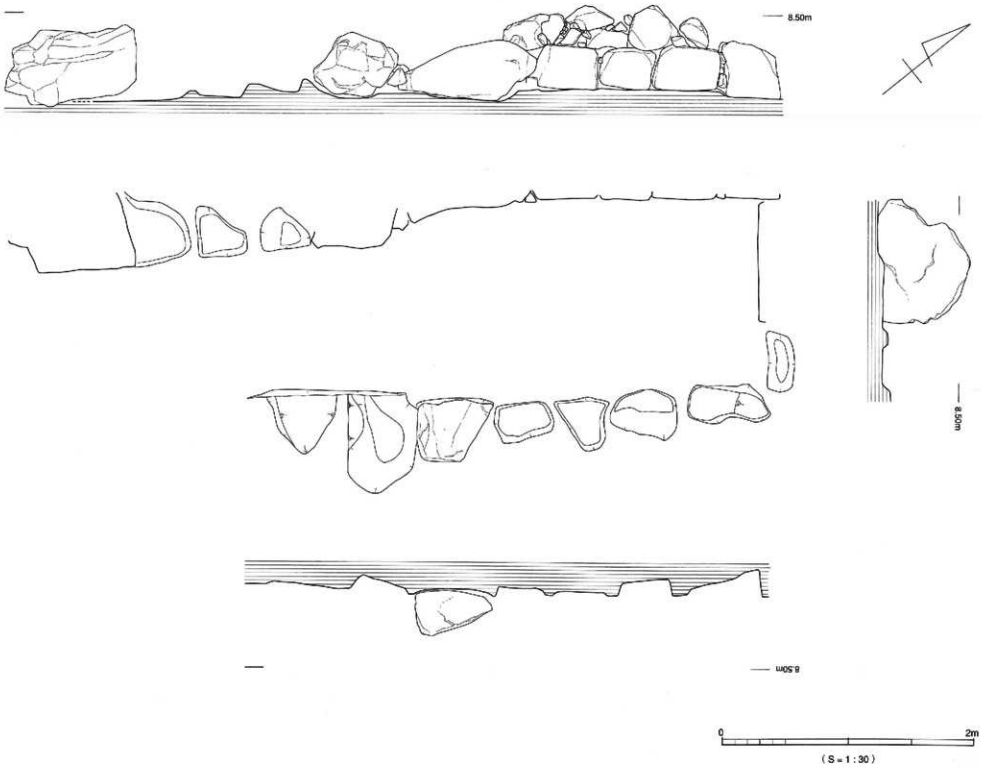


図46　H区9号墳横穴式石室展開図

んど残ってないに等しい。最も残りのよいのは玄室西側壁で、基底石から2段目まで遺存している部分もある。残存する壁体や抜き痕から、石室は両袖型の横穴式石室で、その規模は長さ6.0m超、うち玄室長2.9m、幅1.5m、玄門幅1.1m、抜き痕からすると羨道幅も玄門幅と同じで、玄門が内側に突出する7号墳とは異なっている。玄室との境に框石はなく、この点でも7・8号墳との違いがある。石室壁体を構成する石材に砂岩を用いる点では前2者と同様である。玄室床面には人頭大前後の扁平な砂岩割り石を敷き詰めているが、この床面施設も攪乱されている。状況からすると、玄室東奥近くの石材が抜かれて、玄門付近に移動しているようである。この施設の月地や、抜かれた痕に5cm大程度の河原石が散見されるので、この床面施設の上面にこれらの河原石を敷いた面が存在していたものと思われるが、この上面が追葬に伴う床面改修であったのか、本来二重の床面であったのかは不明である。玄室側壁の基底石は横置きされ、安定した構造であるが、奥壁腰石は扁平な石材を立てて使っている。

石室内の遺物出土状況と被葬者（図47・48）

この石室でも石室は半壊状態で、玄室床面も攪乱されており、原位置をとどめていると考えられる副葬土器や鉄製品は存在していない。この石室では、ほとんど土化して採り上げも不能ではあったが、人骨の痕跡が遺存していた。その位置は奥壁よりおよそ0.5mの位置で、石室主軸に直交する配置での検出、また、いま1箇所は玄室右袖から約0.5m離れた西側壁直近で、主軸に平行方向での検出であった。装身具の出土位置を図48に示しておいたが、玄室内では6点の耳環の出土があるので都合3体の被葬者が想定できる。6点の耳環の出土位置をみてみると、6点のうちそれぞれ一対が玉類のまとまりとともに検出されている。まず、耳環相互は少し離れてはいるが奥の人骨検出位置でひとつのまとまりが、次に右袖付近の人骨位置で1セット、さらにこれから0.5m東に離れた玄室長軸ライン上で1セットの検出がある。したがって、人骨との関係も明らかな前2者は、それぞれの位置での埋葬あるいは片付けの結果の現在の位置と考えることができる。最後の1セットについては、人骨とのからみはなかったが、セットの状態をみてみると、最終的に頭骨とともにこの位置にあったと考えたほうがよさそうである。床面施設が玄室東奥から、この位置一帯に動いていることから考えると本来、玄室東奥周辺に安置されていた1体の被葬者の、少なくとも頭骨が装身具を伴って、床面施設とともに移動された可能性が高いといえよう。

主体部出土遺物

須恵器（図49）

蓋（217）　大型の坏に伴う蓋であるかもしれないが、ここでは蓋としてのみ扱っておく。器高4.9cm、口径15.8cmを測るもので、天井部に直径3.1cmの扁平なつまみを持つ。口縁部と天井部境には稜はなく、端部を丸くおさめた口縁部は外開きに接地する。轆轤は時計方向に回っている。

坏（218・219）　218は内面にかえりを持つ蓋で、器高3.9cm、口径11.0cm、かえり部分の径8.8cmを測る。かえりと口縁端部はほぼ同じレベルにある。天井には宝珠つまみが付されている。219は身である。器高3.2cm、口径9.6cm、を測る。口縁部は短く内傾する。倒立した状態で焼成されているため、外底面から体部にかけて自然釉がかかっている。

高坏（220）　器高9.6cm、口径10.2cm、脚高5.5cm、脚裾径8.3cmを測る、無蓋高坏である。坏部外面に2段の稜、脚部中位に2条の沈線を持つ。

壺（221～223）　221は器高6.8cm、復元口径9.0cmを測る短頸の直口壺である。222は、頸部から体

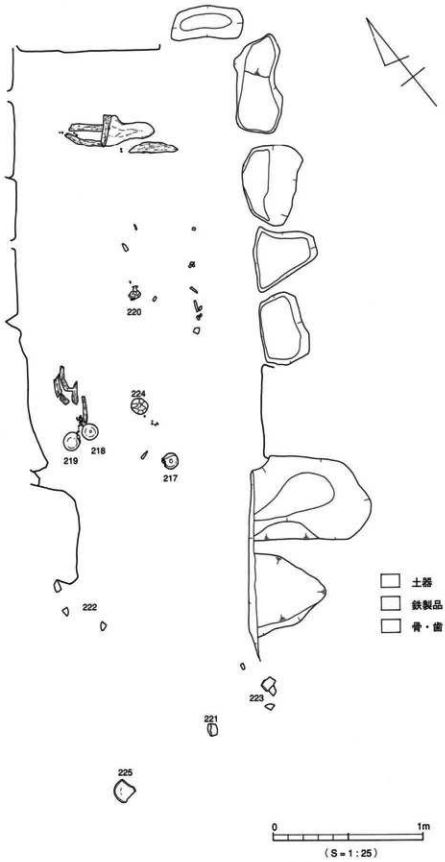


図47　H区9号墳横穴式石室遺物出土状況（1）

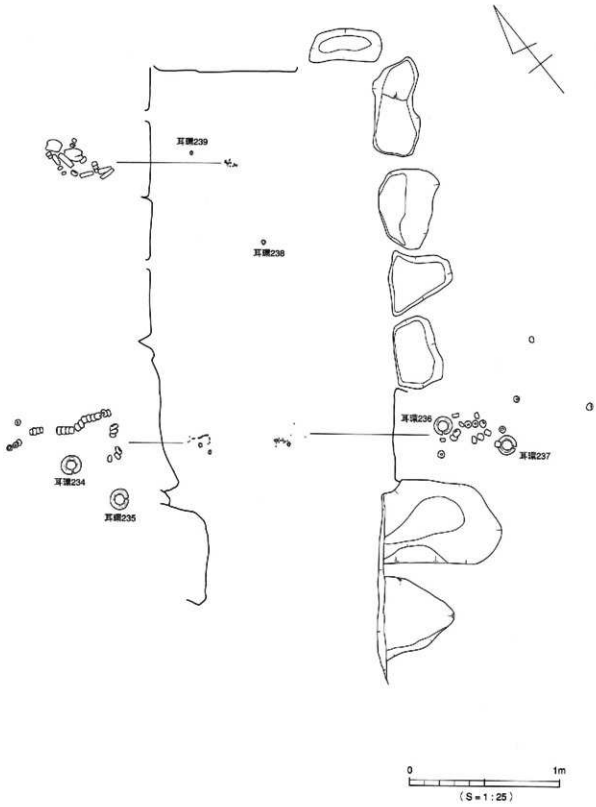


図48　H区９号墳横穴式石室遺物出土状況（２）

部の破片であるが、221類似の器型になるものか。223の短頸壺は同一個体の破片3点を図上復元したもので、復元口径8.2cmを測る口縁部は玉縁状に端部を丸くおさめる。体部は張りを上位に持ち、底部から1/3の部分をヘラ削りし、以上にカキ目を施している。

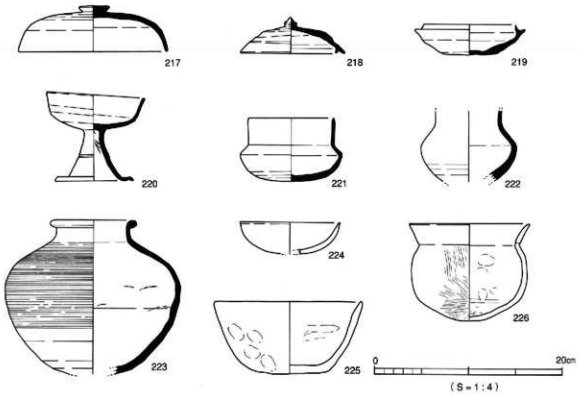


図49　H区9号墳横穴式石室出土遺物（1）

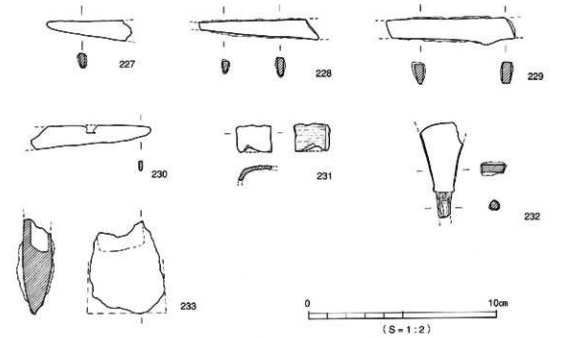


図50　H区9号墳横穴式石室出土遺物（2）

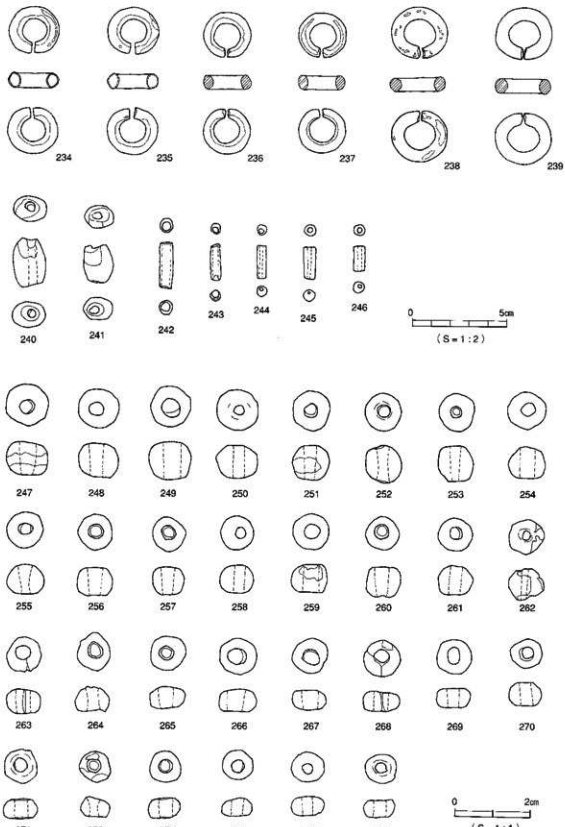


図51　H区９号墳横穴式石室出土遺物（３）

土師器（図49）

椀（224）　口径10.6cm、残存高3.3cm、内外面ともに磨かれている。

鉢（225）　器高7.6cm、口径15.4cmの平底で、深めのボウル状の器型。外面には指頭痕が多数観察できる。

甕（226）　器高10.3cm、復元口径12.6cm、器高の低い丸底の甕である。扁球形の胴部から、くの字状に口縁部が折れ曲がる。胴部外面はハケ目調整されている。

鉄製品（図50）

刀子（227～230）　227・230が茎と考えられるもの、他の２点が刃部の破片である。

不明鉄製品（231）　幅1.3cm、厚さ0.15cmの鉄板を曲げたものの破片で、内面に木質の付着がある。

鉄鏃（232）　鏨頭式鉄鏃の篦被部片。

鉄斧（233）　鍛造袋状鉄斧の刃部に近い部分の破片で、袋状の部分が一部観察できる。

装身具（図51・52）

耳環（234～239）　装身具類は玄室内でのまとまりをみてみると、３箇所にくくることができるので、耳環のセット関係は、234・235、236と237、そして238・239で成立していると考えてよい。西側袖近くで出土した234・235は、それぞれ外径2.56×2.46cm、2.65×2.46cm、重量が3.69ｇに3.49ｇときわめて近い法量で、中空金銅環という共通した製作技法の一対である。235には僅かに赤色顔料の付着がある。これらから0.5m東に離れて出土した、236・237は、外径2.45×2.36cm、2.44×2.30cm、重量13.65ｇに13.04ｇとこれも近似した法量であるとともに、また、両者とも銅芯銀板貼鍍金により製作されている。残りの238・239も銅芯銀板貼鍍金によるつくりで、238が2.92×2.70cm、16.51ｇ、239で2.93×2.68cm、18.04ｇとなっている。

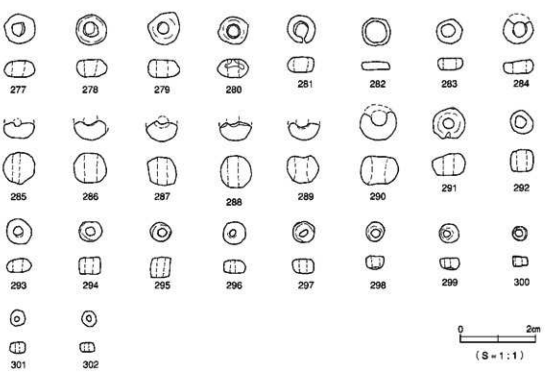


図52　H区９号墳横穴式石室出土遺物（４）

滑玉（240・241）　玄室西奥付近で、耳環238・239やガラス玉群とともに出土した。いずれも琥珀製で、一部破損しているが、240で全長2.69cm、最大幅1.73cm、現況重量2.98ｇ、241はそれぞれ、2.0cm、1.35cm、1.18cm、現況重量2.06ｇとなっている。

管玉（242～246）　長さは2.5～1.32cm、直径0.7～0.5cmと法量もバラバラ、穿孔技法も242・243のような両面穿孔とそれ以外の片面穿孔と、石材が碧玉であること以外にはまとまりがないが、５点すべて上述の滑玉や耳環238・239とともに出土しているので、これらとともに、この部分に頭位を置いた人物の持ち物である。

ガラス丸玉（247～302）　ガラス丸玉はその多くが風化し、白濁してザラついた表面になってしまっている。こういった風化したもののうち267、272、274、276、281、283など、風化面の剥離した部分がある個体でみてみると、緑色の色調を呈しているので、本来、これらは緑色の玉であったことがわかる。これらとは別に、291・292、294～302までのものは、風化しないで本来の色を残している。ちなみに、濃紺が291・292・294・295・297・300、緑が296、黄が299、水色が298・301・302となっている。

その他の遺物（図53）

調査中９号墳丘で採集された遺物をここで掲載しておく。

弥生土器

高坏（303）　脚部片で、中位の相対する位置に穿孔を持つ。坏部との接合は充填によっている。

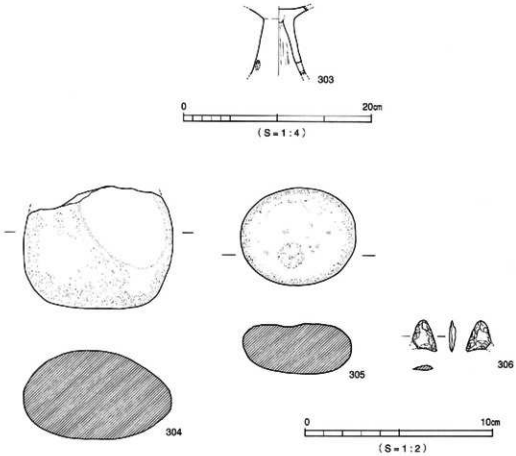


図53　H区９号墳丘採集遺物

石器・石製品

擦り石（304）　破損しているが、砂岩転石の2面を擦り面として用いている。

敲石（305）　重量129.9ｇの、掌にすっぽり入るほどの大きさの砂岩転石の一面に使用痕の窪みを持つ。

石鏃（306）　サヌカイト製小型の凹基無茎鏃で、基部の一角を欠損している。現況重量0.59ｇを量る。

ｊ．祭祀跡（図54）

7号墳横穴式石室羨道部の西側墳丘に若干の盛土の遺存があったが、この盛土下層の地山直上に黒色灰状土や焼土とともに、多量の土師器が検出された。土師器類とともに、2点の石製勾玉の出土もあり、傾斜した地山をカットして造成した平坦面上で、古墳時代前期の火を伴ったなんらかの祭祀的行為が執り行われたものと考えられるが、この時期に確実に比定できる遺構は、このH区のみならず、鶴が峠丘陵上での調査範囲では確認されていない。

出土遺物

土師器（図55～57）

高坏（307～333）　復元完形品327～330をはじめ、坏部、脚部片など多数の出土がある。坏部や脚部の形態にはいくとおりかあり、まず坏部からみてみると、坏底部との境に明確な稜を持たない307・309・310・324・325・327・329・331のようなものと、それ以外の稜を持つものとに分かれる。稜を持たないもののうちには、325や329のように非常に浅いものとそうでないものがある。一方、稜を持つものの中には、坏底部が平底になる328や、口径に比して深さのある308のようなものが含まれている。

一方、脚の多くは、327・330・333に代表されるような、中膨れの柱部から強く屈曲して開く裾部を持つものであるが、329・331・332にみられるように、柱部の膨らみや裾屈曲の稜を持たず、単純にラッパ状に開くものもある。また、柱部の膨らみは持たないが、裾部が稜を持って屈曲する317や、椀形高坏の脚部315がそれぞれ1点出土している。

壺（334～344）　334～341は小型丸底壺である。完形品の340・341でみてみると、やや長めの口縁部が内湾気味あるいは直線的に外上方へ開き、胴部はやや扁平な球状をなしており、他の口縁部、胴部片も同様の形態のものである。胴部の外面調整は、340にハケ目調整が行われるほかは撫でやヘラ削りによっている。340・341ともに焼成後の穿孔を胴部に持っているが、340には不整形な打ち欠きの孔が底部付近に施され、341では胴部の中位に直径0.4cmの小孔が外面から穿たれている。342は器高13.1cm、口径11.2cmを測るもので、球形に近い胴部と短い直口気味の口縁を持つ。全体的に器壁が厚く、ぼってりした感じの成形である。胴部外面はハケ目で仕上げられている。343は複合口縁壺の口縁部小片。344は直口気味の短い口縁という点では342に似るが、胴部は扁球気味に大きく張る点で異なっている。器壁は薄く、外面の調整は撫でによっている。

甕（345～351）　球形の胴部に短く外上方に開く口縁部を持つもので、口縁部は345・346、348のように内湾気味に開くものと直線的に開くもの、外反気味に開くものがある。内湾するもののうち、345・346の口端部は丸く肥厚している。いずれも胴部外面はハケ目調整されている。

玉類（図57）

勾玉（352・353）　352は全長2.8cmを測る碧玉製、353は全長1.18cmの小型品、素材は滑石か。

図54　H区祭祀跡遺物出土状況

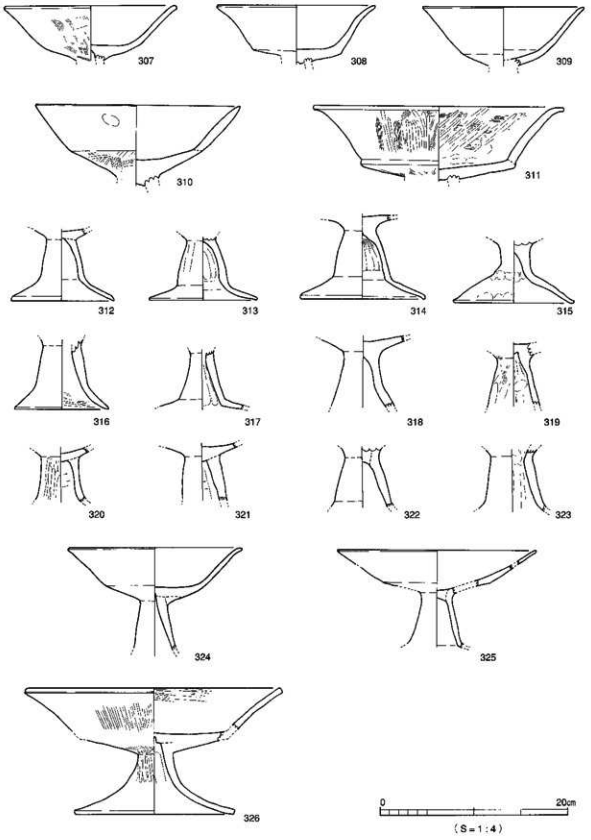


図55　H区祭祀跡出土遺物（1）

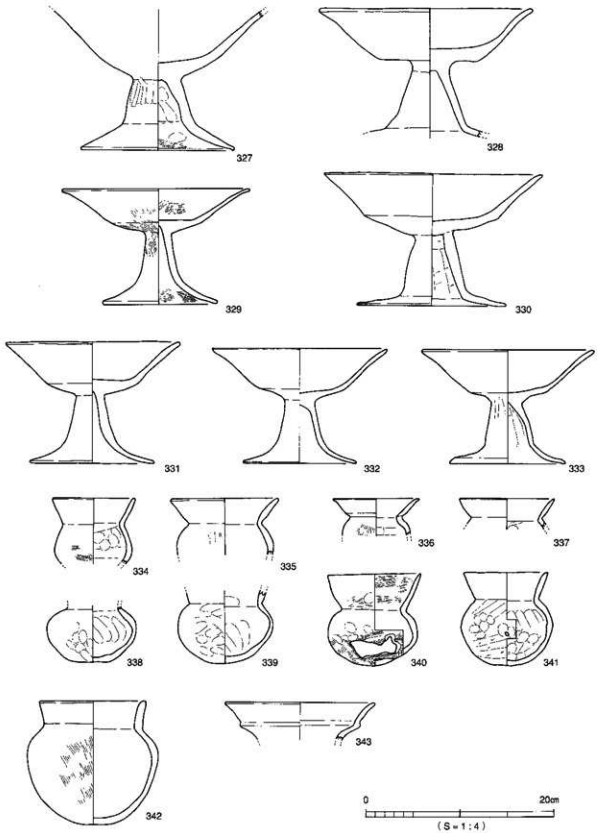


図56　H区祭祀跡出土遺物（2）

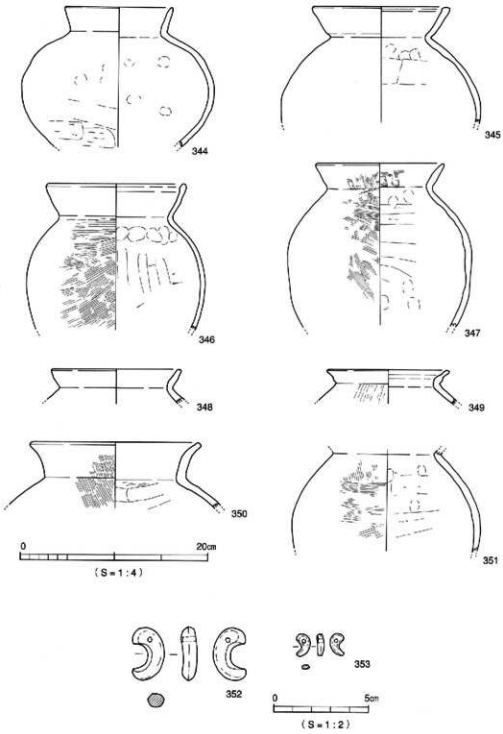


図57　H区祭祀跡出土遺物（3）

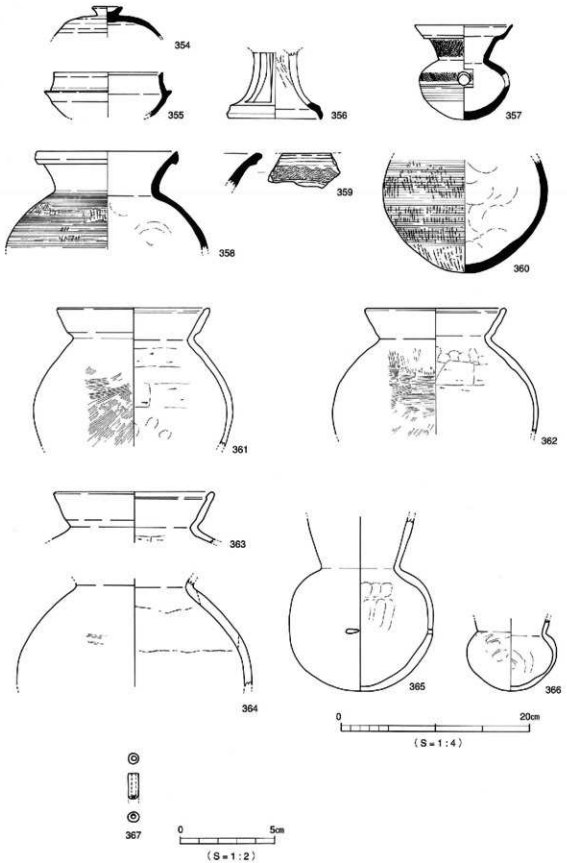


図58　H区採集古墳時代遺物

k．H区採集遺物

古墳時代の遺物（図58）

須恵器

坏（354・355）　354は中窪みのつまみ付きの蓋、355は口縁部から受部の片である。口縁部は比較的長く上方に伸び、端部に鈍い段を持つ。

高坏（356）　1段透しで脚高7.1cm、裾径9.8cmを測る脚部。長脚と短脚の中間のような形態。透しは3方向に復元できる。

甕（357）　口縁部を僅かに欠くが、ほぼ完形に近いもので、攪乱溝からの出土である。器高10.1cm、口径10.4cm、胴部最大径9.6cmを測る。やや底部のとがった扁球形の胴部に短い頸部から段を介して外上方に短く開く口縁部形態をなす。頸部外面には波状文、胴張り部に2条の沈線とその間に櫛歯状工具による刺突列点文と胴部穿孔を持つ。

壺・甕（358～360）　358・360はほぼ同じサイズの壺上半部と下半部の片。359は大型甕の口縁部小片である。口縁端部直下に断面三角形の細い突帯を持ち、その下位に波状文と1条の沈線が施されている。

土師器

甕（361～364）　祭祀跡出土の甕と同様の一群で、出土場所が不明になってしまっているが、365・366の壺も含めて、本来この遺構の出土であったものと思われる。口縁部の残っているものは、いずれも内湾して端部を丸めに肥厚するもので、球形の胴部外面はハケ目調整、内面は頸部のやや下の部位までヘラ削りされている。

壺（365・366）　365は直口壺で、最大径15.2cmを測る球形の胴部に、直線的にやや外上方に長く開く口頸部を持つものである。胴部の中位よりやや下の部分に楕円形に近い焼成後の穿孔を持つ。366は小型丸底壺で、口縁部を欠いている。

装身具

管玉（367）　碧玉製破損品で、2号周溝付近で採集された。

古代以降の遺物（図59）

須恵器

皿（368）　器高3.5cm、復元口径24cmを測るもので、口端部は丸く収める。8世紀代のもの。

土師器

皿（369）　底部回転糸切りによる皿。器高2.1cm、口径9.6cmを測る。近世、江戸時代の遺物である。

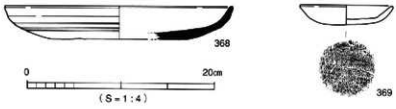


図59　H区採集古代以降の遺物

2．J区の調査（図2、61）

（1）縄文・弥生時代の遺構と遺物

a．土　坑

SK1（図60）

J区の北東隅で検出された、直径約1.2mの円形土坑である。斜面の傾斜どおりに斜めにそぎとられたようにカットされている。斜面上方の最深部で深さ0.6mを測る。中期初頭頃の遺構である。

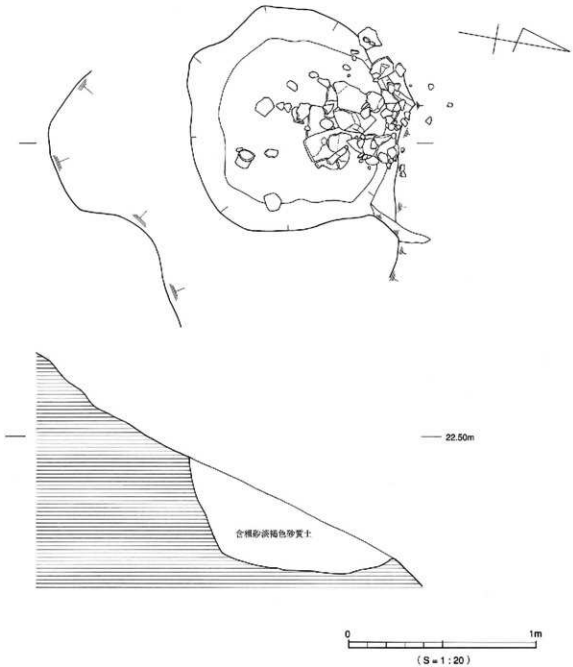


図60　J区SK1

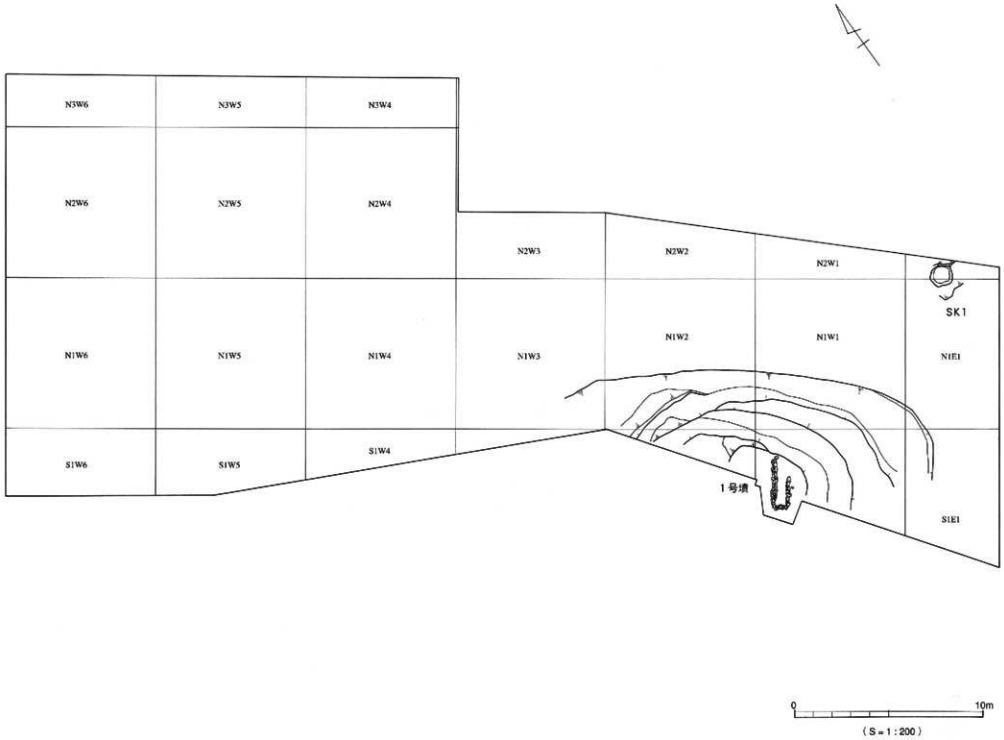


図61　J区の割付と遺構配置図

ＳＫ１出土遺物（図62）

弥生土器

甕（370～374）　370は胴部下位を欠くもので、口径25.4ｃｍを測る。折り曲げによる短い口縁部は端部に面を持ち、全面を刻まれている。頸部を６㎝程下がった胴部の上位に棒状工具による刺突列点

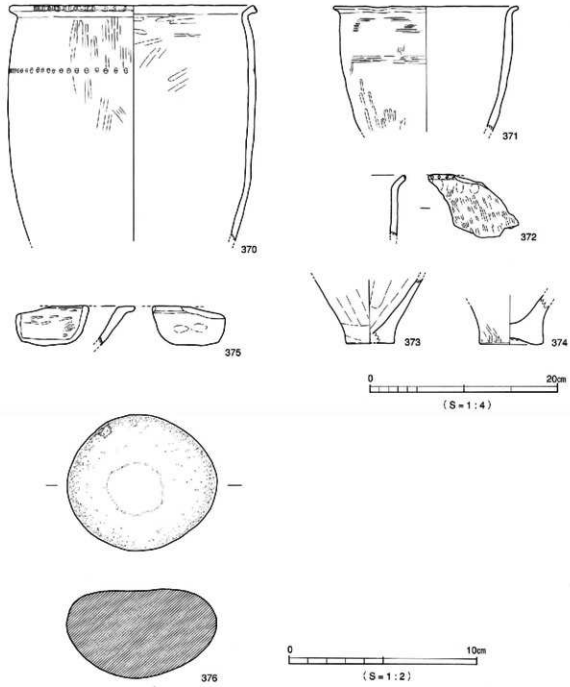


図62　J区SK１出土遺物

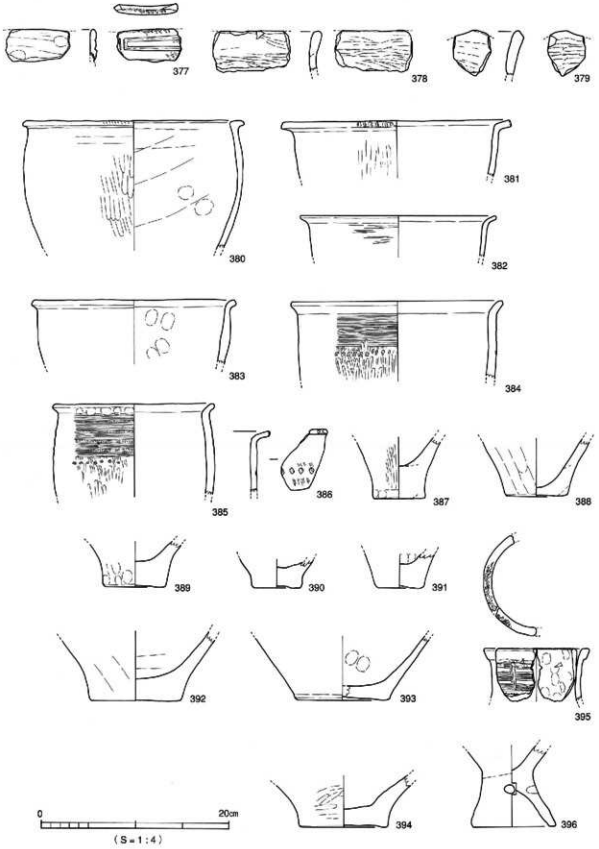


図63　J区出土縄文・弥生土器

文が施されている。外面の調整はハケ目、内面は磨かれている。371・372も、口縁部折り曲げによる上半部、あるいは口頸部の片である。両者ともに軽い折り曲げによる短い口縁部で、372では端部に刻み目を施す。371の外面頸部直下から胴部上位にかけては横描きの直線文が施されている。摩滅のため判然としないが、上下の横方向の直線文の間のスペースを縦方向の直線文で区画しているようである。373は平底、374はやや窪み底の底部である。

高坏（375）　口縁部の片、内面に稜を持って水平に貼り付けられている。内面はよく磨かれている。

石製品

擦り石（376）　拳大よりやや小さめの凝灰岩転石の平坦な面を用いたものである。

b．J区採集の縄文・弥生遺物（図63・64）

縄文土器（図63）

深鉢（377～379）　377は、後期縁帯文土器の口縁部。縄文を施した口縁部施文体に、U字状に屈曲して横走する沈線が描かれている。378・379は、粗製深鉢の口縁部片で、摩滅しているが外面には二枚貝と思われる条痕が観察できる。

弥生土器（図63）

甕（380～391）　380は、貼り付けの短い水平口縁を持つ甕の上半部で、胴部上位がやや張り、復元口径22.8cmを測る口縁部とほぼ同じサイズになる。丸く収められた口端部には刻み目を持つ。外面は磨かれ、内面は強で仕上げされている。381～386はすべて口頸部から上半部の片で、口縁部は折り曲げによっている。平坦な面をなす381の口端部には刻み目が施されている。その他のものには刻み目はなく、383は無文である。382、384・385の口縁部直下には櫛描直線文が描かれ、384・385ではその下位に刺突が施されている。386には櫛描文はなく、刺突のみが施されている。387～391は底部で、概ね平底もしくは若干の窪み底になるものである。

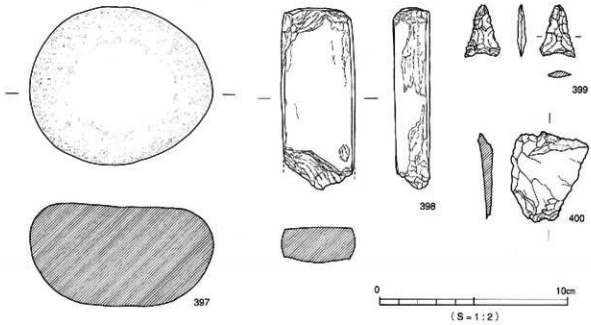


図64　J区出土石器・石製品

壺（392～395）　392～394は平底の底部である。395は、復元口径11.0cmを測る無頸壺口縁部である。口縁端部には幅１cm程度の薄い粘土板を貼り付けて肥厚帯としている。平坦な面をなす上端面には櫛描波状文、肥厚帯下位の外面には４本単位の櫛歯状工具による格子文が描かれている。

高坏（396）　脚高6.0cm、裾径8.4cmを測る脚部片で、対向する２方向に直径0.8～0.9cmの貫通しない孔が穿たれている。これらＪ区採集の弥生土器は、ＳＫ１同様中期初頭頃のものである。

石器・石製品（図64）

擦り石（397）　拳大程度の凝灰岩転石の平坦面を擦り面として用いたもの。

石斧（398）　柱状片刃石斧基部の破損品、緑泥片岩製。

石鏃（399）　サヌカイト製の打製鏃。全長2.7cm、重量1.28ｇの凹基無茎鏃である。

剥片（400）　サヌカイトの不定形剥片である。

（２）古墳時代の遺構と遺物

ａ．Ｊ区１号墳

墳丘（図61、66～68）

Ｊ区の北東斜面最南東端、Ｇ区との境近くで検出された竪穴式石室を主体部とする古墳である。主体部の南半は調査区外に広がり、隣地の協力を得て、主体部の調査は実施することができた。墳丘もその南西半は調査区外になるため、北東半のみの調査であった。調査区南西面で主体部を通した断面で確認したところ、墳丘の盛り上がりはおよそ９～10m程度となっている。段畑造成によるカットのため地山の変換点のどの部分が墳丘に関わるものか不詳ではあるが、全体的な状況をみてみると、円墳である可能性が高いと思われる。

１号墳丘出土遺物（図65）

須恵器

坏（401）　主体部東側斜面、幅広の溝状の落ちの中から出土したもので、墳丘にかかわる遺物と考えている。器高4.7cm、口径12.4cmを測る蓋である。天井部と口縁部の境に稜を持つ。天井部外面はその３／４の部分を回転ヘラ削りされている。口端部は傾いた面をなす。

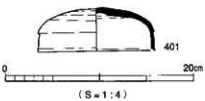


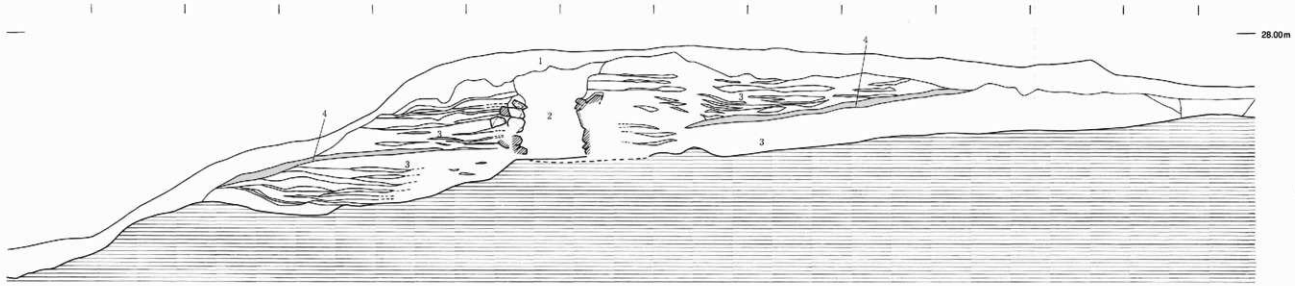
図65　Ｊ区１号墳丘出土遺物

主体部と遺物の配置（図69・70）

主体部は、長軸を南西から北東にとる竪穴式石室である。天井石の遺存はなく、北東側の小口とこれに続く東寄りの側壁の一部も失われているが、石室の規模やプランは抜き痕によって把握できる。石室全長は2.5m、幅0.65mで、幅の大小はなくほぼ均一である。高さ0.65ｍの壁体には30～50cm前後の大きさの砂岩を用いて積み上げるが、小口には大きめの石材を用いる。また、側壁上端にはやや小ぶりの石材を用いている。残りのよい北西側壁でみてみると、側壁上端では２列に石材を並べ、外側の列のレベルが幾分高くなるように積んでいる。おそらく、天井石は内側列にまでしか架かっていなかったものと思われる。地山露出の床面には枕台石と思われる石材を、側壁に接する位置で変所に配置している。枕台の高さはおおよそ10cm、頭位は不明である。墓坑の掘り方はなく、墳丘の積み上げともに石室を構築している。南西側の小口付近の床面で刀子１点と、すべて床上水洗による検出では

図66 J区調査前コンター図

図67　JC区1号墳全測図



1.表土
2.灰褐色マサ土と灰色砂の互層
3.含石英砂質暗褐色粘質土と灰褐色砂質土の互層
4.黒灰褐色砂質土

0 2m
（S＝1：40）

図68　J区1号墳丘横断面図

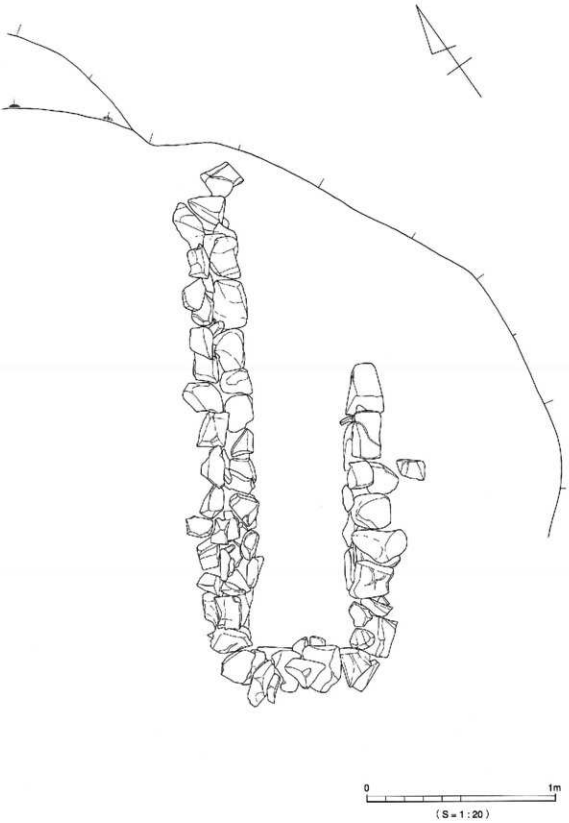


図69　J区1号墳竪穴式石室平面図

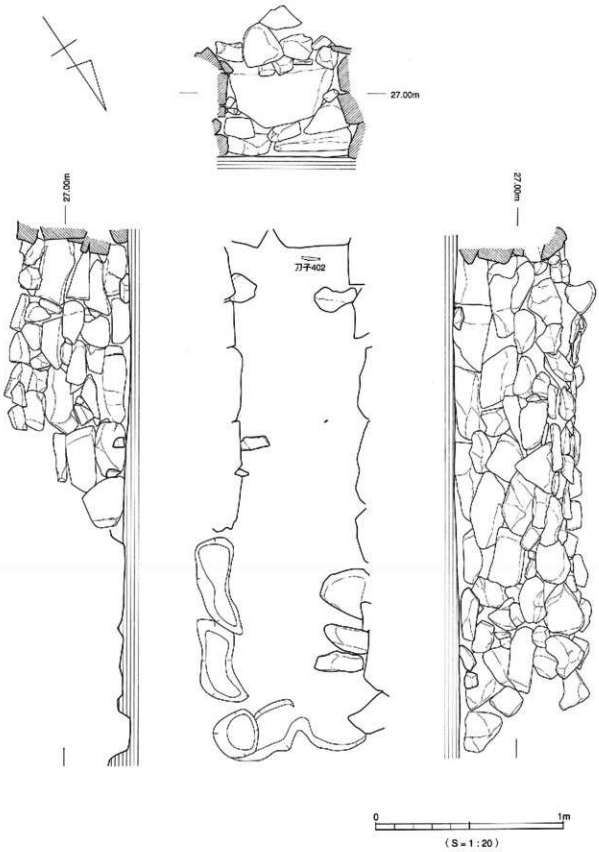
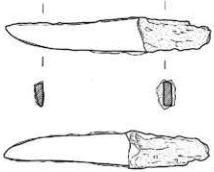


図70　J区1号墳竪穴式石室展開図



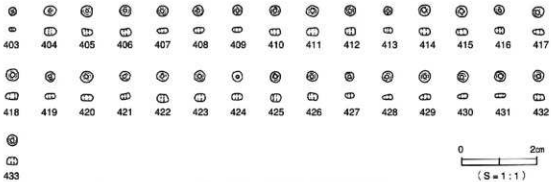


図71　J区1号墳竪穴式石室出土遺物

あるが、ガラス小玉31点の出土がある。また、現在所在が不明になっているが、鉄釘1点の出土が記録されているので、埋葬棺は釘付けの木棺であったものと考えられる。

主体部出土遺物（図71）

鉄製品

刀子（402）　現存長10.9cm、うち刃部長6.5cm、最大幅2.0cmを測る鹿角装刀子である。一部露出した茎からすると、両関の形態になるものと思われる。

装身具

ガラス小玉（403～433）　全部で31個を数えるが、すべて床土水洗によって検出されたものである。直径0.25～0.3cm前後のきわめて小さいもので、色調はすべて濃紺である。

b．J区出土の古墳時代の遺物（図72）

埴輪（434～445）　円筒もしくは朝顔と思われる埴輪片が採集されている。円筒埴輪434～436の口縁部片は内面端部直近まで横ハケ目調整され、端部付近を強で消されている。その他は、円筒・朝顔の区別のつかないもので、タガのあるものでは、断面が低い台形のタガ形態をなしている。底部はいずれも外面端部まで縦ハケ目調整されている。

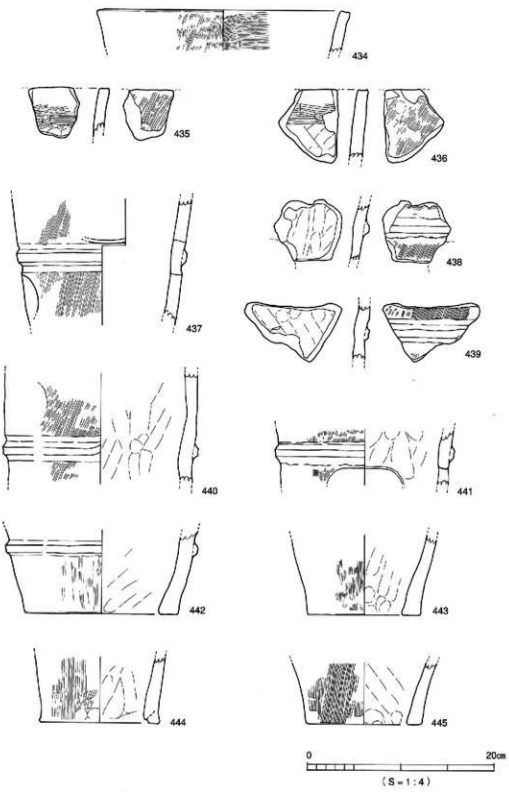


図72　J区出土埴輪

3．L区の調査（図2、75）

（1）弥生時代の遺構と遺物

図73　L区調査前コンター図

a．竪穴住居ＳＢ１（図74・75）

１号墳丘上で検出された、直径3.2mの円形住居であるが、その南側を耕作によって切られている。立ち上がり10cm程度の遺存状況であった。床面は水平にはならず、北から南へかけての緩い傾斜をなしている。周壁溝はなく、床面からは20基の柱穴が雑然と検出されている。おおよそ内周に大きめの、そのやや外に小さめの柱穴が巡っている様相が窺えるが、どの柱穴同士が有機的に結びついて、どのような役割を果たしていたか詳細なところは不明である。遺物からすると、中期初頭頃の遺構である。

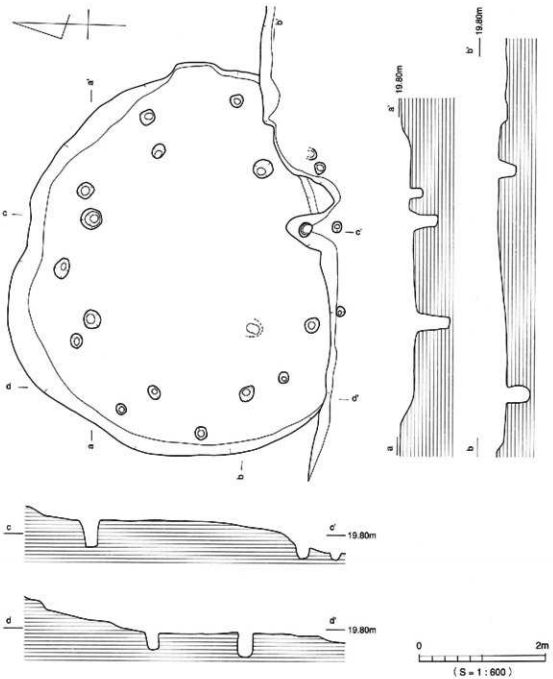


図74　L区SB１

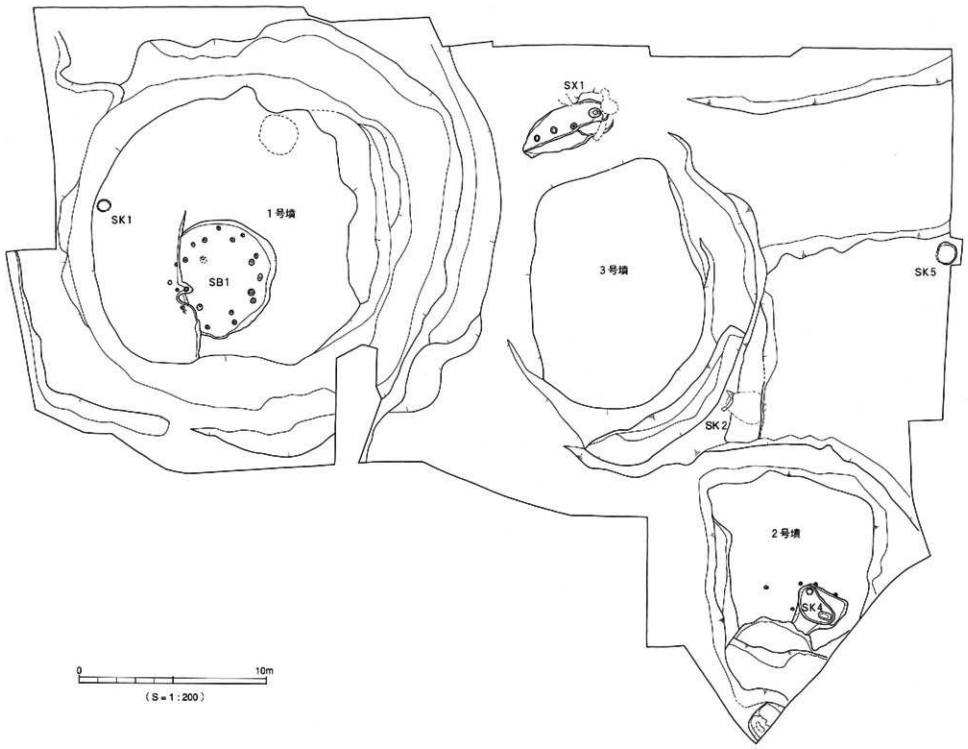


図75　L区遺構配置図

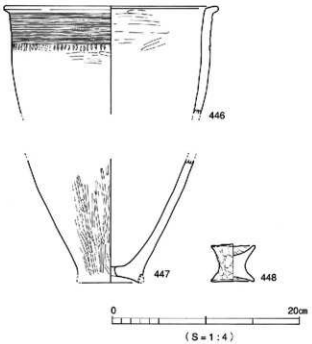


図76　L区SB1出土遺物

ＳＢ１出土遺物

弥生土器（図76）

甕（446・447）　復元口径22.6cmを測る甕の上半部で、口縁は水平に近く、内面に稜を持って短く貼り付けられている。口縁直下に櫛描の多条沈線文帯を持ち、その直下に同様の工具による刺突を加えている。内面は横方向に磨かれている。447はやや窪み底の底部～胴部下位、底面には焼成後の穿孔がある。

ミニチュア土器（448）　手づくねによるミニチュアの器台形土器。器高4.0cmを測る。

b．土坑

合計４基の土坑が検出されている。調査中ＳＫ３とされた遺構は、報告にあたって性格不明遺構ＳＸ１と変更したので、ＳＫ３は欠番となっている。いずれも中期前半頃の遺構である。

ＳＫ１（図77）

１号墳丘上南端で検出された円形土坑、直径0.7m、深さ0.35mを測る。

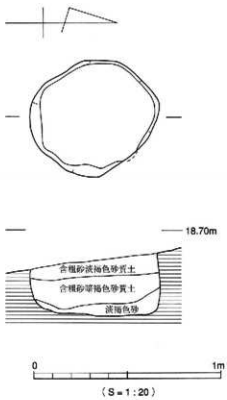


図77　L区SK1

図78　L区SK１出土遺物

ＳＫ１出土遺物

弥生土器（図78）

鉢（449）　平底の鉢もしくはジョッキ形土器の底部。

ＳＫ２（図79）

３号墳の周溝内北側で、周溝とこの周溝を切る攪乱に切られているため、ほとんど痕跡しか残っていない。坑底北側の立ち上がりが弧状に、高い部分で10㎝程度残り、これから20～30㎝南で次に述べる壺片が出土した。

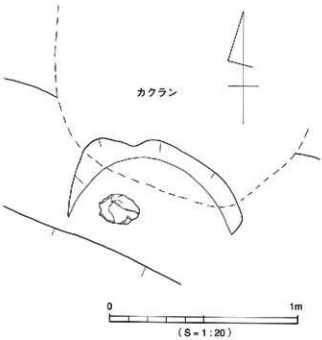


図79　L区SK２

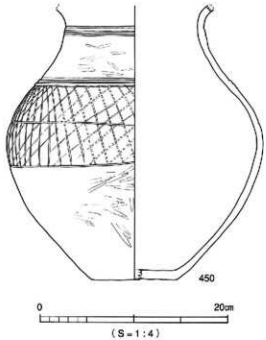


図80　L区SK２出土遺物

ＳＫ２出土遺物

弥生土器（図80）

壺（450）　口縁部を僅かに欠く。頸部と肩部に削り出し突帯に近い３条のヘラ描沈線、また肩部沈線とやや間隔を置いた胴張り部に１条の沈線、さらにこの沈線ともやや間隔を置いた胴部下位にも１条のヘラ描沈線を引き、これらの沈線間のスペースに斜格子文をヘラ描きしている。

ＳＫ４（図81）

２号墳丘上の北東部に半月状の窪みがあり、この窪みをＳＫ４としている。この窪みの西端部にさらに直径35㎝程度の窪みがあり、この窪みのあたりに集中して弥生土器の出土がみられた。

ＳＫ４出土遺物

弥生土器（図82）

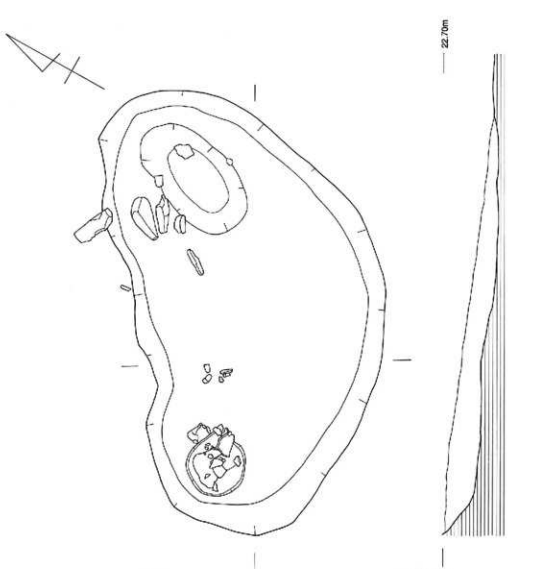


図81　L区SK4

壺（451）　分厚く突出した平底の底部に、球形に近い胴部形態をなす。この胴部から、頸部らしい頸部を介さず、短い口縁部が粘土帯のように折り曲げられている。器高33.6cm、口径15.8cm、胴部最大径31.7cm、底径10.0cmを測る。外面は入念に磨かれ、また、胴部内面も粗く縦方向に磨かれている。

鉢（452）　器高11.1cm、口径14.7cmを測るもの。底部は直径5.7cmのくびれの上げ底、口縁部は短く、水平に近いところまで折り曲げられている。内外ともに入念にヘラ磨きされている。

甕（453）　胴部下半の片で、復元径6.4cmを測る底部は若干の窪み底となっている。内外面ともにヘラ磨きされている。

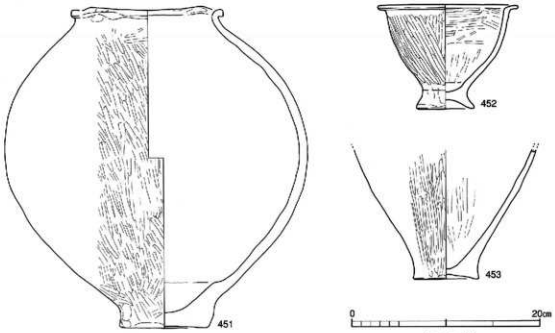


図82　L区SK４出土遺物

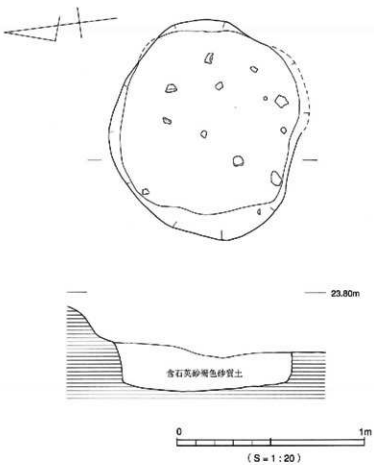


図83　L区SK５

ＳＫ５（図83）

Ｌ区北端で検出された円形土坑で直径1.0m、深さ0.2mを測る。土器小片が若干出土したが、図化できたのは以下の壺底部片のみである。

ＳＫ５出土遺物

弥生土器（図84）

壺（454）　平底の底部小片。

c．その他の弥生時代の遺物

掲載した土器・土製品は、すべて後述する１号墳の調査時の表土撤去中に出土したもので、本来Ｓ

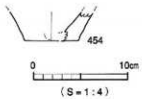


図84　L区SK５出土遺物

B１に由来する遺物と考えられる。石器・石製品のうち、出土場所が特定できるもののうち、465は３号墳丘上、467が２号墳丘上、468が１号墳丘上で出土したものである。

弥生土器・土製品（図85）

甕（455～459）　455は、復元口径34.0cmを測る甕の上半部片。断面三角形に近い短い口縁部は、上面に水平な平坦面をなす。外面はハケ目調整の後ヘラ磨きされている。456～459の底部は平底、もしくは平底に近い僅かな窪み底になるものである。

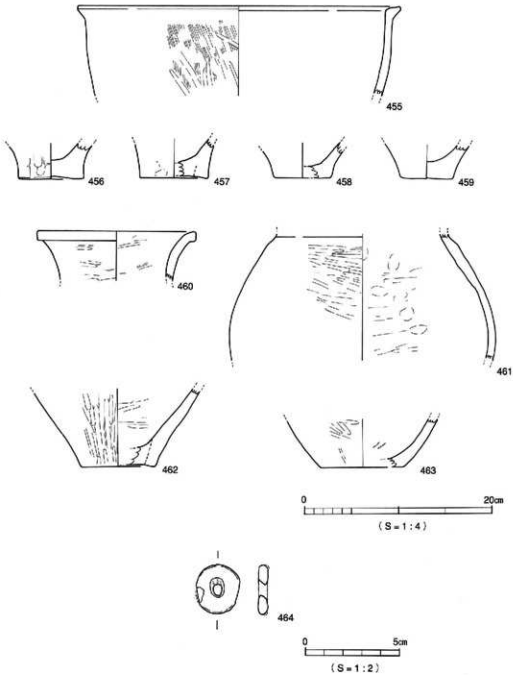


図85　L区出土弥生土器・土製品

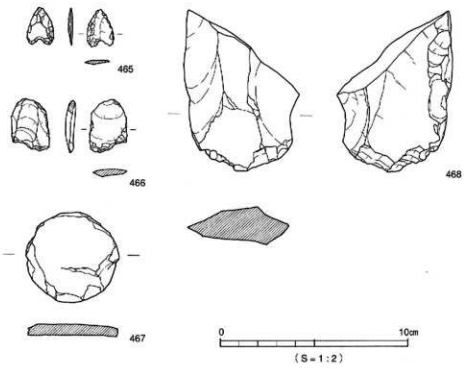


図86　L区出土石器・石製品

壺（460～463）　復元径16.6cmを測る口縁部460は、外反しながら外上方に開くもので、端部に平坦な面を持つ。461は胴部上半の片、外面の調整は磨きによっている。462・463は、平底の底部である。

紡錘車（464）　壺の胴部片と思われるものに穿孔して、紡錘車に転用している。直径2.3×2.6cm、厚さ0.4cm、重量は3.05ｇを量る。

石器・石製品（図86）

石鏃（465）　サヌカイトを素材とした打製の凹基無茎鏃で、重量0.63ｇを量る。

剥片（466）　サヌカイトの不定形剥片で、部分的に自然面を残している。

円板状石製品（467）　厚さ0.6cmを測る、板状の緑泥片岩の周縁を打ち欠いて円板状に成型したもの。紡錘車の未製品か。

石核（468）　凝灰岩の石核、重量102.9ｇを量る。

（2）古墳時代の遺構と遺物

a．L区1号墳（図75、87・88）

L区で調査区としたのは、図83に示したとおり、南下がりの緩傾斜面のおおよそ1,300㎡の区域である。この調査区の南部で、検出された円墳を1号墳としている。この調査区検出の古墳も、他の調査区同様盛土の残存はなく、墳丘は地山面に周溝の痕跡として残っているのみである。1号墳は墳丘直径およそ15m、周溝外側までの差し渡し23mを測る。北側の最深部で0.8m程度の深さを測る周溝は、墳丘南側の斜面下方では残存していない。主に東から北側の周溝内より須恵器、埴輪の破片を多く出土した。また、先述のように墳丘上で、弥生時代中期前半の竪穴住居が検出された。

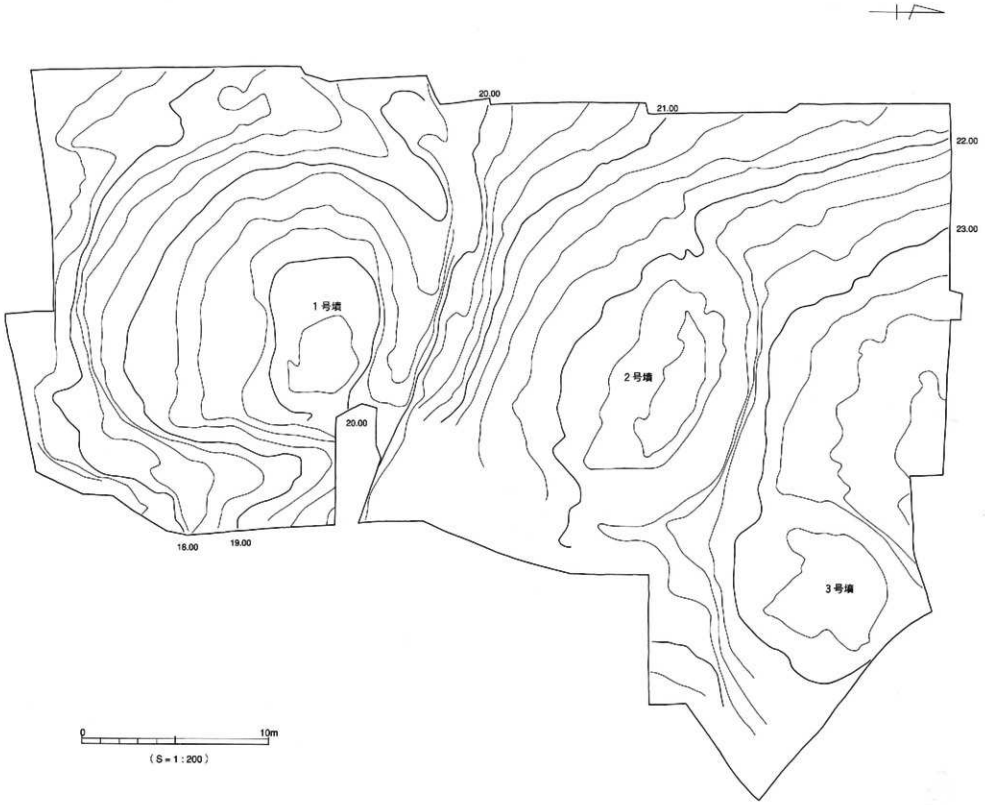


図87　L区完掘後コンター図

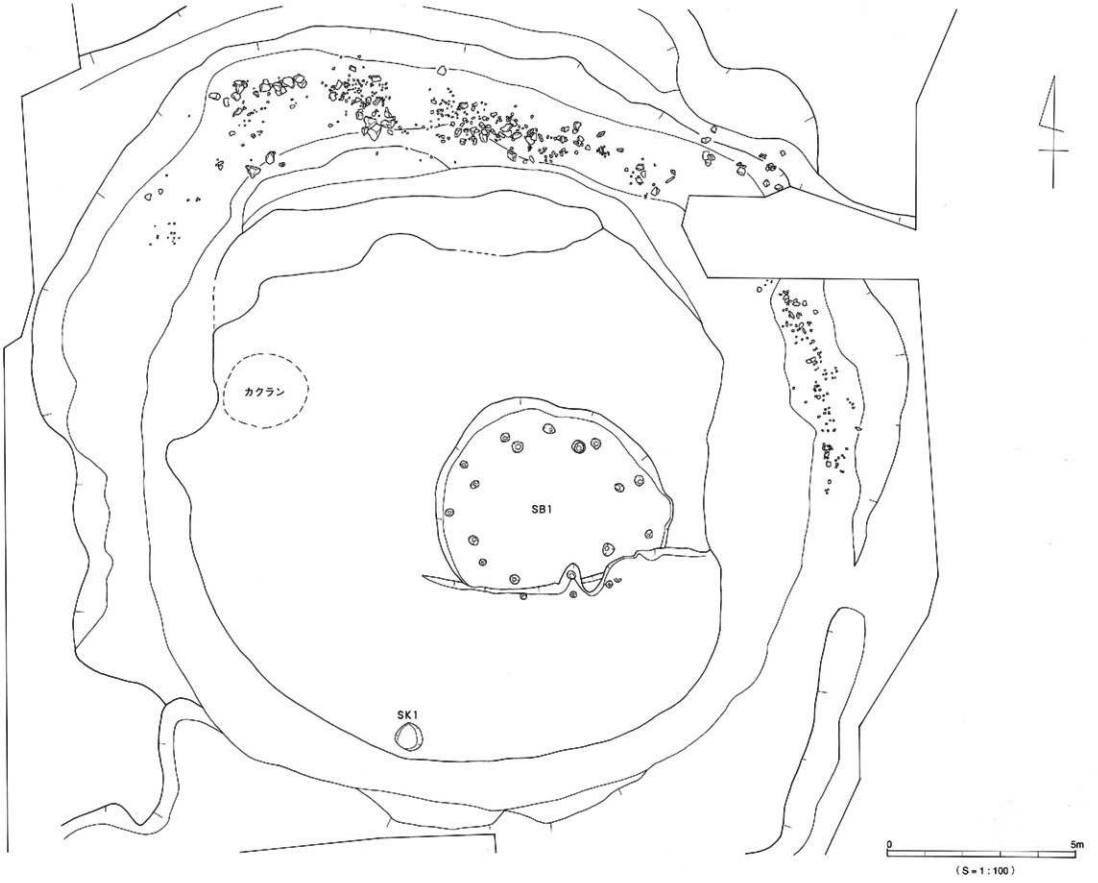


図88　L区1号墳周溝遺物出土状況

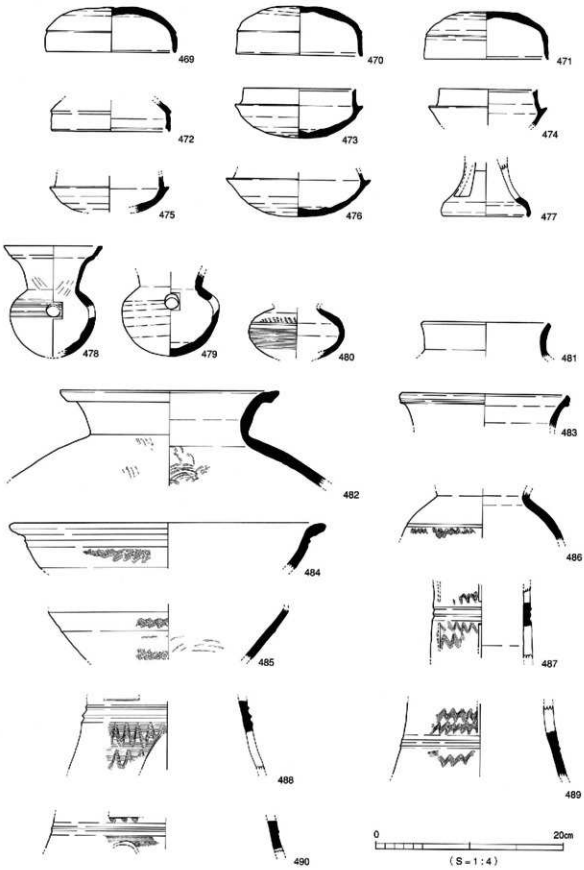


図89　L区1号墳周溝出土遺物（1）

1号墳周溝出土遺物

須恵器（図89・90）

坏（469～476）　蓋469～472は、器高4.8～5.2cm、口径12.4～13.7cmを測るもので、いずれも天井部、口縁部境に稜を持つ。天井部はその2／3程度の部分を回転ヘラ削りされている。470・472の口端部には段を持っている。473～476は身で、476を除いて口縁部は比較的長く、直上に近く立ち上がっている。口端部が確認できる473・474でみてみると、段もしくは窪みを持った端部に仕上げられている。回転ヘラ削りは外面底部の2／3～3／4の範囲となっている。

高坏（477）　短脚1段透かしの高坏脚部片である。裾部は内湾し、端部を丸く仕上げている。長方形透かしは3方向に施される。

甕（478～480）　底部を欠くが、現状で高さ11.7cm、口径10.4cm、張りをやや上位に持つ胴部は最大径9.0cmを測る。太く短めの頸部から沈線のような段を介して、内湾気味に口縁部が開く。胴部上位にカキ目がみられるほかは無文である。479は頸部より上を欠くが、478と同様の形態になるもので、やはり無文である。480は扁平な形態の胴部片で、その上位の部分に櫛歯状工具による刺突文を持っている。

壺（481）　短い口縁部が直上に立ち上がっている。短頸壺の口縁部。

甕（482・483）　482は復元口径23.0cm、483で17.6cmを測る。482では口端部に接して直下に断面三角形の細い凸帯を持っている。

器台（484～493）　いずれも破片であるので、同一個体のものもあるかもしれない。484・485は高坏型、486・487は筒型になる可能性が高いと思われるもので、その他の脚部や裾部はいずれとも決し難い。どの片にも櫛描波状文が施されている。脚部の透かしは487・489が長方形、488が三角形、490・491では丸みを帯びた三角形となっている。

形象埴輪（図91～94）

蓋（494～498）　494・495は笠部で、494で裾径47.2cmに復元できる。立飾りの軸受筒状部を欠くが、その基部までの高さ13.3cmを測る。笠天井部の軸受基部に低い突帯が1条貼り付けられている。外面は横ハケ目で調整され、裾直近に1条の横走する沈線、また中位には2条平行に横走する沈線を施して上下の施文帯を区画し、この施文帯に施された2条の縦方向の沈線とあわせて千鳥格子様の施文を描いている。施文は横沈線の後縦沈線を描いている。また、内面中位には円筒との接合痕がある。495の破片は、剥離があったり器面の荒れがあるため確定的なことはいえないが、横方向の2条の沈線、また縦方向の2条沈線と494に似た施文を持つことから蓋と判断している。ただし、縦沈線と横沈線が交叉するところが494とは異なる部分である。

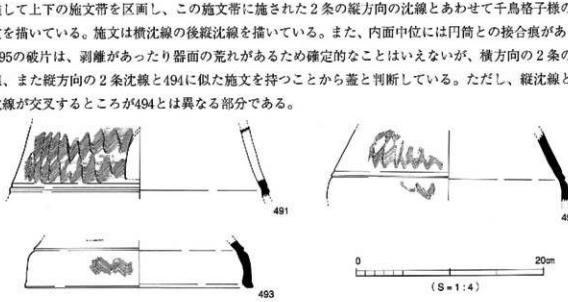


図90　L区1号墳周溝出土遺物（2）

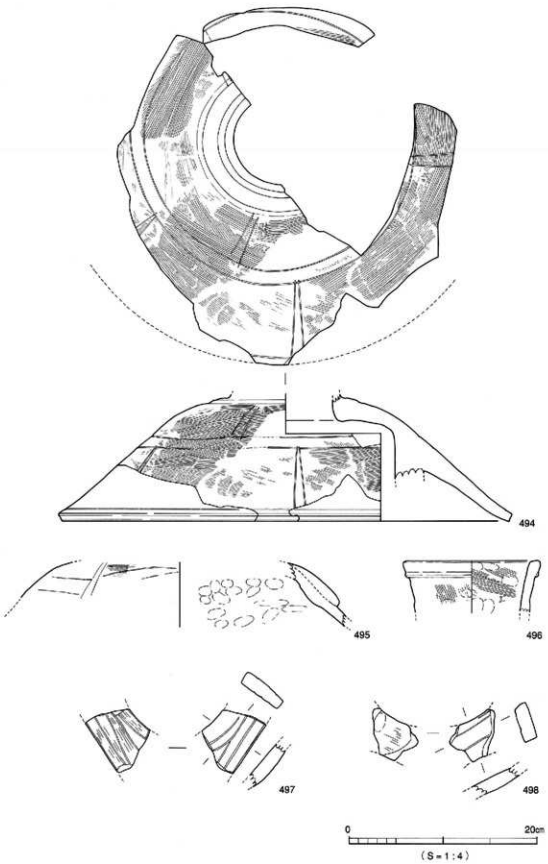


図91　L区1号墳周溝出土遺物（3）

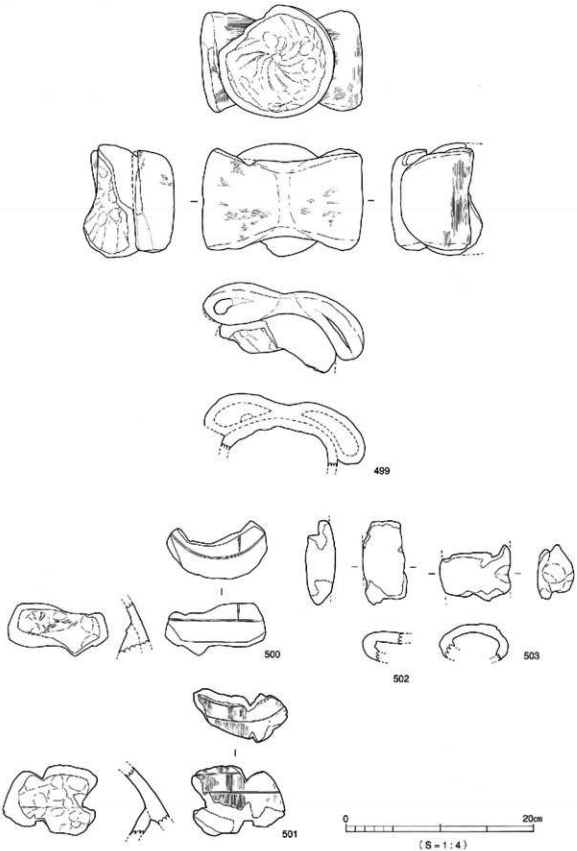


図92　L区１号墳周溝出土遺物（４）

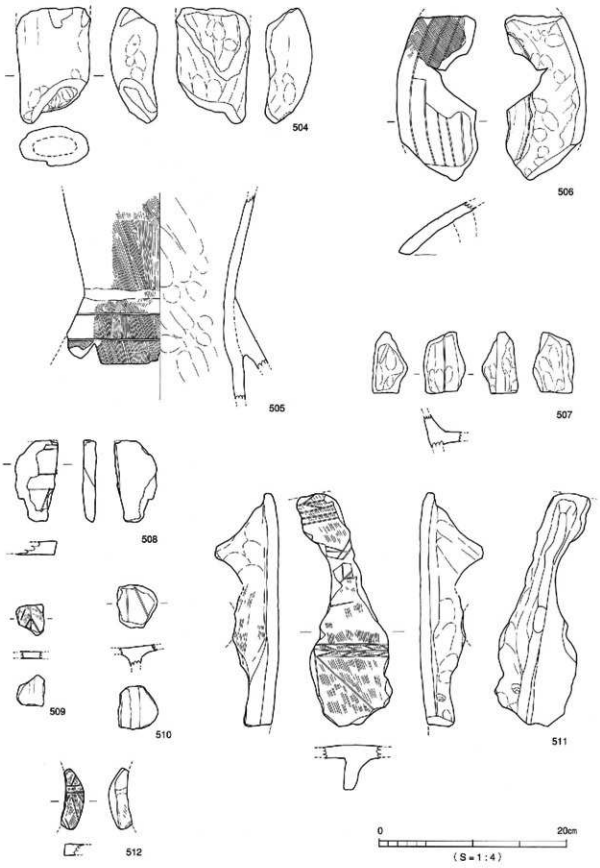


図93　L区1号墳周溝出土遺物（5）

496は輪受筒状部の上端部片、復元口径14.5cmを測る。外面端部に接して低い突帯が貼り付けられている。497は立飾りの片である。厚さ1.0～1.5cm、幅5.2cm前後の粘土板の両面に2本単位の沈線よる施文が行われている。長辺の一方が直線、他方はやや弧を描く形態となっている。498も同様の形態をなす破片で、盖として扱ったが、施文は片面にしか行われていないので、盾等、別器種の一部の可能性もある。

人物（499～506）　499は、巫女の頭部、島田髷片である。幅8.0～10.5cm、厚さ1.0cm前後の粘土板を成型した島田髷を、直径12.5cmの頭部に載せている。髷は中央部が中実、前後が中空となっている。破損のため、現況は、中空の内部が覗ける程の隙間が髷側部に開いているが、本来は袋状に閉じられていたものと考えられる。頭部内面には花弁状の絞り痕がある。500・501は、甲冑の板表現と思われる施文を持ったもので、その径から頭部の胴部分と考えられる。500では外面に縦横の沈線、501には横方向の2条の沈線が施されている。502～504は腕、大小はあるものの、粘土板を中空に成型して、横断面楕円形に制作している。詳細な部位は不明だが、504はその大きさ、湾曲の具合から上腕部分と思われる。505は人物の下半身と円筒の接合部で、腰のくびれから衣服もしくは甲冑の裾がスカート状に開いている。現状の残存高21.9cm、くびれ部分を円形に復元すると、直径16.0cmとなる。外面は、縦方向のハケ目で調整。裾の破断面は、外面横位の沈線部分での破損であると思われるので、裾部の外面にはおよそ2.5cm間隔で施された横方向の平行沈線が3条まで確認できることになる。506も505下半部と同様の片で、面をなす端部が存在するもの、1.5～2.0cm間隔の平行沈線が5条確認できる。内面には他の部位との剥離痕があるが、505のような裾部と円筒部との接合痕のようにはならず、ややアールを持った部位との接合痕のようである。図示した、肩甲のような部位の可能性が高い。

盾（507～512）　大小の破片があるが、すべてヘラ描の施文を持つ。507、510、511は円筒との接合部位で、507表面の鰭状部分の基部には縦方向に1条の、また510には2条のヘラ描文様がある。511は上端部と考えられる片で、上端は水平な辺にはならず、弧を描くような形態となる。上端縁取りの施文は綾杉文直下に3条の平行沈線を組み合わせたもの、これをやや下った部位にも横走する2条平行沈線の間を綾杉文で埋めた施文があり、その間のスペースに後述の3号墳出土の603のような2条沈線で描いた凸形様文様と、これを斜めに切る斜線との組み合わせのような文様が描かれていたものと思われる。裏面円筒の上端は斜めにそぎ取られたような形状をなし、これをやや下った位置に円形の透孔がある。508は接する2辺が生きているので、上端または下端のコーナー部分の片である。ここでは上端右隅として図化している。上端の縁取りは間隔の詰まった2条平行の沈線で、これを2.5cm下った位置にやや間隔の開いた2条沈線が横走し、その下位に斜め方向の沈線が1条確認できる。鋸歯文の一部か。509には、他の個体と同様の綾杉文が施されている。512は、弧状をなす辺を持つもので、2条の平行横沈線を挟んで、上下に鋸歯文と思われる斜線が施されているものである。

家（513～517）　いずれも屋根の破片である。513～515はいずれも寄棟の屋根のコーナー部分で、513は幅2cmの薄い突帯を貼り付けた軒先までしているが、壁との接合部までは残っていない。なお、516・517ともに同様の屋根の軒先片である。一方、514・515には軒先は残っていないが、下面に剥離痕があり、この部分で壁と接合していたものと考えられる。

不明品（518～520）　518はやや湾曲した粘土板に、直径2.3cmに復元できる円孔を持つもので、1辺に面を持った端部を持つ。519は、外面に段を持って屈曲するもので、二重口縁壺の口縁部のような形態をなす。520は緩やかに湾曲する粘土板に薄い突帯状の粘土を貼り付けたもの。人物の一部か

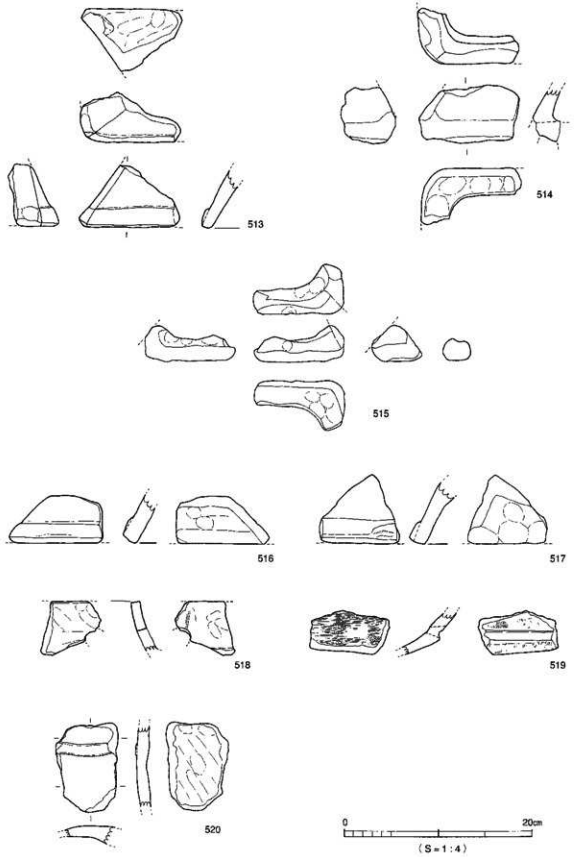


図94　L区１号墳周溝出土遺物（６）

もしれない。

円筒・朝顔形埴輪（図95）

すべて破片で、朝顔と確認できるのは、521の口縁部のみである。復元口径40.6cmで、端部は中窪みの面をなす。外面に貼り付けられた突帯は高く、断面M字形をなす。土師質の焼成ではあるが須恵質に近い硬質の焼きである。522～525の4点はいずれも須恵質の焼成で、器面は暗赤褐色、断面は暗青灰色の色調を呈するものである。523の外面に縦方向のハケ目、内面が指撫でで調整されているのを除いて、その他のものの外面は横ハケ目、内面に斜め方向のハケ目といった点で共通している。底部526・527は土師質の焼成、526はやや白っぽい堅緻な焼成で、突帯は低いがシャープなつくりである。527は赤褐色の軟質の焼きである。526の外面は縦ハケの後、B種横ハケ目で調整されている。

弥生土器（図96）

甕（528）　以下の陶器、土師器などとともに、混入品として出土した。くびれの上げ底の形状をなす、中期の遺物である。

陶器（図96）

擂鉢（529）　備前焼擂鉢の片口部分を伴った片である。器高12.7cm、口径26.4cmを測る。口縁部は

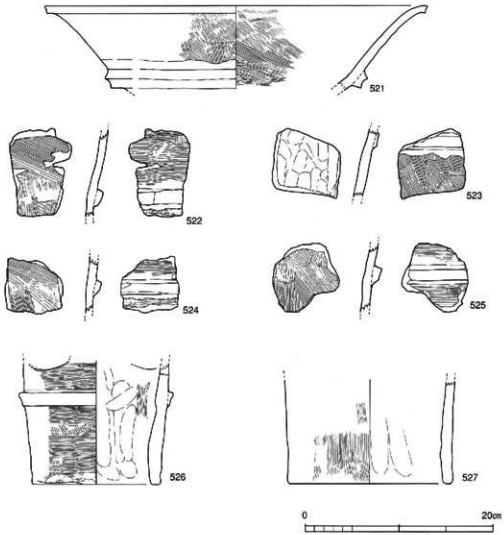


図95　L区1号墳周溝出土遺物（7）

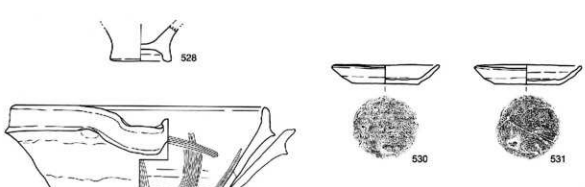


図96　L区１号墳周溝出土遺物（８）

外面に稜を持って垂直に立ち上がり、端部を丸く収める。擂り目は７本単位で、間隔を持って放射状に施され、部分的に横方向の３本の擂り目によって切られている。15世紀代のもの。

土師器（図96）

皿（530・531）　底部回転糸切りによる皿。近辺に存在する近世の墓から混入したものであろう。

１号墳丘採集の古墳時代遺物（図97）

形象埴輪

蓋（532）　笠部天井の頂部片で、立飾りの軸受け筒の基部にあたる部分で、断面三角形の突帯が貼り付けられている。筒部の復元内径はおよそ7.2cmを測る。

須恵器

坏（533）　蓋の口縁部片で、復元口径12.2cmを測る。天井部と口縁部境に稜を持ち、口端部は若干傾いた中窪みの面をなしている。

韓式系軟質土器

甕（534）　甕の胴部と思われる小破片である。外面に格子叩き、内面にはハケ目が施されている。

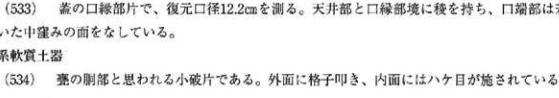


図97　L区１号墳丘出土古墳時代遺物

b．L区２号墳（図75、87、98）

調査区北東隅で検出されたもので、農道や開墾による段落ちのため、そのおよそ半分程度しか調査できなかった。１号墳と同様、周溝のそれも一部だけの検出で、周溝南西端で３号墳周溝北東部と接するような位置関係であるが、実際のところ切り合っているのかどうかは不詳である。削平され、最深部で0.2m程度しか残っていない浅い周溝内より須恵器、埴輪の出土があった。なお、墳丘上ではＳＫ４とした弥生時代中期前半の不整形土坑が検出されている。

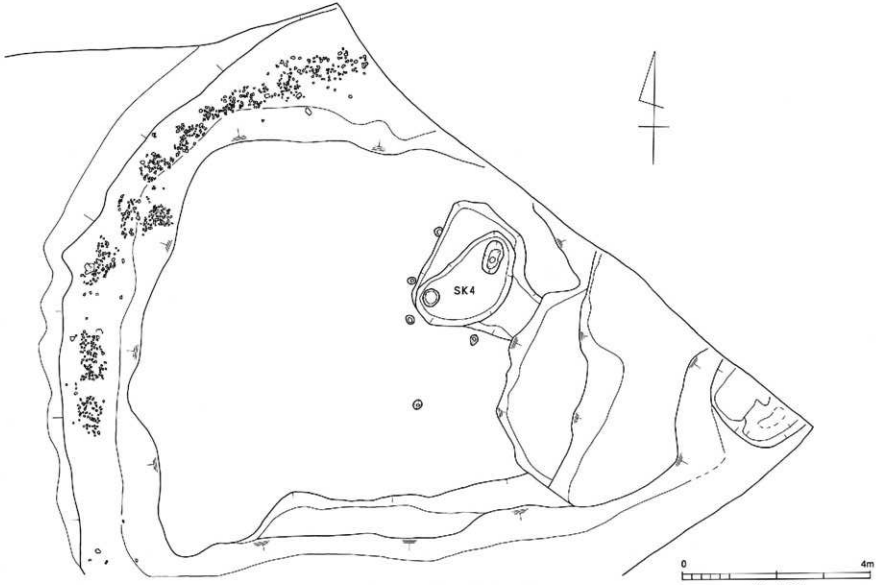


図98　L区2号墳周溝遺物出土状況

2号墳周溝出土遺物

須恵器（図99）

坏（535～540）　蓋535～537は、天井部と口縁部境に稜を持つものであるが、536の稜は、他の2点に比べて低く、鈍い。また、536の口端部が外に傾いた面をなすのに対して、535・537は段をなす端部となっている。538～540の身は、口縁部、受部ともにやや長めのもので、539の口縁部は若干内傾するが、他の2点は垂直に近く立ち上がっている。最も残りのよい538で、器高5.2cm、口径11.4cmを測る。

高坏（541）　器高9.8cm、口径10.8cm、脚裾径9.6cmを測る。短脚の無蓋高坏である。口縁部は長く直上に立ち上がっている。口端部は中窪みの内傾した面をなす。脚部外面はカキ目調整され、透孔は3方向に施されている。

壺（542）　口縁部の小片、頸部外面には断面三角形の細い突帯が1条巡り、その上位の口端部直下に櫛描波状文が施されている。口端部は下方に肥厚し、外側に平坦な面をなす。

形象埴輪（図100）

蓋（543）　比較的状態のよい立飾りの片。外方に3個所、下方に1箇所の突起があるが、外方の最下部の突起は欠けている。およそ1cmの粘土板を加工して製作されたもので、表裏の面はハケ目調整され、ヘラ描の文様を施されている。2条平行の沈線で外周を縁取ることを基本としている。

家（544・545）　両者ともに、鰹木と思われる破片である。直径2.5～2.6cmの中実の円柱状を呈する。

人物（546・547）　いずれも人物の頸部付近の破片と思われるもので、反転図として掲載しているが、必ずしもそのような単純な形態にはならないのかもしれない。

不明品（548～552）　548は上下も定かでないが、一応図のように下方に向かってすぼむ形態のものとして掲載している。12cm程度の間に、直径を18cmから13cmにまで減ずる逆円錐形状を呈するもので、内湾気味に下ってきて、小さな段を介した後一旦外反して、また内湾気味に降りる形態のものである。外面の段より上位の部分は縦ハケ目で調整され、以下の部分は縦方向に撫でられている。人物の大腿のあたりの衣服の表現であろうか。549～552は、大小の違いはあるが、中実の断面円形、平面

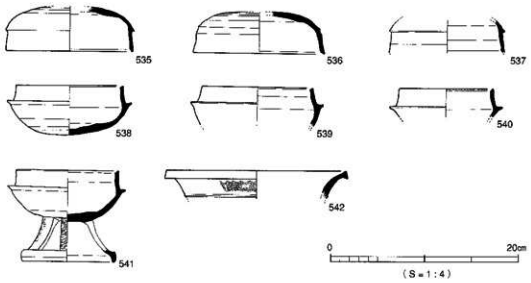


図99　L区2号墳周溝出土遺物（1）

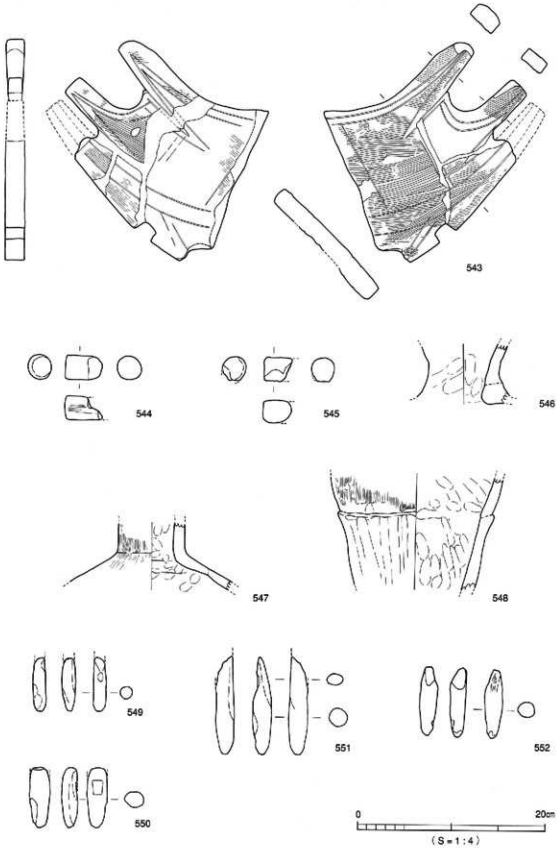


図100　L区２号墳周溝出土遺物（２）

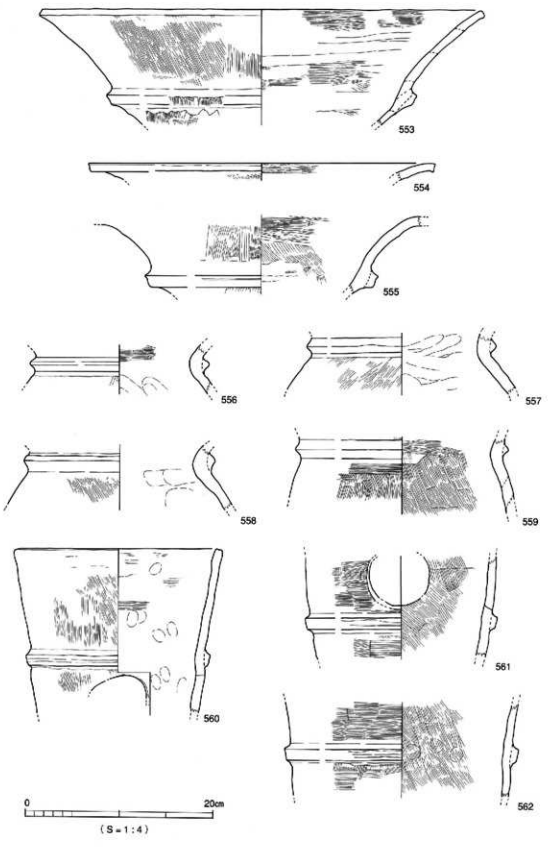


図101　L区２号墳周溝出土遺物（３）

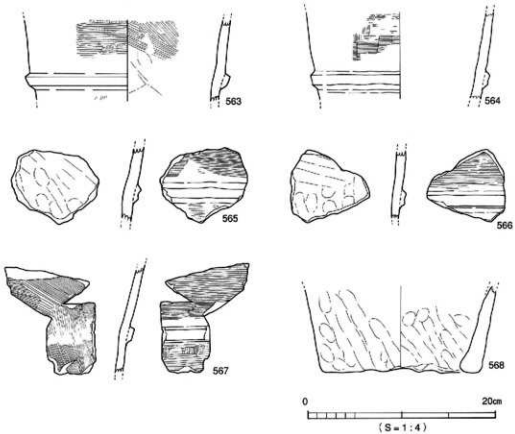


図102　L区２号墳周溝出土遺物（４）

紡錘形に近い形状を呈するものである。551の一端は平たく押し潰され、この部位で他の部分に貼り付けていたようである。人物の衣服に付属する紐状の部位の表現か。

円筒・朝顔形埴輪（図101・102）

553～559は、口縁部や肩部の形状から朝顔と判別できるもの、また、560が円筒で、その他はいずれとも判定がつかない。ここでは一応円筒として扱っておく。朝顔口縁部で最も残りのよい553で、復元口径44.6cmを測る。553・555の外面にタガが確認できるが、いずれも高くしっかりしており、あまり強い中窪みにはならない。口縁部内面の端部近くはどの個体も横ハケ目調整されている。556～559の頸部には、いずれも断面三角形のタガを持つ。なお、これら朝顔のうち554・555の口縁部、559の頸部の焼成は須恵質となっている。円筒上位部分の560は復元口径20.8cm、上から２段目の区画に円孔が確認できる。外面は縦ハケ目調整されるが、口端部付近は撫で消されている。内面口縁部近くに施された横方向のハケ目も撫で消されている。その他の破片のうち、561～564・567は須恵質の焼成で、土師質のものも含めて、外面の調整にはＢ種横ハケが多用されている。568は底部で、復元径15.6cmを測る。確認できる範囲の内外面には斜め方向の撫で調整が施されている。

２号墳丘採集遺物（図103）

弥生土器

壺（569）　直径8.0cmを測る平底の底部片。

須恵器

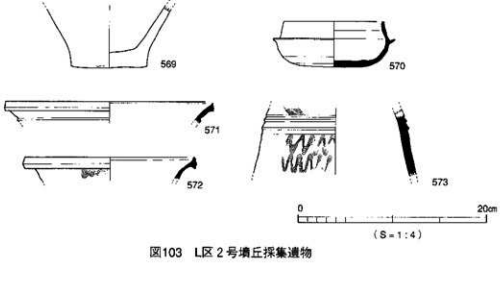


図103　L区２号墳丘採集遺物

坏（570）　器高4.9cm、口径10.6cmを測る身である。口縁部は長めでやや内傾し、端部はほぼ水平な面をなす。底部はその3／4程度の範囲をヘラ削りされている。

壺・壺（571・572）　いずれも口縁部小片で口径にはやや不安がある。両者ともに口端部は上下に拡張している。571では口端部をやや下った位置に、断面三角形の細い突帯が１条貼り付けられ、572には櫛描波状文が施されている。

器台（573）　脚部片。断面三角形の細い突帯２条で区画された上位の部分には櫛歯状工具による列点文と三角形透孔の一部が、また下位には櫛描波状文が確認できる。

c．L区３号墳（図75、87、104）

L区中央部、南の１号墳、北東の２号墳との間で検出された円墳である。削平され、また、南を果樹園境の段落ちで切られているため、現況は東西に長い楕円形状の墳丘痕跡として残っており、その径７mを測る。墳丘北側に深さ0.3mの周溝が弧状に検出されており、この周溝から須恵器、埴輪が出土した。また、周溝内東部より長さ1.2m、幅0.3mの扁平な結晶片岩の自然石が検出されている。いずれかの古墳の主体部にかかわる石材であろうか。

３号周溝出土遺物

須恵器（図105・106）

坏（574～585）　574～583の蓋のうち、つまみの付くものは坏とはいえ、有蓋高坏の蓋であるが他の坏蓋とともにここで扱っておく。つまみの付くものの器高は最も低い579の4.9cmから、最も高い574の6.5cmの間、おおよそ5.8cm前後になるものが多く、口径では580の11.7cmから、576の12.6cmまで、12.2cm前後が平均となっている。口端部は傾いた面をなし、外端部で接地する。端面は574、575、583のような段をなすもの、576～578のような平坦な面になるもの、579、582のように中窪みの面となるものがある。天井部外面のヘラ削りは、全体の2／3～3／4の範囲を削るが、中には578のようにカキ目を施されるものもある。身は584・585の２点、584で器高5.6cm、口径11.8cm、585でそれぞれ4.9cm、11.7cmを測る。口縁部はやや内側に傾き、端部はやや中窪みの内傾した面をなしている。

高坏（586～594）　すべて短脚の有蓋高坏である。器高は8.4～9.3cm、口径10.4～11.0cmの範囲にあ

る。口縁部はほぼ直上に立ち上がるものが多いが、593のようにやや内傾するものもある。口端部は、壺のように段を持つものはなく、平坦、あるいは中窪みの内傾した面をなすものばかりである。脚部の透孔は長い台形の3方向のものがほとんどであるが、586は4方向に復元されている。また、590を除く脚部外面にはカキ目調整が施されている。590では脚部にカキ目はないが、坏底部をカキ目調整されている。

器台（595～600）　595～598は筒型器台の片である。595・596は受部片で、同一個体と思われるものである。復元口径20.4cmを測る口縁部は、端部を上下に拡張し、端面は中窪みの面をなしている。口端部直下と受部中位の外面に断面三角形の細い突帯を巡らせ、中位の突帯の上下のスペースに櫛描波状文を施している。597は受部直下に続く部分で、受部とこの部位をあわせて、筒状の台状に載った壺の形態を模していることになる。したがって、これらの部位を壺部と呼ぶことにすると、この部分は胴部ということになる。受部596で一旦強くくびれた後、この部分で大きく外に張り、下方の筒部に続く。胴部には櫛歯状工具による列点文、その下位に幅広の凹線状の窪みを2条巡らせ、鋭い波板状の凹凸を設け、その直下には方形の透孔がある。597の筒部片上端をあわせてみると、この窪みや方形透孔で部位的には596、597が重なるものと考えられる。599・600は、筒形、高坏形の別は不詳であるが、脚部中位以下、裾部近辺の片である。2条単位の細い突帯によって区画された部位に櫛描波状文と透孔を施されている。599で僅かに確認できるところによると、この透孔は丸みを帯びた三角形状になるものである。

甕（601）　器高39.7cm、口径21.9cmを測るものである。頸部はやや外反気味に外上方に伸び、口端部を上方に拡張し、平坦な外端面を設けている。端部直下には断面三角形の細い突帯が1条巡る。胴部は張りをやや上位に持っている。内外面ともに叩きの痕跡が顕著である。

形象埴輪（図107・108）

盾（602～606）　602は上端部の片、603は向かって右側の端部を含む片と考えられる。図109のように復元してみた。盾面の上下辺は2条の沈線で、両側辺は沈線と綾杉文で縁取りされる。これらの縁取りで囲まれた盾面は、横走する沈線・綾杉の組み合わせで4段に区画される。これらの区画の最上段と最下段には縦沈線で埋めた鋸歯文とこの間に半円文を図のように配置する。中位の2段には2本単位の沈線を2組組み合わせた凸状に似た文様を、幅一杯に描き、この文様の隅々に図のような対角線を施し、盾面部材の刳ぎ合わせを表現している。盾面の横断面は緩やかな弧を描き、表面は縦ハケ目で調整されている。604は残存長30.8cmの盾面と円筒部の接合部分の片である。盾面が緩やかな弧を描く603と異なり、盾面中央部が鰭付円筒状に大きく盛り上がる形態になるものと思われる。この部分の鰭状部との境部分には円形の透孔が2ヶ所に確認できる。また、鰭状部の基部にも隅丸方形もしくは長方形になると思われる透かしがある。鰭状部の表面にはヘラ描による縦方向や斜め方向の沈線が施されている。605は側辺端部の片で、平行沈線と綾杉文の組み合わせとこれに直交する沈線が、また606は上下端付近の破片と思われ、2条の平行沈線と鋸歯文の一部が観察できる。

盾（607）　立飾りの片である。U字状に刳り込まれた突起部分で、縁のラインに沿わせて2本単位の沈線文を描いている。

家（608～611）　608は家の床部分をなす厚さ1.3cm程の粘土板で、一方の長辺が生きている。この生きた長辺に接する表裏の面には幅2cm程度にわたる剥離痕跡がある。摩滅もあって、直接接合するかどうかは不詳であるが、裏面の剥離痕には609のような方柱状の部材が接合して高さ1.5cmの土台と

図104 L区3号墳周溝遺物出土状況

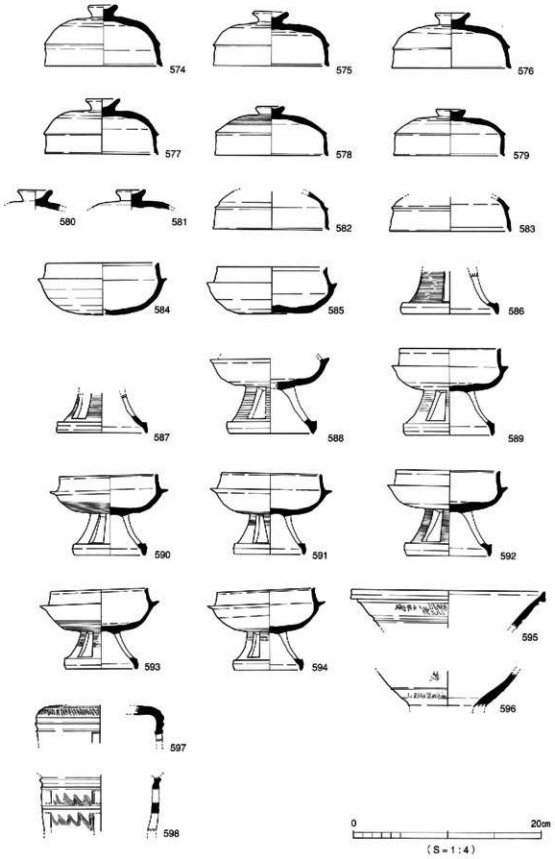


図105　L区３号墳周溝出土遺物（１）

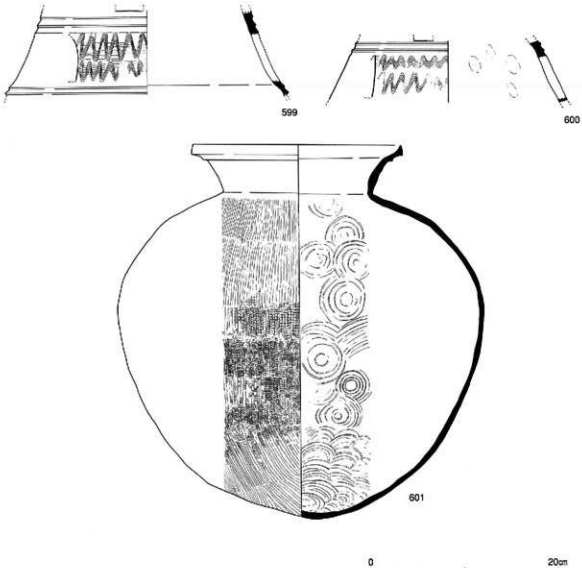


図106　L区３号墳周溝出土遺物（２）

なっていたものと考えられる。608の裏面の剥離痕の傾斜に見合うような傾きを持った接合によって、接地は面で接地するようになっている。610・611は軒先部で、１号墳出土の家同様、軒先端部の表面に幅２㎝程度の薄い突帯を貼り付けている。

人物（612～617）　612は人物の腕、右腕の二の腕から甲・指先にかけての部位と考えられるものである。残存長13.6㎝を測る。指は１本だけが生きているが、非常に短く表現されている。側面観は後ろを凸としてやや湾曲し、正面観は逆円錐形に似た形態をなしている。二の腕部分は中空に、これより先は中実に製作され、掌面には指頭圧痕が残っている。613・614は人物の衣服裾あるいは草摺と考えられるもので、613では反転図にしているが、必ずしもこのようにシンメトリーにはならないかもしれない。613でみると、やや外反気味に広がり、裾端は平坦な面をなしている。外面は丁寧に縦ハケ目調整され、間隔1.3～3㎜程度と不均等な横沈線が４本まで確認できる。615～617は、肝細な部位は不明だが人物の部分と考えられる破片、615は比較的強く湾曲した粘土板の表面に梯形になると

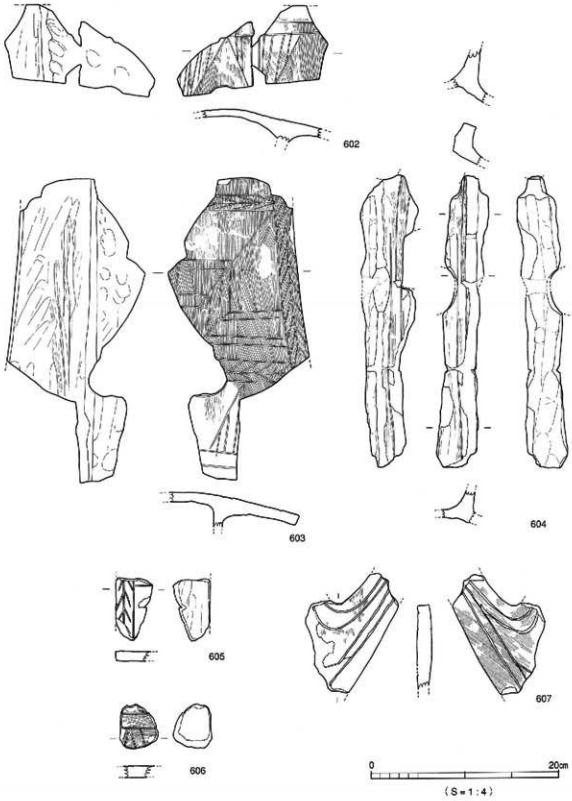


図107　L区３号墳周溝出土遺物（３）

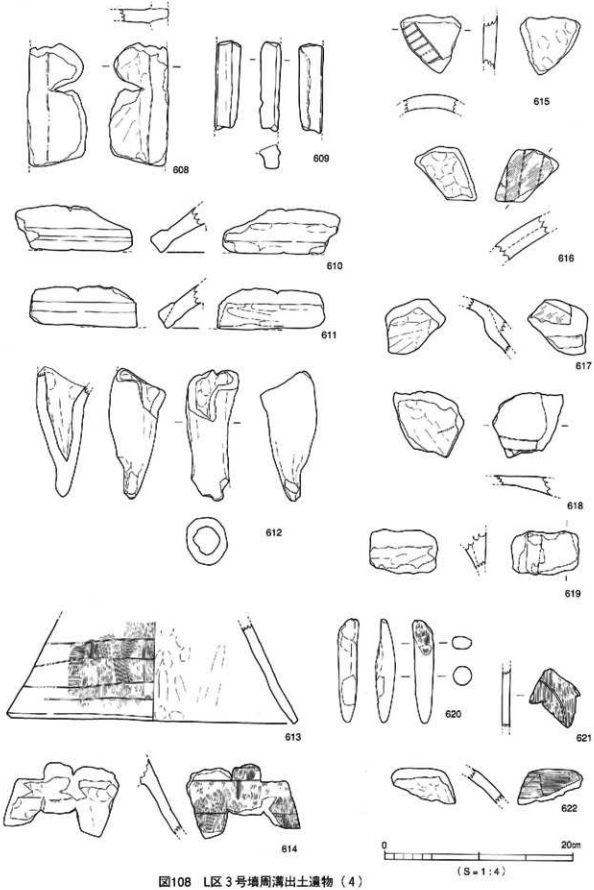


図108　L区３号墳周溝出土遺物（４）

思われるヘラ描文様を持つもので、胴の一部の表現か。616・617は1号出土の515に似た平行沈線を持つ破片で、肩甲のような部位と考えられる。

不明品（618～622）　618・619は小片であるが、厚みのある部分から次第に薄くなるもので、表面に薄い帯状の突帯を貼り付けられるものである。人物または馬の一部であろうか。620は2号墳で多く出土したものと同形態のもので、中実の紡錘形状をなすもので、その一端は別の部位に貼り付けられていたものと思われ、接合のため、扁平に潰された剥離面にはハケ目が施されている。621・622は外面をハケ目調整された後、沈線施文を描かれるもので、平坦な破片621には弧状の施文が、やや湾曲する622には2条の鋸歯状の施文がある。621は後述する線刻を持つ円筒の一部であるかもしれない。

円筒・朝顔形埴輪（図110・111）

623～625は円筒埴輪の口縁部片で、623が外面に斜めハケ目の後横ハケ目を施されるのに対して、624は斜めハケ目のみで調整されている。625は外面の口縁部下に鋸歯状のヘラ描施文を持つもので、外面の斜めハケ目は口端部直近で撫で消されている。また、前2者の口端部が平坦な面をなすのに対して、625ではやや丸みを帯びた端部となっている。朝顔626～632のうち、626～628が口縁部片、626で復元口径40.6cm、627で39.6cmを測る。いずれの個体も外面に高くしっかりした中窪みのタガを持っている。626・627は内面に斜めから横方向のハケ目があるが、628では斜め方向に指撫でされている。629～632は頸部片で、いずれも頸部のくびれの部分に断面三角形のタガを持っている。633～639は円筒、朝顔の別がつかないもので、いずれも朝顔口縁部のタガのような高いタガは持たない。これらのうち、635、638の外面はB種横ハケのみで調整されている。また、底部639は、外面を底端部直近まで縦ハケ調整されている。

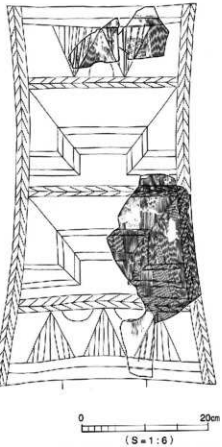


図109　L区3号墳出土盾形埴輪想定復元図

L区出土古墳時代遺物（図112）

須恵器

壺（640）　口縁部の小片であるので、口径にはやや不安があるが、一応17.0cmの復元口径となっている。丸く収められた口端部直下に断面三角形の突帯が1条巡る。

形象埴輪

盾（641・642）　641は604と同じ特徴を持つ破片で、鰭付円筒のような形態になるものである。604同様、鰭状部分の基部にヘラ描沈線文様が1条確認できる。642は石見型盾の上段帯右隅あるいは下段帯左隅に近いと思われる破片で、図では上段帯として表現している。2条の平行沈線で縁取られた側辺と上辺が鋭角に交わるものと考えられる。コーナー近くには隅丸方形の孔が設けられていたことが痕跡によってわかる。また、中央帯の刳り込みも一部確認できる。盾面文様の全容は不明だが、

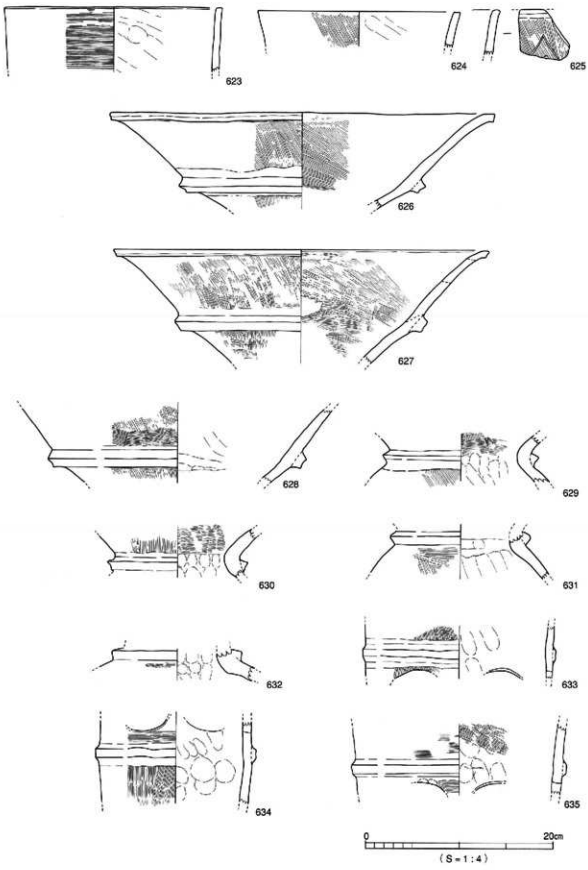


図110　L区３号墳周溝出土遺物（５）

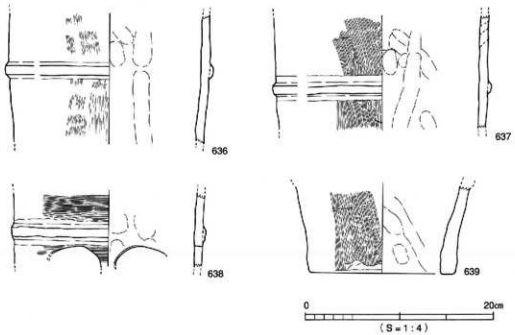


図111　L区３号墳周溝出土遺物（６）

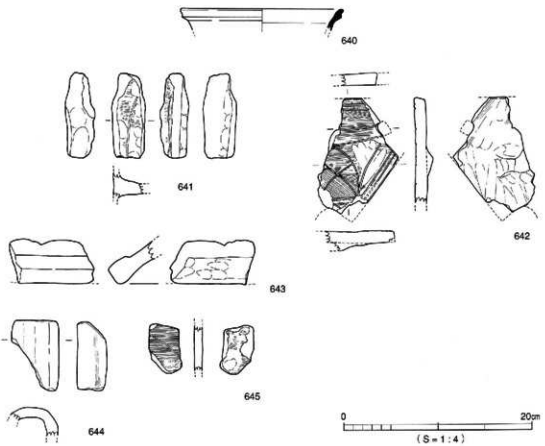


図112　L区出土古墳時代遺物

直線文と弧状文を組み合わせた文様パターンのようである。

家（643）　軒先部分の破片で、他の家破片と同様の薄い突帯を端部に貼り付けたものである。

人物（644）　円筒状に作られたパーツで、他の出土例からすると人物の腕の可能性が高い。

不明品（645）　613と同じく、外面にハケ目と線刻文様を描かれる破片である。

d．不明遺構ＳＸ１（図113）

遺物の出土もないため所属年代など全く不明だが、一応ここで扱っておく。３号墳の西直近で検出されたもので、丘陵西斜面をカットして造成した2.5×0.8mの三日月状の平坦面に、４基の柱穴状の穴を一列に配置したものである。

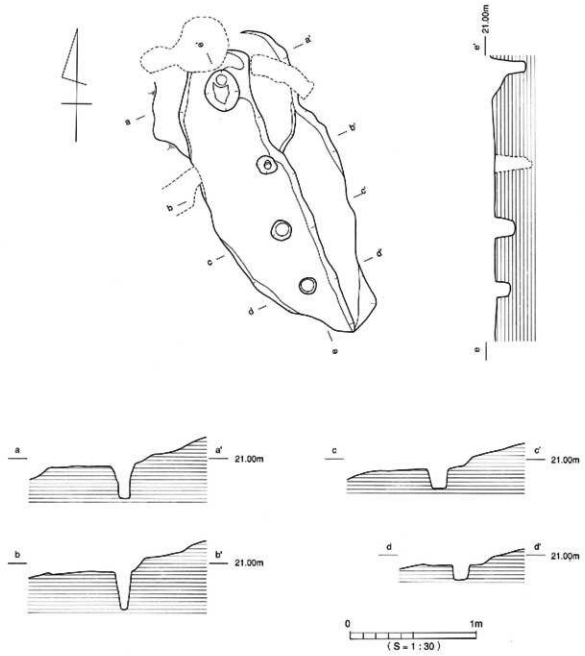


図113　L区SX１

遺物観察表

出土遺物について、観察および計測値一覧表を作成した。番号は本文中の通し番号に対応している。なお、観察表の各項目においては、以下のような略記を使用している。

法量欄　（　）：推定復元値

調整欄　口－口縁部、頸－頸部、胴－胴部、胴上－胴部上半、胴下－胴部下半、底…底部、天－天井部

胎土・焼成欄　長－長石、石…石英、（数値）…鉱物粒の大きさ（㎜）、◎－焼成良好、○－焼成やや良、△－焼成不良

表2　H区ＳＫ１　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	口径(18.0) 残高20.0	折り曲げによる頸部に2本のヘラ描沈線、沈線間に刺突を施す。口端部は丸く刻み目。	㊤ヨコナデ ㊦ナデ	㊤ヨコナデ ㊦指頭痕→ナデ	にぶい橙色 黄橙色	石・長(2) ◎	黒斑	39
2	壺	口径(20.6) 残高10.2	折り曲げ口縁。面をなす口端部には刻み、頸部には1条の沈線。	㊤ヨコナデ ㊦ミガキ	マメツ	浅黄橙色 明黄褐色	石・長(3) ◎	黒斑	
3	壺	底径6.8 残高8.8	平底。	㊧㊦ミガキ ㊨㊩ナデ	マメツ	橙色 にぶい黄色	石・長(1) ◎	黒斑	

表3　H区ＳＫ３　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
4	壺	口径(16.0) 残高14.3	外下方に緩く開く口縁部。端部に面を持ちヘラ描による沈線が1条、下端には刻み目。	㊤ヨコナデ ㊦ハケ ㊨㊩ミガキ	㊤ヨコナデ ㊧㊦指頭痕→ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石(2) 金ウンモ◎		
5	壺	底径9.6 残高6.3	平底。	マメツ	マメツ	淡黄色 灰黄色	石・長(3) ○		
6	壺	底径(6.4) 残高5.6	窪み底。	㊧ミガキ ㊨㊩ナデ	ミガキ	灰赤色 灰赤色	石・長(2) ◎		
7	壺	底径6.2 残高5.1	窪み底。	㊧ミガキ ㊨㊩ナデ	ナデ	淡赤橙色 浅黄橙色	石・長(2) ◎		

表4　H区ＳＫ３　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
8	擦り石		砂岩	(10.6)	9.4	7.3	922		39
9	台石		凝灰岩	28.2	18.2	6.5	2807.5		39

表5　H区ＳＫ５　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
10	甕	口径11.5 底径5.3 器高13.5	折り口縁部を水平方向につまみ出す。口縁上面から頸部の外面に抜ける穿孔が、2孔一組、2方向。	㊤ナデ ㊦ミガキ ㊨㊩ナデ	㊤ヨコナデ ㊧㊦ミガキ ㊨㊩マメツ	明褐色 にぶい褐色	石・長(2~3) ◎	黒斑	39

表6　H区採集弥生　遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
11	甕	残高3.0	尖り気味に丸くおさめられた口縁部は断面三角形の突帯を貼り付け、下端部に刻み目。	ヨコナデ	ミガキ	橙色 橙色	石(1) ◎		
12	甕	口径(18.2) 残高4.9	折り曲げ口縁。	㋑ヨコナデ ㋒ナデ→ハケ	㋐ミガキ ㋐指頭痕・ミガキ	にぶい褐色 赤褐色	含細砂粒 金ウンモ ◎		
13	甕	底径6.2 残高5.2	平底。	指頭痕→ミガキ	ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石(3) ◎	黒斑	
14	甕	底径5.8 残高5.4	平底。	㋒ハケ→ミガキ ㋓ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(2) 金ウンモ ◎		
15	鉢	口径(18.0) 残高5.0	緩く折り曲げられた口縁部。頸部の内面に4条の沈線が巡っている。	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1) ◎	黒斑	
16	壺	口径(19.8) 残高6.7	口縁端部を下方に拡張し、上下縁に刻み目。頸部外面に沈線が6条。内面には突帯の貼り付け3条。	(L上)ヨコナデ (D下)ミガキ	(F上)ヨコナデ (H下)ミガキ	暗赤褐色 暗赤褐色	石(2) ◎		
17	壺	残高9.2	胴部上位に沈線8条巡る。	ミガキ	指頭痕→ミガキ	暗赤褐色 暗赤褐色	石・長(1) ◎		
18	壺	残高4.2	外面にヘラ描による施文を持つ。4条の沈線の上下に2本の綾沈線で区画し木葉文を描く。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石(1) 金ウンモ ◎		39
19	壺	底径(8.6) 残高4.1	平底。	ナデ	ナデ	明褐色 明褐色	石・長(2) ◎		
20	壺	底径(6.0) 残高3.8	平底。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(3) ◎		
21	壺	底径(8.0) 残高5.3	平底。	指頭痕・ミガキ	ミガキ	淡黄色 淡黄色	石(1) ◎	黒斑	
22	壺	底径(10.4) 残高5.1	平底。	㋒ハケ→ナデ ㋓ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(2) ◎		

表7　H区採集弥生　遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
23	石鏃	完形	緑泥片岩	10.0	6.2	1.4	159.7		39
24	石鏃	完形	サヌカイト	1.8	1.3	0.2	0.49	当館整理打製石鏃	39
25	石鏃	欠損	サヌカイト	(1.6)	1.4	0.4	0.74	当館整理打製石鏃	39

表8　H区1号墳　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
26	甕	口径(25.3) 残高11.2	口縁部は外反しながら外上方へ開く。端部を上下に肥ばさせ、外面に丸みをおびた面を持つ。	(L)㋑回転ナデ (D)㋐カキ目 ㋒タタキ→カキ目	㋐同転ナデ ㋑タタキ	青黒色・青灰色 青灰色	長(1) ◎		
27	甕	口径(23.8) 残高3.5	口端部外面の下端に断面三角形の突帯が1条巡る。	(L)㋑回転ナデ ㋐カキ目	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		

表9　H区2号墳　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
28	坏	口径(13.8) 器高4.6	大井部、口縁部境に稜を持つ盌。	㋐回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	長(1) ◎		
29	坏	口径(12.4) 残高4.4	大井部、口縁部境に稜を持つ盌。	㋐回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 灰　色	長(1) ◎		40
30	坏	口径(12.8) 残高5.3	天井部、口縁部境に稜を持つ盌。	㋐回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	長(1) ◎		
31	蓋	口径(11.6) 残高4.7	口縁下外面に稜を持って大きく開く口縁部。 頭部に櫛描波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰白色	石・長(1) ◎		40
32	蓋	残高6.8	扁平な胴部にやや尖り気味の底部。胴張り部に櫛描波状文を持つ。ϕ1.3cm。	㋐回転ナデ カ キ 目 ㋒ ナ デ	回転ナデ→ナデ	暗灰色 灰　色	長(1～2) ◎	自然釉	40
33	蓋	残高10.3	2条の沈線の上に櫛描波状文が施されている。ϕ1.4cm。	㋐カキ目 ㋑ナ デ	㋐回転ナデ ㋑指頭痕	青灰色 青灰色	長(1～3) ◎		40
34	甕	口径(16.4) 残高6.0	口端部を僅かに上方に摘み上げ、外面には口端部に突帯を貼り付けている。	㋐回転ナデ ㋑カキ目	回転ナデ	灰　色 灰　色	長(1) ◎		

表10　H区3号墳　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
35	甕	口径(24.6) 残高9.7	口端部外面に断面三角形の突帯を持つ。	㋐横ナデ ㋑カ キ 目 ㋒タタキ→カキ目	㋓回転ナデ ㋔タ タ キ	紫灰色 紫灰色	長(1) ◎		
36	甕	口径20.7 残高11.8	口端部外面に断面三角形の突帯を持つ。	㋐横ナデ ㋑カ キ 目 ㋒タタキ→カキ目	㋓回転ナデ ㋔タ タ キ	灰　色 灰　色	長(1) ◎		
37	甕	口径(21.8) 残高4.8	口端部をやや下がった位置に、細い突帯が貼り付けられている。	㋐横ナデ ㋑カ キ 目	回転ナデ	灰　色 灰　色	含細砂粒 ◎		
38	坏	口径(13.2) 器高4.2	内湾気味の口縁部は端部に鋭い段を持つ盌。大井部外面に細く浅い一本線のヘラ記号がある。	㋐回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	長(1～2) ◎	自然釉	40
39	高坏	残高5.6	逆脚か蓋高坏の脚部片。透孔は3方向に復元できる。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰白色	含細砂粒 ◎		

表11　H区7号墳周溝　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
40	短頸壺	口径5.2 器高6.0	小型品。直立気味に立ち上がる口縁。	㋐回転ナデ ㋑回転ヘラケズリ ㋒回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	暗赤褐色 赤赤褐色	長(1) ◎		40

表12　H区7号墳主体部　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
41	蓋	口径10.8 器高4.4	有蓋短頸壺の蓋。大井部に鈍い稜を持つ。口端部は丸く収められている。	㋐回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ	㋐ ナ デ ㋑ 回転ナデ	灰　色 灰　色	石・長(1) ◎		40
42	高坏	口径(13.4) 残高3.7	坏底部と口縁部の間に2条の稜が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗オリーブ灰色	長(1) ◎	自然釉	
43	高坏	口径13.4 底径10.7 器高14.0～14.5	椀形の坏。脚部外面中位に2条の沈線、坏部外面に凹線状の撫で痕が1条巡る。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰オリーブ色	長(1) ◎	自然釉	41

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
44	高坏	口径13.0 底径10.6 器高11.5	脚部中位と坏部中位の外面にそれぞれ1条の沈線が施される。	回転ナデ	㋐ 回転ナデ ㋑ ジボリ後・回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1~2) △		41
45	高坏	口径12.3 底径9.0 器高7.3	短脚、椀形の坏。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 △		41
46	高坏	口径8.7 底径7.2 器高5.8	坏底部と口縁部の境に1条の沈線を持つ。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ ㋒ 回転ナデ	回転ナデ	明灰色 明灰色	石(1~2) ◎		41
47	平瓮	口径5.9 器高12.6	完形品。胴部下位に坏片の溶着あり。	㋐㋑ ヨコナデ ㋒㋓ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1~2) ◎	自然釉	41
48	高坏	底径12.8 残高11.9	円柱状の脚柱部は半分中流に近い。裾端部は玉縁状に肥厚する。	㋐ ナデ ㋑ 指頭痕→ナデ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1) ◎		41

表13 H区7号墳主体部 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
49	刀子	一部欠損	鉄	15.60	1.60	0.70~1.20	33.49	木質付着	42
50	刀子	一部欠損	鉄	10.90	1.90	0.70	18.04	木質付着	42
51	刀子		鉄	9.20	1.70	0.80	19.85	木質付着	
52	刀子		鉄	4.17	1.20	0.42	2.92		
53	刀子		鉄	2.05	0.80	0.35	1.07		
54	刀子		鉄	3.70	1.40	0.30	3.87	木質付着	
55	鉄斧	袋部	鉄	4.30	3.7	0.32	20.08		
56	鉄斧	袋部	鉄	8.78	4.0	3.0	105.65		
57	鏃		鉄	14.55	1.80	1.48	77.70		42
58	直刀	刀身部	鉄	69.20	3.70	1.30	414.92		
59	直刀	刀身部	鉄	21.0	3.0	0.80	117.84		
60	直刀	刀身部	鉄	13.40	2.60	1.10	46.14		
61	刀装具	茎の目釘部	鉄	1.69	1.65	0.65	2.68		
62	刀装具	茎の目釘穴部	鉄	2.45	1.25	0.40	2.00		
63	刀装具	茎の目釘穴部	鉄	1.70	1.10	0.40	1.20		
64	刀装具	鐔	鉄	8.40	7.30	1.23	104.61		42
65	刀装具		鉄	5.05	2.95	1.90	25.96	布付着	42
66	刀装具		鉄	3.20	0.32	0.26	0.81		
67	鉄鏃	鏃身の一部	鉄	7.10	1.70	0.80	11.88	木質付着	42
68	鉄鏃	篦被部	鉄	8.40	1.10	0.60	9.07	木質付着	42
69	鉄鏃	篦被部	鉄	6.75	1.30	0.65	5.56	木質付着	
70	鉄鏃	篦被部	鉄	7.20	1.20	0.75	9.73		
71	鉄鏃	篦被部	鉄	7.0	0.95	0.65	6.58	木質付着	
72	鉄鏃	篦被部	鉄	4.85	1.30	0.80	5.68		
73	鉄鏃	篦被部	鉄	4.35	1.20	0.80	4.83	木質付着	
74	鉄鏃	篦被部	鉄	3.60	1.10	0.70	4.01	木質付着	
75	鉄鏃	篦被部	鉄	3.20	1.20	0.70	4.32	木質付着	
76	鉄鏃	茎の一部	鉄	2.55	0.50	0.55	1.28	木質付着	
77	鉄鏃		鉄	4.80	0.80	4.50	4.43		
78	鉄鏃	茎の一部	鉄	4.70	0.65	0.50	3.32	木質付着	

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
79	鉄鏃	茎の一部	鉄	5.00	0.50	0.50	3.50		
80	鉄鏃	茎の一部	鉄	5.40	0.90	0.65	4.23	木質付着	
81	鉄鏃	茎部	鉄	5.35	1.10	0.68	4.82	木質付着	
82	鉄鏃	茎部	鉄	5.80	0.95	0.72	5.09	木質付着	
83	鉄鏃	茎の一部	鉄	5.48	0.85	0.25~0.60	3.66	木質付着	
84	鉄鏃	茎部	鉄	6.70	0.70	0.67	5.18	木質付着	
85	石突	木、鉾	鉄	3.90	1.39	1.0	7.63		42
86	両脚金具		鉄	3.20	0.65	0.60	1.83	木質付着	42
87	両脚金具		鉄	3.19	0.46	0.48	1.84	木質付着	42
88	刀装具	足金具	銅	4.15	2.00	0.30	2.94		41
89	刀装具	足金具	銅	1.65	1.55	0.30	0.83		41
90	不明		銅	1.80	1.90	0.20	0.79		

表14　H区7号墳主体部　出土遺物法量計測表　装身具

番号	器種	残存	外径(cm)		内径(cm)		断面径(cm)		重さ(g)	備考	図版
			長径	短径	長径	短径	長径	短径			
91	耳環	表面剥離	(2.78)	(2.61)	(1.68)	(1.55)	(5.70)	(5.50)	8.67		42
92	耳環	完形	2.70	2.39	1.56	1.34	5.90	5.50	12.97		42
111	耳環	表面剥離	(3.13)	(2.77)	1.62	1.29	(0.79)	(0.79)	19.69		42
112	耳環	表面剥離	(3.12)	2.77	(1.60)	(1.27)	(0.78)	(0.75)	20.87		42
113	耳環	完形	1.96	1.84	1.26	1.10	0.43	0.34	3.68		42
114	耳環	完形	2.00	1.84	1.19	1.10	0.61	0.39	4.95		42
115	耳環	表面剥離	(1.94)	(1.74)	(1.32)	(1.19)	(0.41)	(0.34)	2.67		42
116	耳環				(1.46)	(1.32)			1.72		42

表15　H区7号墳主体部　出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
93	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.32	0.27	0.10	0.015		42
94	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.23	0.22	0.10	0.031		42
95	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.30	0.31	0.12	0.032		42
96	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.31	0.31	0.12	0.026		42
97	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.29	0.33	0.12	0.031		42
98	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.31	0.30	0.10	0.026		42
99	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.31	0.30	0.11	0.032		42
100	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.29	0.29	0.10	0.021		42
101	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.26	0.30	0.11	0.024		42
102	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.24	0.30	0.10	0.023		42
103	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.26	0.31	0.11	0.027		42
104	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.21	0.34	0.14	0.022		42
105	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.26	0.31	0.10	0.023		42
106	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.21	0.33	0.12	0.024		42
107	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.25	0.27	0.11	0.046		42
108	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.26	0.28	0.10	0.018		42

番号	器種	残存	材質・色	法量 長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考	図版
109	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.26	0.25	0.07	0.014		42
110	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.22	0.23	0.07	0.018		42
117	管玉	完形	碧玉・濃緑色	2.69	1.02	上 0.40 下 0.10	5.089		42
118	管玉	完形	碧玉・濃緑色	2.05	1.10	上 0.30 下 (0.15)	4.853		42
119	管玉	一部欠損	碧玉・濃緑色	(2.30)	0.91	上 0.30 下 0.15	3.542		42
120	管玉	完形	碧玉・濃緑色	2.04	0.84	上 0.30 下 0.10	2.621		42
121	水晶玉	一部欠損	水晶・白色透明	(1.35)	(1.36)	上 (0.35) 下 (0.20)	3.063		42
122	勾玉	完形	蛇紋岩・緑色	1.45	0.57	0.20	0.729		42
123	土玉	完形	土・暗茶褐色	0.75	0.77	上 0.20 下 0.15	0.397		42
124	土玉	完形	土・暗茶褐色	0.64	0.81	0.20	0.334		42
125	土玉	一部欠損	土・暗茶褐色	(0.64)	(0.75)	(0.20)	0.353		42
126	土玉	一部欠損	土・暗茶褐色	(0.63)	(0.76)	上 (0.15) 下 (0.10)	0.279		42
127	土玉	一部欠損	土・暗茶褐色	(0.71)	(0.79)	上 (0.15) 下 (0.17)	0.258		42
128	土玉	一部欠損	土・暗茶褐色	(0.65)	(0.78)	0.15	0.253		42
129	土玉	一部欠損	土・暗茶褐色	(0.53)	(0.81)	0.15	0.226		42
130	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.57	0.72	0.2	0.413		42
131	ガラス小玉	一部欠損	ガラス・紺色	(0.64)	(0.83)	上 (0.4×0.2) 下 (0.3×0.2)	0.468		42
132	ガラス小玉	完形	ガラス・青色	0.61	0.68	0.2	0.340		42
133	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.54	0.66	0.15	0.381		42
134	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.40	0.77	0.2	0.348		42
135	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.25	0.48	上 0.12 下 0.15	0.087		42
136	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.22	0.47	0.2	0.070		42
137	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.24	0.40	0.15	0.064		42
138	ガラス小玉	完形	ガラス・青色	0.30	0.41	上 0.18 下 0.15	0.058		42
139	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.17	0.38	0.15	0.028		42
140	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.18	0.34	0.10	0.030		42
141	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.20	0.37	0.2	0.037		42
142	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.19	0.38	0.15	0.040		42
143	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.31	0.48	上 0.15 下 0.18	0.100		42
144	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.34	0.43	0.20	0.089		42
145	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.30	0.45	上 0.20 下 0.15	0.075		42
146	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.49	0.45	0.21	0.075		42
147	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.30	0.45	0.2	0.084		42
148	ガラス小玉	完形	ガラス・青色	0.23	0.45	0.20	0.065		42
149	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.23	0.43	0.20	0.061		42
150	ガラス小玉	一部欠損	ガラス・水色	(0.30)	(0.45)	(0.1)	0.067		42
151	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.28	0.45	0.15	0.064		42
152	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.20	0.41	上 0.2×0.15 下 0.2×0.15	0.04		42
153	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.25	0.42	0.2	0.048		42
154	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.26	0.42	0.15	0.061		42
155	ガラス小玉	完形	ガラス・青色	0.26	0.38	0.15	0.054		42
156	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.18	0.38	上 0.15 下 0.15×0.1	0.039		42
157	ガラス小玉	完形	ガラス・水色	0.23	0.39	0.10	0.049		42

番号	器種	残存	材質・色	法量 長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考	図版
158	ガラス小玉	完形	ガラス・紺色	0.23	0.40	0.18	0.018		42
159	ガラス小玉	欠損1/2	ガラス・水色	(0.25)	(0.45)	(0.10)	0.038		42
160	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.31	0.43	0.15	0.079		42
161	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.30	0.40	上 0.15×0.1 下 0.15	0.046		42
162	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.22	0.50	0.13	0.054		42
163	ガラス小玉	完形	ガラス・黄緑色	0.21	0.36	0.18	0.030		42
164	ガラス小玉	完形	ガラス・黄色	0.35	0.45	0.10	0.095		42
165	ガラス小玉	完形	ガラス・黄色	0.24	0.51	0.15×0.20	0.082		42

表16　H区8号墳丘・周溝　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
166	壺	口径(38.0) 残高9.4	大型壺の口縁部片。外面に2条平行の沈線とその上下位の施文帯にヘラ状工具による斜線文。	回転ナデ	同転ナデ	灰色・黒色 灰　色	長(1) ◎		43
167	甕	口径(19.3) 器高32.3	頸部は無文。	㊹ 同転ナデ (第面)タタキ	㊼ 回転ナデ (第面)タ タ キ	灰　色 灰　色	長(1) ◎		43
168	甑	口径(9.1) 器高11.3	細い頸部からラッパ状に開く口縁部。胴張り部のやや上位に2条の沈線と穿孔を持つ。φ1.3cm	(口縁)同転ナデ (体)カキ目 (底)ナデ	㊼ 回転ナデ (体)シボリ・ナデ	灰赤色 灰赤色	長(1) ◎		43
169	壺類底	口径(7.2) 残高7.8	短い口縁部が直上に立ち上がる有蓋短頸壺。	(当面)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰　色 灰白色	長(1) ◎		

表17　H区8号墳丘　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
170	石錐	基部	緑泥片岩	3.66	1.0	0.43	1.71	有茎式剥製石鏃	

表18　H区8号墳主体部　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
171	坏	口径9.7 器高3.1	坏蓋。内面にかえりを持ち、天井に宝珠つまみ。	(天)同転ヘラケズリ (口)回転ナデ (体)回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	長(1~2) ◎		43
172	坏	口径9.5 器高2.9	坏身。体部に稜を持つ。	(口)回転ナデ (体)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~2) ◎		43
173	坏	口径9.3 器高2.8	坏蓋。つまみは乳頭状になっていて、かえりは、蓋縁部より突出していない。	(天)回転ヘラケズリ (体)回転ナデ (口)回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1~2) ◎		43
174	坏	口径8.8 器高3.0	坏身。底部と体部に稜を持つ。	(口)回転ナデ (体)回転ヘラケズリ	(口)回転ナデ (体)回転ナデ→ナデ	灰色・暗灰色 灰　色	長(1~2) ◎		43
175	坏	口径9.7 器高3.3	坏蓋。内面にかえりを持ち、天井に宝珠つまみ。	(天)回転ヘラケズリ (体)回転ナデ (口)回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1~2) ◎		43
176	坏	口径8.5 器高2.9	坏身。体部に稜を持つ。	(口)回転ナデ (体)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰オリーブ色	長(1~2) ◎		43
177	坏	口径9.4 器高2.6	坏蓋。つまみは乳頭状になっていて、かえりは、蓋縁部より突出していない。	(天)回転ヘラケズリ (体)回転ナデ (口)回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰オリーブ色	含細砂粒 ◎		43
178	坏	口径9.2 器高2.7	坏身。底部と体部に稜を持つ。	(口)回転ナデ (体)回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色・灰色 灰　色	長(1~2) ◎		43

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
179	坏	口径9.6 残高2.2	坏蓋。かえりは蓋裾部よりも突出しない。	㋑回転ヘラケズリ ㋒回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~2) ◎		
180	坏	口径9.8 残高2.3	坏蓋。かえりは蓋裾部よりも突出しない。	㋑同転ヘラケズリ ㋒回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~2) ◎		
181	短頸壺	口径5.1 器高6.2	やや鈍い稜をなす算盤玉形の胴部に直口の口縁を持つ。	㋐回転ナデ ㋑同転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~3) ◎		43

表19　H区8号墳主体部　出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
182	直刀	刀身部	鉄	49.6	3.72	2.10	510.83		
183	直刀	刀身部	鉄	16.45	3.60	1.30	119.35		44
184	刀装具	鉄の目釘部	鉄	1.82	1.55	0.45	2.32		
185	刀装具	柄頭の一部	鉄	1.80	2.05	0.10	1.06		
186	刀装具	さやじり金具	鉄	5.5	3.10	2.20	22.63		44
187	鉄鏃	鏃身部から茎	鉄	6.35	2.65	0.85	22.70		
188	刀子	刃部	鉄	4.53	1.40	0.60	5.89		
189	釘		鉄	7.71	1.31	1.60	37.45		44
190	釘	基部	鉄	7.71	1.38	0.63	5.44	木質付着	44
191	釘		鉄	3.50	1.00	0.60	2.98	木質付着	
192	釘		鉄	3.50	0.82	0.60	2.58	木質付着	
193	釘		鉄	3.01	0.80	0.69	2.81	木質付着	
194	釘		鉄	2.76	0.88	0.65	2.77	木質付着	
195	釘		鉄	2.28	0.55	0.45	0.85	木質付着	
196	釘		鉄	1.87	0.61	0.38	0.68	木質付着	
197	環状金具	帯執の金具	銅	2.05	1.55	0.83	2.48		44

表20　H区8号墳主体部　出土遺物法量計測表　装身具

番号	器種	残存	外径(cm) 長径	外径(cm) 短径	内径(cm) 長径	内径(cm) 短径	断面径(cm) 長径	断面径(cm) 短径	重さ(g)	備考	図版
198	耳環	表面剥離	(2.96)	(2.76)	(1.63)	(1.46)	(7.1)	(6.9)	15.04		44
199	耳環	表面剥離	(3.02)	(2.64)	(1.68)	(1.48)	(7.5)	(6.8)	12.02		44

表21　H区8号墳　出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
200	勾玉	完形	瑪瑙・乳白~橙色	2.35	0.62	上 0.30 下 0.15	2.34		44
201	勾玉	頭部尾部欠損	ガラス・緑色	(1.8)	(0.6)		0.77	風化	44
202	丸玉	完形	水晶・白色透明	0.80	1.1	上 0.1 下 0.3	1.18		44
203	管玉	完形	碧玉・暗灰色	1.88	0.44	0.25	0.56		44
204	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス	(0.55)	(0.98)	(0.3)	0.44	風化	44
205	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス	(0.49)	(0.85)	(0.3)	0.41	風化	44
206	ガラス丸玉	完形	ガラス・濃褐色	0.7	0.74	0.2	0.81		44
207	ガラス丸玉	完形	ガラス・濃水色	0.28	0.38	0.15	0.05		44

表22　H区９号墳周溝　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
208	坏	口径(13.7) 残高3.5	大井部と口縁部の境に稜を持つ。口端部は段を持つ盃。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	含細砂粒 ◎		
209	鉢	口径(11.0) 残高4.6	直立気味の口縁。体部は僅かに張りを持つ。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰　色	長(1) ◎		
210	鼈	口径(14.4) 残高15.0	大きく開く口縁。体部は小さめで↓1.5cmほどの円孔がある。	(C単)回転ナデ (脚下)回転ヘラケズリ	(C単)回転ナデ (脚)シボリ痕	淡灰色・灰色 青灰色	長(1～2) ◎		
211	鼈	口径(13.2) 残高4.5	大きく開く口縁。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	長(1) ◎		
212	鼈	残高8.2	平底気味の底部。体部の円孔は↓1.4cm。	(脚下上)回転ナデ (脚下)回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色・灰色 灰　色	長(1～2) ◎		
213	直口壺	口径(8.4) 器高13.0～13.6	斜め上方に開く直立気味の口頸部。肩部に沈線１条。	(上胴上)回転ナデ (胴下)回転ヘラケズリ	回転ナデ	橙褐色 橙褐色	長(1) ◎		44
214	提瓶	残高5.6	鉤状把手の片。	(脚)カキ目 (把手)ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		
215	提瓶	口径7.8 器高23.4	外反する口縁。端部はやや面を持つ。把手部欠損。	(口)回転ナデ (胴)カキ目	(口)回転ナデ (胴)回転ナデ ナデ(指頭痕)	灰　色 灰　色	長(1～2) ◎		44
216	瓮	残高5.0	大型品。口端部は粘土帯を貼り付け下方に肥厚させる。緻密な波状文の下に沈線１条。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 オリーブ色	長(1～2) ◎		

表23　H区９号墳主体部　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
217	蓋	口径15.8 器高4.9	外に開く口縁。端部は丸い。つまみは扁平。大型の坏に伴う蓋。	(上)回転ナデ (下)回転ヘラケズリ (つまみ)回転ナデ	回転ナデ・ナデ	暗青灰色 暗青灰色	石・長(1～2) ◎		44
218	坏	口径11.0 器高3.9	内向にかえりを持つ。位置は口端部とほぼ同じ。宝珠つまみを持つ蓋。	(上)回転ナデ (下)回転ヘラケズリ (つまみ)回転ナデ	回転ナデ・ナデ	紫灰色 紫灰色	石・長(1～2) ◎		44
219	坏	口径9.6 器高3.2	坏身。短く内傾する口縁。	(口)回転ナデ (胴)回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	暗灰色 暗灰色	含細砂粒 ◎	自然釉	45
220	高坏	口径10.2 底径8.3 器高8.7～9.6	坏部外面に２段の稜、胸部中位に２条の沈線。無蓋高坏。	回転ナデ	回転ナデ (脚上)シボリ痕	灰白色 灰白色	長(1) ◎		45
221	壺	口径(9.0) 器高6.8	短頸の直口壺。	(口胴)回転ナデ (胴)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ◎		
222	壺	残高7.5	頸部～体部の片。直口壺か。	(頸筒上)回転ナデ (胴下)回転ヘラケズリ	回転ナデ	明緑灰色 明緑灰色	長(1) ◎		
223	壺	口径(8.2) 残高16.4	短頸壺。玉縁状の口縁端部。胴部は張る。	(口)回転ナデ (胴上)カキ目 (胴下)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰　色 暗灰色	長(1～2) ◎		
224	椀	口径10.6 残高3.3	外傾する口縁。	回転ナデ	(口)回転ナデ (胴)ナデ	橙　色 橙　色	含細砂粒 ◎		45
225	鉢	口径15.4 器高7.6	ボウル状の器型。	ナデ(指頭痕)	ナデ	橙　色 橙　色	石・長(1～2) ◎		45
226	甕	口径(12.6) 器高10.3	くの字状に折れ曲がる口縁。器高は低い。丸底。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ(5本/cm)	(口)ヨコナデ (胴)ナデ(指頭痕)	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石(1) 赤色粒化長 ◎		

表24　H区９号墳主体部　出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
227	刀子	基部	鉄	4.45	0.6	0.5	3.25		45
228	刀子	刃部	鉄	6.35	1.2	0.6	6.76		45
229	刀子	刃部	鉄	6.8	1.5	0.7	14.50		45
230	刀子	茎部	鉄	6.35	1.15	0.25	3.82		
231	不明		鉄	1.85	1.4	0.15	1.69	木質付着	
232	鉄鏃	鏃被部	鉄	5.0	2.3	0.7	11.17		45
233	鉄斧	刃部	鉄	5.8	3.9	1.6	50.36		

表25　H区９号墳主体部　出土遺物法量計測表　装身具

番号	器種	残存	外径(cm) 長径	短径	内径(cm) 長径	短径	断面径(cm) 長径	短径	重さ(g)	備考	図版
234	耳環	完存	2.56	2.46	1.33	1.26	0.79	0.67	3.69		45
235	耳環	完存	2.65	2.46	1.44	1.28	0.77	0.57	3.49	赤色顔料付着	45
236	耳環	完存	2.45	2.36	1.43	1.38	0.75	0.51	13.65		45
237	耳環	完存	2.44	2.30	1.44	1.35	0.72	0.49	13.04		45
238	耳環	完存	2.92	2.70	1.70	1.49	0.73	0.59	16.51		45
239	耳環	完存	2.93	2.68	1.69	1.47	0.75	0.63	18.04		45

表26　H区９号墳主体部　出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質・色	法量 長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考	図版
240	棗玉	一部欠損	琥珀・暗褐色	(2.69)	(1.73)	(上 0.55) (下 0.41)	2.06		45
241	棗玉	一部欠損	琥珀・暗褐色	(2.00)	(1.35)	(上 0.35) (下 0.55)	2.98		45
242	管玉	完形	碧玉・暗緑灰色	2.50	0.70	0.45	1.90		45
243	管玉	ほぼ完形	碧玉・暗褐灰色	1.96	0.55	上 0.50 下 0.40	0.73		45
244	管玉	完形	碧玉・暗緑色	1.82	0.50	上 0.20 下 0.50	0.49		45
245	管玉	完形	碧玉・暗緑色	1.70	0.62	上 0.25 下 0.15	1.05		45
246	管玉	完形	碧玉・濃緑色	1.32	0.60	上 0.22 下 0.18	0.79		45
247	ガラス丸玉	完形	ガラス・緑色	0.90	1.10	上 0.40 下 0.30	2.241	風化	45
248	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.91	1.05	0.40	2.496	風化	45
249	ガラス丸玉	完形	ガラス	1.00	1.09	上 0.50 下 0.45	2.875	風化	45
250	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.90	1.10	上 0.30 下 0.29	2.554	風化	45
251	ガラス丸玉	完形	ガラス・緑色	0.92	1.07	上 0.40 下 0.30	2.034	風化	45
252	ガラス丸玉	完形	ガラス	1.00	1.00	上 0.34 下 0.32	2.220	風化	45
253	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.93	0.99	上 0.30 下 0.20	2.188	風化	45
254	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.85	1.00	上 0.40 下 0.39	1.564	風化	45
255	ガラス丸玉	完形	ガラス・緑色	0.79	0.98	上 0.40 下 0.24	1.425	風化	45
256	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.74	0.94	上 0.39 下 0.30	1.420	風化	45
257	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.73	0.91	上 0.41 下 0.30	1.393	風化	45
258	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.70	0.90	0.30	1.236	風化	45
259	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.74	0.97	上 0.48 下 0.45	1.384	風化	45
260	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.80	0.90	上 0.40 下 0.25	1.333	風化	45
261	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.80	0.90	0.32	0.976	風化	45
262	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.81)	(0.93)	(0.25)	1.015	風化	45

番号	器種	残存	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
263	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.68	0.93	上 0.38 下 0.37	1.172	風化	45
264	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.67)	(1.00)	(0.39)	1.021	風化	45
265	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.58	0.92	上 0.40 下 0.30	1.063	風化	45
266	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.60	1.00	上 0.50 下 0.40	1.045	風化	45
267	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.51)	(0.92)	(上 0.42) (下 0.41)	0.695	風化	45
268	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.54	0.98	上 0.40 下 0.35	0.991	風化	45
269	ガラス丸玉	完形	ガラス・緑色	0.50	0.91	0.35	0.918	風化	45
270	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.60)	(0.95)	(上 0.3) (下 0.4)	0.610	風化	45
271	ガラス丸玉	完形	ガラス・緑色	0.51	0.90	上 0.39 下 0.35	0.751	風化	45
272	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.53)	(0.85)	(上 0.41) (下 0.30)	0.713	風化	45
273	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.52	0.82	上 0.39 下 0.33	0.612	風化	45
274	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.49)	(0.81)	(上 0.35) (下 0.30)	0.490	風化	45
275	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.50)	(0.85)	(上 0.30) (下 0.29)	0.604	風化	45
276	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.45)	(0.81)	(0.30)	0.413	風化	45
277	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.44)	(0.81)	(上 0.35) (下 0.30)	0.566	風化	45
278	ガラス丸玉	完形	ガラス	0.45	0.8	上 0.36 下 0.28	0.690	風化	45
279	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス	(0.50)	(0.85)	(上 0.31) (下 0.29)	0.754	風化	45
280	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.50)	(0.80)	(上 0.45) (下 0.30)	0.384	風化	45
281	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.40)	(0.74)	(上 0.39) (下 0.35)	0.282		
282	ガラス丸玉	完形	ガラス・緑色	0.20	0.78	0.55	0.054	風化	45
283	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・緑色	(0.30)	(0.70)	(上 0.35) (下 0.32)	0.138	風化	
284	ガラス丸玉	1／3欠損	ガラス	(0.40)	(0.80)	(0.35)	0.191	風化	
285	ガラス丸玉	1／2	ガラス・緑色	(0.82)	(0.80)	(0.20)	0.449	風化	
286	ガラス丸玉	1／2	ガラス	(0.78)	(0.84)	(上 0.38) (下 0.32)	0.661	風化	
287	ガラス丸玉	1／2	ガラス・緑色	(0.78)	(0.80)	(0.25)	0.489	風化	
288	ガラス丸玉	1／2	ガラス	(0.83)	(0.87)	(上 0.30) (下 0.27)	0.537	風化	
289	ガラス丸玉	1／2	ガラス	(0.71)	(0.80)	(上 0.32) (下 0.40)	0.440	風化	
290	ガラス丸玉	1／3欠損	ガラス	(0.78)	(0.98)	(上 0.40) (下 0.35)	0.945	風化	
291	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・濃紺色	(0.58)	(0.84)	(0.30)	0.514		
292	ガラス丸玉	完形	ガラス・濃紺色	0.60	0.61	0.25	0.261		45
293	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス	(0.37)	(0.69)	(上 0.29) (下 0.21)	0.129	風化	45
294	ガラス丸玉	一部欠損	ガラス・濃紺色	(0.45)	(0.60)	0.20	0.209		45
295	ガラス丸玉	完形	ガラス・濃紺色	0.53	0.51	0.20	0.218		45
296	ガラス丸玉	完形	ガラス・緑色	0.33	0.60	0.15	0.149		45
297	ガラス丸玉	完形	ガラス・濃紺色	0.38	0.58	0.20	0.184		45
298	ガラス丸玉	完形	ガラス・水色	0.38	0.48	0.22	0.098		45
299	ガラス丸玉	完形	ガラス・黄色	0.21	0.51	0.19	0.096		45
300	ガラス丸玉	完形	ガラス・濃紺色	0.28	0.40	0.18	0.033		45
301	ガラス丸玉	完形	ガラス・水色	0.30	0.42	0.10	0.071		45
302	ガラス丸玉	完形	ガラス・水色	0.35	0.40	0.10	0.047		45

表27　H区９号墳丘採集　遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
303	高坏	残高7.4	脚部中位に円孔。	ナデ	㊨ナデ ㊩シボリ痕→ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	含細砂粒 ウンモ ○		

表28　H区９号墳丘採集　遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
304	振り石	欠損	砂岩	(6.4)	(7.9)	(4.7)	373.5		
305	敲石	完形	砂岩	5.2	6.1	2.7	129.9		
306	石鏃	一部欠損	サヌカイト	(1.68)	(1.36)	0.3	0.59	国産黒曜打製石鏃	

表29　H区祭祀跡　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
307	高坏	口径17.6 残高5.8	坏部。口縁端部はやや丸味を持った面をなす。	ハケ(11本/cm)→ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) 赤色酸化鉄 ○		
308	高坏	口径16.6 残高6.1	坏底部との境に明確な稜を持つ。短く外反する口縁。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) ○		
309	高坏	口径(17.0) 残高6.2	坏部。口縁端部は尖り気味。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1) ○		
310	高坏	口径21.5 残高8.5	坏部。口縁端部は尖り気味。	ナデ・ハケ	ナデ	明赤褐色 暗赤褐色	石・長(2) ○		
311	高坏	口径26.4 残高7.8	坏底部との境に明確な稜を持つ。口縁端部は丸味を持った面をなす。	(内面)ヨコナデ ㊩ハケ→ミガキ	(内面)ヨコナデ ㊩ハケ→ミガキ	にぶい橙色 橙色	長(2) ○		
312	高坏	底径(10.8) 残高7.6	中膨れの柱部。底端部はやや内傾する。	ナデ	㊩ナデ ㊪シボリ痕 ㊫ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 赤色酸化鉄 ○		
313	高坏	底径11.4 残高6.9	中膨れの柱部。	ナデ	㊨シボリ痕 ㊩ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1) ○		
314	高坏	底径13.2 残高8.8	中膨れの柱部。底端部は内傾する。	ナデ	㊨ナデ ㊩シボリ痕 ㊫ナデ	浅黄色 浅黄色	長(1) ○		
315	高坏	底径(12.4) 残高6.8	椀形高坏の脚部。	ナデ	シボリ痕・指圧痕→ナデ	明褐色 明褐色	石・長(1) ○		
316	高坏	底径(9.8) 残高7.3	脚部。端部は尖り気味。	ミガキ？	㊩ナデ ㊫ハケ	淡黄色 浅黄色	含細砂粒 ○		
317	高坏	残高6.3	脚部。稜を持って屈曲する裾部。	ナデ	指ナデ・ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	含細砂粒 含ウンモ ○		
318	高坏	残高7.5	ゆるやかに開く裾部。	ナデ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○		
319	高坏	残高6.7	中膨れ気味の柱部。	ハケ→ナデ	㊨ナデ ㊩指頭痕・指ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○		
320	高坏	残高5.8	柱部。	ミガキ	㊨ナデ ㊩ケズリ・ナデ	明赤褐色 明赤褐色	長(1~2) 赤色酸化鉄 ○		
321	高坏	残高6.2	柱部。	ナデ	㊨ナデ ㊩ケズリ	橙色 橙色	長(1) ○		
322	高坏	残高6.2	中膨れ気味の柱部。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石(4) ○		

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
323	高坏	残高6.6	柱部	ヨコナデ	指頭痕・指ナデ	赤褐色 赤褐色	含細砂粒 ◎		
324	高坏	口径(18.0) 残高10.9	坏～柱部。口縁端部は丸味を持つ。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	黄色 にぶい黄色	石・長(1～3) 含ウンモ ◎		
325	高坏	口径(21.0) 残高10.3	柱～柱部。坏部は浅く口縁端部は尖り気味。	ナデ	ナデ	淡黄色 淡黄色	長(1) ○		
326	高坏	口径26.8 底径16.6 器高13.4	口縁・底部ともに大きく外反し、端部は面を持つ。	㊍ナデ・ハケ(5本/cm) ㊎ナデ・ミガキ	㊌ハケ→ナデ ㊏指ナデ・ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1～3) ◎		46
327	高坏	底径16.0 残高14.9	坏底部との境に明確な稜を持つ。中膨れの柱部。	㊍ マメツ ㊎ 工具によるナデ ㊏ ハケ→ナデ	㊍ マメツ ㊎ 指ナデ・指頭痕 ㊏ ハケ→ナデ	黄橙色 黄橙色	含細砂粒 ◎		
328	高坏	口径(22.2) 残高13.6	坏底部は平底。大きく外反する口縁。	ハケ→ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石(1) ◎		
329	高坏	口径(19.7) 底径(11.8) 器高12.2	浅い坏部。ラッパ状に開く裾部。	(口縁) ナデ (体部) ハケ(7本/cm) (底) ナデ	㊍ ハケ・ナデ ㊎ ナデ ㊏ ハケ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		46
330	高坏	口径22.8 底径(15.7) 器高14.0	坏底部との境に稜を持つ。口縁端部は尖り気味。中膨れの柱部から強く屈曲して開く裾部。	ナデ	㊍ ナデ ㊎ ケズリ ㊏ ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) ○		46
331	高坏	口径18.1 底径13.0 器高12.8	口縁端部は丸味を持った面を なす。ラッパ状に開く裾部。	㊍ ハケ ㊎ ナデ	ナデ	赤褐色 にぶい橙色～橙色	心・長(1～3) ○		
332	高坏	口径(18.5) 底径(11.9) 器高12.1	口縁端部は尖り気味。ラッパ状に開く裾部。	ナデ	㊍ ナデ ㊎ マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～2) ◎		
333	高坏	口径(18.2) 底径12.2 器高12.1	中膨れの柱部から強く屈曲して開く裾部。底端部は内傾気味。	ナデ	㊍ マメツ ㊎シボリ痕・ナデ	黄橙色 淡黄色	含細砂粒 ◎		46
334	壺	口径(8.6) 残高7.0	小型丸底壺。内湾気味に立ち上がる口縁。	㊍ ヨコナデ ㊎ ハケ→ナデ	㊍ ヨコナデ ㊎ナデ(指頭痕)	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～2) ◎		
335	壺	口径(11.0) 残高6.0	小型丸底壺。直線的に外上方に開く長めの口縁。	㊍ ヨコナデ ㊎マメツ(ハケ?)	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
336	壺	口径(9.2) 残高3.9	小型丸底壺。口頸部片。	㊍ ヨコナデ ㊎ ハケ(7本/cm)→ナデ	㊍ ヨコナデ ㊎ 工具によるナデ	橙色 橙色	長(1) ○		
337	壺	口径(10.0) 残高3.2	小型丸底壺。口頸部片。	ヨコナデ	㊍ ヨコナデ ㊎ミガキ(指頭痕)	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
338	壺	残高5.9	小型丸底壺。頸～底部。	ナデ(指頭痕)	指ナデ・ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	長(1) ◎		
339	壺	残高7.7	小型丸底壺。頸～底部。	㊍ ヨコナデ (底) ナデ(指頭痕)	㊍ ヨコナデ (底) 指ナデ・ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1) ○		
340	壺	口径9.8 器高9.7	小型丸底壺。底部付近に不整形な打ち欠きの焼成後穿孔。	㊍ ヨコナデ (胴上) ナデ (胴下) ハケ(6本/cm)	㊍ ハケ(7本/cm) (胴) 工具によるナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		46
341	壺	口径8.8 器高9.9	小型丸底壺。胴部中位に外面から穿たれた穴径0.4cmの焼成後穿孔。	㊍ ヨコナデ (胴上) ナデ(指頭痕) (胴下) ケズリ	㊍ ヨコナデ (胴) ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1) ◎		46
342	甕	口径11.2 器高13.1	直立気味の短い口縁。球形に近い胴部。器壁は厚い。丸底壺。	㊍ ヨコナデ (胴) マメツ(ハケ)	㊍ ヨコナデ (胴) マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長(1) ○	黒斑	46
343	甕	口径(15.6) 残高4.0	複合口縁甕の口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	含細砂粒 ◎		
344	壺	口径(11.2) 残高14.8	直立気味の短い口縁。扁平気味に大きく張る胴部。	㊍ ヨコナデ (胴下) ナデ(指頭痕) (底下) ケズリ	㊍ ヨコナデ ㊎ ナデ(指頭痕)	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1) 含ウンモ ◎		
345	甕	口径(14.0) 残高12.3	口縁は内湾気味に開き、端部は丸く肥厚する。球形の胴部。	㊍ ヨコナデ ㊎ マメツ	㊍ ヨコナデ (胴上) 指頭痕 (胴下) ケズリ→ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(1～2) ○	黒斑	

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
346	壺	口径(14.4) 残高15.4	口縁は内湾気味に開き、端部は丸く肥厚する。	㋐ ヨコナデ ㋑ ハケ(6本/cm)	㋒ ヨコナデ ㋓ 指頭痕 ㋔ ナデ	明褐色 明褐色	石・長(1) ◎	煤	
347	壺	口径(13.2) 残高17.5	短く外反する口縁。あまり張らない胴部。	㋐ ヨコナデ ㋑ ハケ(11本/cm)→ナデ	㋒ ハケ→ナデ ㋓ ケズリ(指頭痕)	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長(1~3) ◎	煤	
348	壺	口径(13.6) 残高3.7	短く外反気味に立ち上がる口縁。	ヨコナデ	マメツ	明黄褐色 明黄褐色	長(1) ○		
349	壺	口径(12.4) 残高3.6	口縁下位に膨らみを持つ。	㋐ ヨコナデ ㋑ ハケ→ナデ	㋒ ヨコナデ ㋓ マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1) ○		
350	壺	口径(17.6) 残高7.0	口縁は頸部から直線的に立ち上がり、端部は短く外反する。	㋐ ヨコナデ ㋑ ハケ(7本/cm)→ナデ	㋒ ヨコナデ ㋓ ハケ→ナデ	淡黄色 淡黄色	長(1) ◎		
351	壺	残高10.8	胴部片。	ヨコナデ ハケ(7本/cm)	ナデ ケズリ(指頭痕)	赤褐色 赤褐色	石・長(1~3) ◎	煤	

表30　H区祭祀跡　出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質・色	法量 長さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
352	勾玉	完形	碧玉・明緑灰色	2.80	1.70	0.22	3.88		46
353	勾玉	完形	滑石か・緑黒色	1.18	0.27	0.2	0.32		46

表31　H区探集古墳時代　遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
354	坏	残高3.2	中窪みのつまみを持つ蓋。	㋐ヘラ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	含細砂粒 ◎		
355	坏	口径(11.4) 残高4.7	上方に長めに伸びる口縁。端部に鋭い段を持つ身。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	含細砂粒 ◎		
356	高坏	底径(9.8) 残高7.1	3方向に復元できる1段透し。	回転ナデ	シボリ痕・回転ナデ	青灰色 青灰色	含細砂粒 ◎		
357	高	口径10.4 器高10.1	頸部外面に波状文、胴張り部に2条の沈線の間に刺突列点文。胴部にϕ1.4cmの穿孔。	㋐ 回転ナデ ㋑ カキ目 ㋒ 回転ナデ	ナデ	暗灰色 灰オリーブ色	長(1) ◎	自然釉	47
358	壺	口径(14.8) 残高10.4	外反する口縁。端部は下方に肥厚する。	㋐ 回転ナデ ㋑ タタキ・カキ目	㋒ 回転ナデ ㋓ タタキ・ナデ	灰オリーブ色 灰色	含細砂粒 ◎	自然釉	
359	壺	残高3.7	大型品。口端部直下の断面三角形の細い突帯下に波状文と沈線1条。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	長(1) ◎		
360	壺	残高11.9	底胴部。	タタキ→カキ目	タタキ→ナデ	黄オリーブ色 黄オリーブ色	含細砂粒 ◎	自然釉	
361	壺	口径(16.0) 残高14.7	内湾気味に立ち上がる口縁。胴部は球形。	㋐ ヨコナデ ㋑ ハケ(7本/cm)	㋒ ヨコナデ ㋓ ケズリ・ナデ	明赤褐色 暗赤褐色	小・長(1~3) ○	煤	
362	壺	口径(14.6) 残高13.4	内湾気味に立ち上がる口縁。端部は丸めに肥厚する。胴部は球形。	㋐ ヨコナデ ㋑ ハケ(7本/cm)	㋒ ヨコナデ ㋓ ケズリ・ナデ 指頭痕	橙色 明黄褐色	石・長(1~2) ◎	煤	
363	壺	口径(16.6) 残高5.4	内湾気味に立ち上がる口縁。端部は丸めに肥厚する。	ヨコナデ	㋐ ヨコナデ ㋑ ケズリ	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長(1) ◎	黒斑	
364	壺	残高11.4	胴部片。	ハケ→ナデ	ナデ	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長(1~4) ウンモ ◎		

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
365	坩	残高18.5	球形の胴部中位よりやや下に楕円形の焼成後穿孔。直口坩。	⑪ ヨコナデ ⑩ 工具によるナデ	指ナデ・ナデ	黄橙色 黄褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	47
366	壺	残高7.7	小型丸底壺。頸～底部。	ナデ・指頭痕	指ナデ・ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ウンモ ◎	黒斑	

表32　H区採集古墳時代　遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質・色	法量 長さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
367	管玉	欠損	碧玉・淡緑色	(1.30)	0.53	0.30	0.519		

表33　H区採集古代　遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
368	皿	口径(24.0) 器高3.5	須恵器。口端部は丸く収める。	回転ナデ	同転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		
369	皿	口径9.6 底径6.0 器高2.1	土師器。	⑪ 回転ナデ ⑩ 回転糸切り	⑪ 回転ナデ ⑩ ナデ	橙色 橙色	長(1) ◎		

表34　J区SK1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
370	甕	口径25.4 残高25.0	折り曲げ口縁。端面に刻み目。胴部上位に棒状工具による刺突列点文。	⑪ ヨコナデ ⑩ ハケ→ナデ	⑪ ヨコナデ ⑩ ミガキ・ナデ	暗褐色 黄褐色	石・長(1~3) ○	黒斑	48
371	甕	口径(19.4) 残高13.3	折り曲げ口縁。頸部直下から胴部上位にかけて櫛描波線文。横方向の文を縦方向の直線文で区画か。	マメツ(ミガキ)	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	
372	甕	残高6.5	折り曲げ口縁。端面に刻み目。	⑪ ヨコナデ(指頭痕) ⑩ ミガキ	⑪ ヨコナデ ⑩ ミガキ	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
373	甕	底径(5.0) 残高6.9	平底。	工具によるナデ	工具によるナデ	赤褐色 暗赤褐色	石・長(1~3) 黒色粒(土粒) ◎		
374	甕	底径(6.7) 残高5.3	やや凹み底。	⑩ ハケ・ミガキ ⑩ ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
375	高坏	残高4.2	水平に貼り付けられた口縁。	ナデ・ミガキ 指頭痕	⑪ ヨコナデ ⑩ ミガキ・指頭痕	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		

表35　J区SK1　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
376	擦り石	完形	凝灰岩	7.23	7.94	4.8	386.0		

表36　J区出土縄文・弥生時代　遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
377	深鉢	残高3.3	縄文を施した口縁部施文体に、U字状に屈曲して横走する沈線	マメツ(縄目)	ナデ	にぶい赤褐色 灰褐色	石(1~3) 金ウンモ ○		48
378	深鉢	残高4.4	口縁部片。二枚貝条痕。	条痕	条痕	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1~3) ◎		48

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
379	深鉢	残高4.8	口縁部片。二枚貝条痕。	(口)(内)ナデ (底)条痕	ナデ	明赤褐色 黄褐色	石(1~2) ◎		48
380	壺	口径(22.8) 残高13.7	貼り付けの短い水平口縁。端面に刻み目。胴部上位の張りは口縁部とほぼ同じ。	(口)ヨコナデ (胴)ミガキ	ナデ(指頭痕)	にぶい褐色 明褐色	石・長(1~5) ◎		
381	壺	口径(23.8) 残高6.1	折り曲げ口縁。端面に刻み目。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	ナデ	暗灰黄色 暗灰黄色	石・長(1~2) 金ウンモ ◎		
382	壺	口径(20.4) 残高4.4	折り曲げ口縁。直下に櫛描直線文。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	ナデ	明褐色 明褐色	石・長(1~2) ◎		
383	壺	口径(21.0) 残高6.8	折り曲げ口縁。無文。	(口)ヨコナデ (胴)マメツ	ナデ(指頭痕)	橙色 褐灰色	石・長(1~2) 金ウンモ ◎		
384	壺	口径(22.2) 残高8.4	折り曲げ口縁。直下に櫛描直線文。下位に刺突文。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ミガキ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	橙色 黄橙色	石・長(1~3) 金ウンモ ◎		48
385	壺	口径(16.6) 残高9.8	折り曲げ口縁。直下に櫛描直線文。下位に刺突文。	(口)ヨコナデ(指頭痕) (胴上)ハケ (胴下)ミガキ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		48
386	壺	残高6.4	折り曲げ口縁。端面に刻み目。胴部上位に刺突文。小片。	(口)ヨコナデ (胴)マメツ(ミガキ)	ミガキ	褐灰色 橙色	石・長(1~2) ◎		48
387	壺	底径(5.6) 残高6.5	平底。	ミガキ(指頭痕)・ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1~3) 赤色酸化粒 ◎		
388	壺	底径(6.4) 残高6.1	平底。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
389	壺	底径6.0 残高4.8	平底。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 黄橙色	石・長(1~2) ◎		
390	壺	底径5.4 残高3.1	やや凹む底。	(胴)マメツ (底面)ナデ	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石(1~3) ○		
391	壺	底径4.6~4.9 残高3.6	やや凹む底。	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
392	壺	底径9.4 残高7.4	平底。	(胴)ナデ (底面)マメツ	ナデ	黄橙色 黄橙色	石・長(1~5) ◎		
393	壺	底径(9.4) 残高6.8	平底。	ナデ	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
394	壺	底径(9.0) 残高6.6	平底。	(胴)ミガキ (底)ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1~2) ◎		
395	壺	口径(11.0) 残高5.6	無頸口縁壺。端部は粘土板を貼り付けて肥厚させ、上端面に櫛描文、肥厚帯下位外面に4本単位の格子文。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	ナデ(指頭痕)	橙色淡黄褐色 橙色	石(1~2) ◎		48
396	高坏	底径8.4 残高8.6	2方向に貫通しない孔。 φ0.8~0.9cm	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) 赤色酸化粒 ◎		48

表37　J区　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
397	擦り石	完形	凝灰岩	8.4	9.7	5.4	690.0		
398	石斧	基部	緑泥片岩	9.6	3.92	1.9	139.4	柱状片刃石斧	
399	石鏃	完形	サヌカイト	2.7	1.8	0.3	1.28	凹基無茎打製石鏃	48
400	剥片		サヌカイト	4.8	4.0	0.8	13.21		

表38　J区1号墳丘　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
401	坏	口径12.4 器高4.7	天井部と口縁部の境に稜を持つ碗。	④ 回転ナデ ⑤ 巨転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	石・長(1~3) ◎		49

表39　J区1号墳主体部出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
402	刀子		鉄	10.9	2.0	1.1	21.70		49

表40　J区1号墳主体部　出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質・色	法量 長さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
403	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.10	0.20	0.08	0.006		49
404	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.30	0.10	0.024		49
405	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.30	0.10	0.019		49
406	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.30	0.11	0.020		49
407	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.14	0.29	0.12	0.014		49
408	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.15	0.30	0.11	0.015		49
409	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.13	0.28	0.10	0.012		49
410	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.19	0.29	0.13	0.016		49
411	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.30	0.10	0.027		49
412	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.28	0.12	0.021		49
413	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.14	0.25	0.10	0.010		49
414	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.30	0.11	0.021		49
415	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.18	0.31	0.13	0.019		49
416	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.19	0.27	0.10	0.014		49
417	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.15	0.30	0.11	0.014		49
418	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.19	0.33	0.12	0.021		49
419	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.14	0.26	0.09	0.014		49
420	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.31	0.10	0.024		49
421	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.15	0.27	0.10	0.014		49
422	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.21	0.31	0.11	0.026		49
423	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.30	0.11	0.019		49
424	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.19	0.29	0.10	0.018		49
425	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.29	0.10	0.021		49
426	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.28	0.13	0.017		49
427	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.13	0.23	0.09	0.008		49
428	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.14	0.30	0.11	0.014		49
429	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.16	0.30	0.11	0.019		49
430	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.12	0.29	0.10	0.014		49
431	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.11	0.30	0.12	0.011		49
432	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.18	0.30	0.11	0.017		49
433	ガラス小玉	完形	ガラス・濃紺色	0.20	0.29	0.10	0.018		49

表41　J区　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
434	埴輪	口径(25.2) 残高4.4	円筒。外反する口縁。	(口縁)ヨコナデ (行)タテハケ(8本/cm)	ヨコハケ	橙色 橙色	石(1) ◎		
435	埴輪	残高5.2	円筒。口縁部片。	(口縁)ヨコナデ (行)ナデ・ハケ(6本/cm)	(口縁)ヨコナデ(指頭痕) (色)ハケ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1) ◎		
436	埴輪	残高7.2	円筒。口縁部片。	(行段)ヨコナデ ハケ(7本/cm)	(口縁)ヨコナデ (行)ハケ・ナデ(指頭痕)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1) ◎		
437	埴輪	残高13.3	円筒。タガ1条と円孔。	ハケ(7本/cm)	指ナデ・指頭痕	明黄褐色 明黄褐色	石(1) ◎		
438	埴輪	残高6.0	円筒。タガ部片。	ハケ(9本/cm)	指ナデ・指頭痕	橙色 にぶい橙色	石(2) ◎		
439	埴輪	残高5.7	円筒。タガ部片。	ハケ(10本/cm)	指ナデ・指頭痕	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
440	埴輪	残高11.4	円筒。タガ1条と円孔。	ハケ(6本/cm)	指ナデ・指頭痕	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1~2) ◎		
441	埴輪	残高5.7	円筒。タガ1条・穿孔の片。	ハケ(10本/cm)	指ナデ・指頭痕	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
442	埴輪	底径(15.8) 残高8.9	円筒。タガ1条。底部。	ハケ	指ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		
443	埴輪	底径(11.8) 残高8.6	円筒。底部。	ハケ(8本/cm)	指ナデ・指頭痕	橙色 橙色	石(1) ◎		
444	埴輪	底径(12.4) 残高7.0	円筒。底部。	ハケ(6本/cm) (底面)ナデ	指ナデ	橙色 橙色	石(1~2) ◎		
445	埴輪	底径(12.2) 残高6.5	円筒。底部。	ハケ(8本/cm) (底面)ナデ	指ナデ・指頭痕	橙色 橙色	石(1) ◎		

表42　L区SB1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
446	甕	口径(22.6) 残高11.5	張り付けた口縁下に櫛描多条沈線文、直下に同様工具による刺突文。	(行)ヨコナデ (胴)ハケ・ミガキ	(行)ヨコナデ (胴)ミガキ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		49
447	甕	残高13.1	底面に焼成後穿孔。窪み底。	(胴)ミガキ (底面)ナデ	ナデ	橙色 明黄褐色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
448	ミニチュア	口径4.5 底径4.4 器高3.8~4.0	手づくね。器台型。	指頭痕	指頭痕	明黄褐色 にぶい黄橙色	長(1~2) ◎		49

表43　L区SK1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
449	鉢	底径(5.4) 残高6.2	平底の鉢かジョッキ形の底部。	(胴)ミガキ(指頭痕) (底)ナデ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~2) ◎		-

表44　L区ＳＫ２　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
450	壺	底径(8.8) 残高29.1	頸・肩部にヘラ描沈線文３条。肩・胴張り・胴部下位に沈線１条を引き、その間にヘラ描の斜格子文。	⑧ミガキ ⑩ナデ	ナデ？	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) 金ウンモ ◎	黒斑	49

表45　L区ＳＫ４　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
451	壺	口径(15.8) 底径9.4~10.0 器高33.6	粘土帯を折り曲げたような短い口縁。球形に近い胴部。平底。	⑫ナデ(指頭痕) ⑭ミガキ ⑯ナデ(指頭痕)	指ナデ・指頭痕	にぶい橙・橙色 橙色	石・長(1~5) 赤色粒土長 ◎	黒斑	49
452	鉢	口径14.7 底径5.7 器高11.1	水平気味に短く折り曲げた口縁。くびれを持つ上げ底。	⑰ヨコナデ ⑱ミガキ ⑲ナデ(指頭痕)	⑫ヨコナデ ㉔ミガキ	暗褐色 暗褐色	長(1~2) ◎	黒斑	49
453	甕	底径(6.4) 残高13.7	胴部下半の片。若干の窪み底。	⑨ミガキ (底面)ナデ(指頭痕)	ミガキ	明褐色 にぶい橙色	石・長(1~3) ◎	黒斑	

表46　L区ＳＫ５　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
454	壺	底径(5.4) 残高3.1	平底。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) 赤色粒土長		

表47　L区出土弥生時代　遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
455	蓋	口径(34.0) 残高9.5	断面三角形に近い短い口縁。上面は水平な平担面。	⑪ヨコナデ ⑬ハケ(7本/cm) →ミガキ	⑪ヨコナデ ⑮工具によるナデ	明褐色 明褐色	石・長(1~3) 金ウンモ ◎		
456	蓋	底径(6.6) 残高3.7	わずかな窪み底。	ナデ	ミガキ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		
457	甕	底径(7.2) 残高4.2	わずかな窪み底。	ナデ(指頭痕)	マメツ	明赤褐色 赤橙色	石・長(1~3) ◎		
458	甕	底径(5.8) 残高3.8	平底。	ナデ	ナデ・指頭痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
459	甕	底径(5.2) 残高3.6	平底。	ミガキ？	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		
460	壺	口径(16.6) 残高5.2	外反しながら外上方に開く口縁。端部は面をなす。	ミガキ	ミガキ	明黄褐色 明黄褐色	石(1~2) 金ウンモ ◎		
461	甕	残高13.4	胴部片。	ミガキ	ミガキ(指頭痕)	明赤褐色 橙色	石・長(1~3) ◎		
462	甕	底径(7.6) 残高8.2	平底。	⑧ミガキ ⑩ナデ(指頭痕)	⑫ミガキ ⑭ナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
463	甕	底径(8.8) 残高5.1	平底。	⑨ミガキ ⑪ナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1) 金ウンモ ◎		
464	紡錘車	径2.3~2.6 厚0.4 重3.05g	甕の胴部片と思われるものに穿孔して転用。	マメツ	マメツ	明褐色 明褐色	石・長(1~2) ○		50

表48　L区　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
465	石鏃	完形	サヌカイト	2.0	1.5	0.2	0.63	凸基無茎打製石鏃	50
466	剥片		サヌカイト	2.8	2.0	0.4	2.93		
467	円板状石製品		緑泥片岩	5.0	4.7	0.6	26.04	紡錘車か	50
468	石核		凝灰岩	8.5	6.1	2.0	102.91		50

表49　L区1号墳周溝　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
469	坏	口径(13.7) 器高4.8	大井部と口縁部の境に稜を持つ壷。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎		50
470	坏	口径(13.3) 器高5.2	天井部と口縁部の境に稜、口端部には段を持つ壷。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		50
471	坏	口径13.0 器高5.0	天井部と口縁部の境に稜を持つ壷。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(1~2) ◎		50
472	坏	口径(12.4) 残高3.3	天井部と口縁部の境に稜、口端部には段を持つ蓋。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
473	坏	口径(11.9) 器高5.2	直線的に立ち上がる口縁。端部に段を持つ身。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(1) ◎		50
474	坏	口径(10.4) 残高3.8	直上に近く立ち上がる口縁。端部に段を持つ身。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(1~3) ◎		
475	坏	残高3.8	坏身の受部片。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
476	坏	残高4.6	坏身の底～胴部。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
477	高坏	底径(9.0) 残高5.7	3方向の長方形1段透し。裾部は内湾し端部を丸く仕上げる。	㋐上 回転ヘラケズリ? ㋐下 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ◎		
478	甕	口径(10.4) 残高11.7	内湾気味に開く口縁。φ1.5cm。無文。	㋐ 回転ナデ ㋑ カキ目 ㋒ ナデ	㋓ 回転ナデ ㋔ ジポリ目→ヒモ痕ナデ ㋕ ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		50
479	甕	残高8.9	頸～胴部。φ1.6cm。無文。	㋐上 回転ナデ ㋐下 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ◎	自然釉	
480	甕	残高5.3	胴部片。上位に櫛歯状工具による刺突文。	㋐上 ナデ・カキ目 ㋐下 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色・灰白色 灰色	長(1~2) ◎	自然釉	
481	壺	口径(13.2) 残高3.7	短頸壺。直上に立ち上がる口縁。端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		
482	甕	口径(23.0) 残高10.1	大型品。口端部直下に断面三角形の細い凸帯。	㋐ 回転ナデ ㋑ タタキ→カキ目	㋒ 回転ナデ ㋓ タ タ キ	褐・灰オリーブ色 灰紫色	長(1~2) ◎	自然釉	
483	甕	口径(17.6) 残高3.4	外反し下方にやや肥厚する口縁。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1~3) △		
484	器台	口径(33.4) 残高4.9	坏部。波状文。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	含細砂粒 ◎		51
485	器台	残高5.4	坏部。波状文。	㋐上 回転ナデ ㋑下 タ タ キ	㋒上 回転ナデ ㋒下 タ タ キ	明オリーブ灰色 灰色	長(1) ◎		51
486	器台	残高5.1	筒壁か。波状文。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄色 浅黄色	含細砂粒 ◎	自然釉	51

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
487	器台	残高7.7	筒型か。長方形透し2段。波状文。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	長(1) ◎	白然釉	51
488	器台	残高7.4	裾部片。三角形透し。波状文。	カキ目	回転ナデ	灰白色・灰色 灰色	石・長(1~3) ◎		51
489	器台	残高7.5	裾部片。長方形透し。波状文。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰色 灰色	長(1~2) ◎		51
490	器台	残高3.3	裾部片。丸みを帯びた三角形透し。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	含細砂粒 ◎		51
491	器台	残高7.4	裾部片。丸みを帯びた三角形透し。	カキ目	回転ナデ	灰白色・灰色 青灰色	石・長(1~3) ◎		51
492	器台	残高7.4	脚部片。波状文。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	石・長(1) ◎		51
493	器台	底径(24.1) 残高5.0	内湾し、面を持って接地する脚端部。透しあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ◎		51
494	埴輪	無径(47.2) 残高13.3	蓋の笠部。裾寄近に1条、中位に2条の沈線で上下を区画し、その間に1条格子様の2条の縦沈線。	ハケ(10本/cm)	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		51
495	埴輪	残高6.7	蓋の笠部。縦・横方向2条の沈線が交叉する。	ハケ	ナデ・指頭痕	橙色	石・長(1~3) ◎		
496	埴輪	口径(14.5) 残高5.5	蓋。軸受筒状部の上端部片。端部に低い貼付突帯。	㊀ヨコナデ ㊁ハケ(7本/cm)	ハケ・ナデ	橙色	含細砂粒 ◎		
497	埴輪	残高6.7	蓋の立飾片。両面に施文。	ハケ・ナデ	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		51
498	埴輪	残高5.5	片面のみの施文。蓋	ハケ・ナデ	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
499	埴輪	残高7.8	形象。双女の頭部、島田髷の片。	ハケ・ナデ	指頭痕 シボリ痕	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		52
500	埴輪	残高5.4	形象。人物。甲冑の板表現と思われる施文。頭部の冑部分。	マメツ	指頭痕	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
501	埴輪	残高7.3	形象。人物。甲冑の板表現と思われる施文。頭部の冑部分。	ハケ(9本/cm)	ナデ・指頭痕	橙色 橙色	石(1) ◎		
502	埴輪	残高8.9	形象。人物。腕部。	ナデ	指ナデ・指頭痕	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		52
503	埴輪	残高5.8	形象。人物。腕部。	ナデ	指ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		52
504	埴輪	残高12.2	形象。人物。上腕部。	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		52
505	埴輪	残高21.9	形象。人物の下半身と円筒の接合部。胸部に横方向の平行沈線が3条まで確認できる。	ハケ(9本/cm) ナデ	ナデ・指頭痕	橙色 橙色	長(1~3) ◎		53
506	埴輪	残高5.4	形象。人物。平行沈線が5条まで確認できる。	ハケ(9本/cm) ナデ	ナデ・指頭痕	黄橙色 黄橙色	含細砂粒 ◎		53
507	埴輪	残高6.5	形象。盾型。円筒との接合部片。ヘラ描施文あり。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
508	埴輪	残高8.6	形象。盾型。上端または下端のコーナー部片。ヘラ描施文あり。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
509	埴輪	残高2.4	形象。盾型。線杉文。	ハケ	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
510	埴輪	残高4.6	形象。盾型。円筒との接合部片。ヘラ描施文あり。	マメツ	マメツ	赤色 赤色	石(1) 赤色粒化土粒 ◎		
511	埴輪	残高24.6	形象。盾型。円筒との接合部片。上端部。ヘラ描施文あり。	ハケ	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 赤色粒化土粒 ◎		53
512	埴輪	残高6.5	形象。盾型。ヘラ描施文あり。	ハケ	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
513	埴輪	残高6.6	形象。家型。寄棟の屋根のコーナー部片。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		53
514	埴輪	残高6.0	形象。家型。寄棟の屋根のコーナー部片。	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	橙色 橙色	石・長(1) ◎		53
515	埴輪	残高3.8	形象。家型。寄棟の屋根のコーナー部片。	ナデ	ナデ・指頭痕	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) 赤色粒化土粒 ◎		53
516	埴輪	残高5.1	形象。家型。寄棟の屋根の軒先片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 赤色粒化土粒 ◎		53
517	埴輪	残高6.5	形象。家型。寄棟の屋根の軒先片。	ナデ	ナデ・指頭痕	橙色 橙色	含細砂粒 赤色粒化土粒 ◎		53
518	埴輪	残高5.3	形象。不明品。	ハケ・ナデ	ナデ・指頭痕	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		53
519	埴輪	残高4.5	形象。不明品。	ハケ(9本/cm) →ナデ	ハケ	橙色 橙色	石・長(1~2) 赤色粒化土粒 ◎		53
520	埴輪	残高8.6	形象。人物か。	マメツ	ナデ・指頭痕	黄橙色 黄橙色	石・長(1) ○		53
521	埴輪	口径(40.6) 残高9.0	朝顔形の口縁部。端面は窪む。断面M字形の突帯。	(円)ヨコナデ (凸)ハケ(8本/cm)	(凸)ヨコナデ ハケ	橙色 黄橙色	石(1) ◎		54
522	埴輪	残高9.2	須恵質。タガ部。	(外)ハケ(7本/cm) (タガ)ヨコナデ	ハケ(5本/cm) →(11本/cm) →ナデ	にぶい赤紫色 赤褐色	含細砂粒 ◎		54
523	埴輪	残高7.2	須恵質。タガ部。	(外)ハケ(9本/cm) (タガ)ヨコナデ	指ナデ・指頭痕	暗赤褐色 暗赤灰色	石(1) ◎		54
524	埴輪	残高6.0	須恵質。タガ部。	(外)ハケ(9本/cm) (タガ)ヨコナデ	ハケ(5本/cm 9本/cm)	にぶい黄色 赤褐色	含細砂粒 ◎		54
525	埴輪	残高7.3	須恵質。タガ部。	(外)ハケ(8本/cm) (タガ)ヨコナデ	ハケ(5本/cm 9本/cm)	にぶい赤色 赤褐色	含細砂粒 ◎		54
526	埴輪	底径13.4 残高12.8	底部。タガ1条、円孔。B種横ハケ。土師質。	(外)ハケ(9本/cm) (タガ)ヨコナデ (底)ナデ・指頭痕	ハケ・指ナデ ・指頭痕	黄橙色 黄橙色	石(1) ◎		54
527	埴輪	底径(17.0) 残高10.9	底部。土師質。	マメツ ハケ(7本/cm)	マメツ (指ナデ)	明赤褐色 明赤褐色	石(1) ○		
528	甕	底径6.0 残高3.9	くびれを持つ上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
529	すり鉢	口径(26.4) 底径(13.6) 器高12.7	備前焼。外面に櫛を持って垂直に立ち上がる口縁。櫛部は丸い。7本単位の櫛り目。	回転ナデ	回転ナデ	褐色・暗紫色 灰赤色	長(1~2) ◎		
530	皿	口径11.0~11.4 底径6.8 器高1.7~2.1	外反して立ち上がる口縁。端部は丸い。上師器。	(外)回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	黄橙色 黄橙色	含細砂粒 ◎		
531	皿	口径11.1 底径6.7 器高1.7~2.1	内湾気味に立ち上がる口縁。土師器。	(外)回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	黄橙色 黄橙色	含細砂粒 ◎		

表50　L区1号墳丘出土古墳時代　遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
532	埴輪	残高3.2	形象。蓋の笠部。天井頂部片。	ハケ→ナデ	指頭痕	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
533	坏	口径(12.2) 残高3.7	口縁端部に窪み、天井部と口縁部境に稜を持つ蓋。須恵器。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~2) ◎		
534	甕	残高3.1	韓式系軟質土器。胴部小片。	タタキ	ハケ	明赤褐色 明赤褐色	含細砂粒 ◎ 外面に炭化物		

表51　L区2号墳周溝　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
535	坏	口径(13.4) 残高4.7	坏蓋。天井部と口縁部境に稜を持つ。	㋐ 回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒色 にぶいオリーブ灰色	長(1~2) ◎		
536	坏	口径13.9 残高4.4	坏蓋。口縁部が外に傾いた面をなす。	㋐ 回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	暗赤灰色 灰色	長(1) ◎		55
537	坏	残高3.4	坏蓋。天井部と口縁部境に稜を持ち、端部は段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	黒オリーブ色・黄色 灰色	長(1) ◎	自然釉	
538	坏	口径(11.4) 器高5.2	坏身。口縁部、受部ともにやや長めで垂直に立ち上がる。	㋐ 同転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	同転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		55
539	坏	口径(11.8) 残高4.0	口端部が若干内傾する坏身。	回転ナデ	同転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ◎		
540	坏	口径(9.8) 残高3.0	口縁部、受部ともにやや長めな坏身。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
541	高坏	口径10.8 脚径9.6 器高9.8	裾脚の無蓋高坏。口縁部は長く声上に立ち上がる。脚部外面はカキ目調整で透孔は3方向。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ ㋒ ナデ ㋓ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~3) ◎		55
542	甕	口径(19.0) 残高2.9	頸部外面に断面三角形の細い突帯が1条巡り、上位の口端部直下に櫛描波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎		
543	埴輪	残高23.4	立飾りの片。外方に3箇所、下方に1箇所の突起がある。2条平行の沈線で外周を縁取る。	ハケ(7本/cm)	ハケ(7本/cm)	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		55
544	埴輪	残高2.5	形象。家の棰木。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	橙色 橙色	右・長(1) ◎		56
545	埴輪	残高2.4	形象。家の棰木。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	長(1) ◎		56
546	埴輪	残高6.4	人物。頸部付近の破片。	ナデ	ナデ	黄橙色 黄橙色	長(1) ◎		56
547	埴輪	残高7.1	人物。頸部付近の破片。	ハケ(8本/cm)	ナデ・指頭痕	明褐色 明褐色	石(1) ◎		56
548	埴輪	残高12.3	形象。不明品。	ハケ(9本/cm) ナデ	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	長(1) ◎		56
549	埴輪	残高5.7	形象。不明品。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	含細砂粒 ◎		56
550	埴輪	残高6.3	形象。不明品。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	含細砂粒 ◎		56
551	埴輪	残高10.3	人物の衣服に付属する縦状の部位か。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	含細砂粒 ◎		56

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
552	埴輪	残高7.3	人物の衣服に付属する縁状の部位か。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	含細砂粒 ◎		56
553	埴輪	口径(46.6) 残高12.3	朝顔型。口縁のタガ部分。	㋑ハケ(7本/cm) ㋺ナデ	ハケ(8本/cm) ナデ	橙色 橙色	長(1) ◎		
554	埴輪	口径(36.6) 残高1.8	朝顔型。須恵質の口縁部分。	口縁 ナデ ㋑ハケ(9本/cm) →ナデ	ハケ	にぶい褐色 灰褐色	含細砂粒 ◎		56
555	埴輪	残高8.1	朝顔型。口縁のタガ部分。須恵質。	㋑ハケ(5本/cm) ㋺ナデ	ハケ(7本/cm)	にぶい赤褐色 灰赤色	含細砂粒 ◎		56
556	埴輪	残高5.1	朝顔型。頸部片で断面三角形のタガを持つ。	ヨコナデ	ハケ(9本/cm) ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	含細砂粒 ◎		
557	埴輪	残高6.5	朝顔型。頸部片で断面三角形のタガを持つ。	㋺ヨコナデ ハケ(8本/cm)	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1) ◎		
558	埴輪	残高6.9	朝顔型。頸部片で断面三角形のタガを持つ。	㋺ヨコナデ ハケ(8本/cm)	ナデ	橙色 橙色	長(1) ◎		
559	埴輪	残高8.0	朝顔型。頸部片で断面三角形のタガを持つ。須恵質。	㋺ヨコナデ ハケ(8本/cm)	ハケ(8本/cm)	灰褐色 灰褐色	含細砂粒 ◎		56
560	埴輪	口径(20.8) 残高17.4	円筒。2段目の区画に円孔あり。	口縁 ナデ ハケ(7本/cm) ㋺ヨコナデ	ハケ→ナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
561	埴輪	残高10.7	円筒。タガ片。須恵質。	ハケ(6本/cm) ヨコナデ	ハケ(8本/cm)	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	含細砂粒 ◎		56
562	埴輪	残高9.8	タガ片。B種横ハケ。須恵質。	ハケ(7本/cm) ㋺ヨコナデ	ハケ(8本/cm)	にぶい赤褐色 にぶい橙色	含細砂粒 ◎		56
563	埴輪	残高8.6	タガ片。須恵質。B種横ハケ。	ハケ(7本/cm) ㋺ヨコナデ	ハケ(8本/cm) ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		56
564	埴輪	残高9.2	タガ片。須恵質。B種横ハケ。	ハケ(9本/cm) ㋺ヨコナデ	指ナデ 指頭痕	橙色 橙色	石・長(3) ○		
565	埴輪	残高7.8	タガ片。B種横ハケ。	ハケ(10本/cm) ㋺ヨコナデ	ナデ(指頭痕)	黄橙色 黄橙色	含細砂粒 ◎		
566	埴輪	残高7.2	タガ片。B種横ハケ。	ハケ(7本/cm) ㋺ヨコナデ	ナデ(指頭痕)	明褐色 明褐色	含細砂粒 赤色酸化鉄 ◎		
567	埴輪	残高11.4	タガ片。須恵質。B種横ハケ。	ハケ(7本/cm) ㋺ヨコナデ	ハケ 7本/cm 10本/cm	にぶい赤褐色 赤褐色	含細砂粒 ◎		56
568	埴輪	底径(15.6) 残高9.2	底部片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石(1) ◎		

表52　L区2号墳丘　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
569	壺	底径(8.0) 残高6.6	平底。	㋑マメツ 底面ナデ	ナデ	黄橙色 橙色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
570	坏	底径(10.6) 器高4.9	口縁部は長めでやや内傾し、端部はほぼ水平な面をなす。	㋑回転ナデ ㋺回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~2) ◎		
571	甕・壺	口径(22.0) 残高2.2	口端部は上下に拡張し、やや下った位置に断面三角形の細い突帯が1条貼りつけている。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
572	壺・甕	口径(17.8) 残高2.4	口端部は上下に拡張し、櫛描波状文が見られる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
573	器台	残高7.1	脚部片。突帯2条で区画された、上位の部分に櫛描状工具による列点文と二角形透孔の一部。	同転ナデ	同転ナデ	灰白色 灰色	長(1) ◎		

表53　L区3号墳周溝　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
574	坏	口径12.4 器高6.5	有蓋高坏の蓋。口端部は傾いた面をなし、端面は段をなす。	㋐ 転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ ㋒ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2) ◎		57
575	坏	口径12.0 器高5.8	有蓋高坏の蓋。口端部は傾いた面をなし、端面は段をなす。	㋐ 転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ ㋒ 回転ナデ	同転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ◎		
576	坏	口径12.6 器高5.9	有蓋高坏の蓋。口端部は平坦な面をなす。	㋐ 回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ ㋒ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～3) ◎		57
577	坏	口径12.2 器高5.8	有蓋高坏の蓋。口端は平坦な面をなす。	㋐ 回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ ㋒ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	長(1～3) ◎		57
578	坏	口径12.0 器高5.1	有蓋高坏の蓋。口端は平坦な面をなす。	㋐ カキ目 ㋑ 回転ナデ ㋒ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎	自然釉	
579	坏	口径11.7 器高4.9	有蓋高坏の蓋。口端は中窪みの面をなす。	㋐ 回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ ㋒ 回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	長(1) ◎		
580	坏	残高2.1	有蓋高坏の蓋。	回転ナデ	同転ナデ	灰白色 灰色	長(1～2) ◎		
581	坏	残高2.1	有蓋高坏の蓋。	㋒ 回転ナデ ㋐ 同転ヘラケズリ	同転ナデ	灰白色 灰色	長(1～2) ◎		
582	坏	口径(12.2) 残高4.0	有蓋高坏の蓋。口端は中窪みの面をなす。	㋐ 回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎	自然釉	
583	坏	口径(12.8) 残高3.6	有蓋高坏の蓋。口端部は傾いた面をなし、端面は段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ◎		
584	坏	口径(11.8) 器高5.6	口縁部はやや内側に傾き、端部はやや中窪みの内傾した面をなしている身である。	㋑ 同転ナデ ㋐ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2) ◎		
585	坏	口径(11.7) 器高4.9	口縁部はやや内側に傾き、端部はやや中窪みの内傾した面をなしている身である。	㋑ 同転ナデ ㋐ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	長(1) ◎		
586	高坏	底径(10.2) 残高4.4	短脚の有蓋高坏。脚部の透孔は4方向。	㋐ カキ目 ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～3) ◎		
587	高坏	底径9.5 残高4.2	短脚の有蓋高坏。脚部の透孔は3方向。	㋐ カキ目 ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎		
588	高坏	底径(8.8) 残高8.0	短脚の有蓋高坏。脚部の透孔は長い台形の3方向である。	㋐ 回転ナデ ㋑ ヘラケズリ ㋒ カキ目 ㋓ 回転ナデ	同転ナデ	灰オリーブ灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎		
589	高坏	口径10.7 底径9.2 器高9.3	笠形の有蓋高坏。口縁部はほぼ真上に立ち上がる。脚部の透孔は長い台形の3方向である。	㋐ 回転ナデ ㋑ ヘラケズリ ㋒ カキ目 ㋓ 回転ナデ	同転ナデ	明オリーブ灰色・褐色 オリーブ灰色	長(1) ◎		57
590	高坏	口径10.4 底径7.3 器高8.1	口端部は段を持たず、平坦で内傾する。透孔は長い台形の3方向で、短脚の有蓋高坏である。	㋐ 回転ナデ ㋑ カキ目 ㋒ 回転ナデ	同転ナデ	オリーブ灰色・灰黄褐色	長(1) ◎		
591	高坏	口径10.5 底径7.4 器高8.6	口端部は段を持たず、平坦で内傾する。透孔は長い台形の3方向で、短脚の有蓋高坏である。	㋐ 回転ナデ ㋑ カキ目 ㋒ 回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎		

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
592	高坏	口径(11.0) 底径8.7 器高9.1	口縁部は段を持たず中膨みの内傾した面をなす。口縁部はほぼ水平に立ち上がる。	㋐ 回転ナデ (胎土)赤色スジ (焼成)やや良 ㋑ 回転ナデ (胎土)赤色スジ (焼成)やや良	回転ナデ	灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎		
593	高坏	口径10.3 底径7.5 器高8.4	口縁部は段を持たず中膨みの内傾した面をなす。口縁部は内傾する。透孔は3方向である。	㋐ 回転ナデ (胎土)黒カキ片 ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~2) ◎	自然釉	
594	高坏	口径10.3 底径7.0 器高8.4	口縁部は段を持たず、平坦で内傾する。透孔は長い台形の3方向で、短脚の付置高坏である。	㋐ 回転ナデ (胎土)カキ片 ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 オリーブ灰色	長(1) ◎		57
595	器台	口径(20.4) 残高3.8	口縁部は端部を上下に拡張し、端面は中膨みの面をなしている。断面三角形の鍔い突帯あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰黄色	長(1) ◎		
596	器台	残高3.8	口縁部小位の突帯の下位に、櫛描波状文を施している。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰黄色	長(1) ◎	自然釉	
597	器台	残高3.0	受部直下に続く部分。	回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰白色 灰色	長(1) ◎		57
598	器台	残高5.7	筒型器台の片で、櫛描波状文を施している。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		57
599	器台	残高9.1	2条単位の細い突帯によって区画された部位に櫛描波状文と透孔を施されている。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	長(1) ◎		
600	器台	残高6.5	2条単位の細い突帯によって区画された部位に櫛描波状文と透孔を施されている。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		
601	壺	LI径21.9 残高39.7	無頸はやや外反気味に外上方に伸び、LI端部を上方に拡張し、平坦な外端面を設けている。	㋐ 回転ナデ (胎土)タタキ	㋑ 回転ナデ (調成)タタキ	灰オリーブ色 暗オリーブ色	長(1~2) ◎	自然釉	57
602	埴輪	残高9.8	形象埴輪。盾形の上端部。	ハケ(10本/cm)→ナデ	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		58
603	埴輪	残高31.4	形象埴輪。盾形埴輪で向かって右側の端部を含む片。	ハケ(10本/cm)→ナデ	ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		58
604	埴輪	残高30.8	盾形埴輪で盾面中央部が鰭付円筒状に大きく盛り上がる。円形の透孔が2ケ所に確認。	ハケ→ナデ 指頭痕	ハケ→ナデ 指頭痕	橙色 橙色	石(1) ◎		58
605	埴輪	残高6.6	盾形埴輪。側辺端部の片。	ナデ	ナデ	明褐色 明褐色	含細砂粒 ◎		58
606	埴輪	残高4.5	盾形埴輪。上下端付近の破片。	ハケ 指頭痕	マメツ	明褐色 明褐色	含細砂粒 ◎		58
607	埴輪	残高12.6	靫。立飾りの片。U字状に刳り込まれた突起部分で縁に沿わせて2本単位の沈線を描く。	ハケ	ハケ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		58
608	埴輪	残高13.0	形象埴輪。家の上台をなす。	指ナデ	指ナデ	赤褐色 赤褐色	石(1) ◎		59
609	埴輪	残高9.4	形象埴輪。家の方柱状の部材。	ナデ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~2) ◎		59
610	埴輪	残高4.8	形象埴輪。家の軒先部。	ナデ	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石(2) ◎		59
611	埴輪	残高4.7	形象埴輪。家の軒先部。	ナデ	指ナデ	橙色 橙色	石(1) ◎		59
612	埴輪	残高13.7	形象埴輪。人物の腕、右腕の二の腕から甲・指先にかけての部位。	ナデ	ナデ(指頭痕) シボリ痕	黄橙色 黄橙色	含細砂粒 赤色粒(上位) ◎		59
613	埴輪	基部径30.0 残高10.5	形象埴輪。人物の衣服裾あるいは草摺。	ヨコハケ(12本/cm)→タテハケ(12本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	長(2) ○		59

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
614	埴輪	残高7.7	形象埴輪。人物の衣服据あるいは草摺。	タテハケ(12本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙色 黄橙色	含細砂粒 ◎		
615	埴輪	残高5.7	形象埴輪。胴の一部。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	含細砂粒 ○		
616	埴輪	残高4.7	形象埴輪。肩甲。	ハケ(8本/cm)	指頭痕	赤褐色 赤褐色	石(1) おさえ(二重) ◎		
617	埴輪	残高5.8	形象埴輪。肩甲。	ハケ→ナデ	ナデ(指頭痕)	明赤褐色 明赤褐色	含細砂粒 赤色酸化土粒 ◎		
618	埴輪	残高6.9	形象埴輪。不明品。人物または馬の一部か。	ナデ	ナデ(指頭痕)	明褐色 明褐色	含細砂粒 ◎		
619	埴輪	残高4.7	形象埴輪。不明品。人物または馬の…部か。	ナデ	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
620	埴輪	残高10.9	形象埴輪。不明品。	ハケ? ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	含細砂粒 ◎		59
621	埴輪	残高6.2	形象埴輪。平坦な破片で弧状の施文。不明品。	ハケ	マメツ	橙色 橙色	含細砂粒 ○		
622	埴輪	残高3.7	形象埴輪。やや湾曲し2条の蛇行状の施文。不明品。	ハケ(8本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	含細砂粒 金ウンモ ◎		
623	埴輪	口径(22.8) 残高6.8	円筒。直立する口縁。端部は面をなす。	(D類)ヨコナデ (B)ハケ(9本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
624	埴輪	口径(21.4) 残高3.8	円筒。やや外反する口縁。端部は面をなす。	(D類)ヨコナデ (B)ハケ(9本/cm)	ナデ・指頭痕	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ◎		
625	埴輪	残高4.8	円筒。口縁部小片。鋸歯状のヘラ描文。やや丸味を持つ端部。	(C類)ヨコナデ (B)ハケ(8本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	含細砂粒 ◎		59
626	埴輪	口径(40.6) 残高10.2	朝顔。須恵質。しっかりした中窪みのタガ1条。	(C類)ヨコナデ (B)ハケ(8本/cm) (E)ヨコナデ	ハケ(9本/cm)	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1) ◎		
627	埴輪	口径(39.6) 残高12.0	朝顔。しっかりした中窪みの高いタガ1条。	(C類)ヨコナデ (B)ハケ(8本/cm) (E)ヨコナデ	ハケ(7本/cm)	黄橙色 黄橙色	長(1) ◎		
628	埴輪	残高7.7	朝顔。口縁端部欠損。	(B)ハケ(10本/cm) (E)ヨコナデ	ナデ・指ナデ	橙色 橙色	石(1) ○		
629	埴輪	残高4.9	朝顔の頸部。タガ1条。	(F)ヨコナデ ハケ(9本/cm)	ハケ(10本/cm) ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
630	埴輪	残高5.2	朝顔の頸部。タガ1条。	ハケ(8本/cm) (F)ヨコナデ	ハケ(7本/cm) 指頭痕	明褐色 明褐色	石(1~2) ◎		
631	埴輪	残高5.0	朝顔の頸部片。タガ1条。	(F)ヨコナデ ハケ(10本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1~2) ○		
632	埴輪	残高3.2	朝顔の頸部片。タガ1条。	(F)ヨコナデ ハケ	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
633	埴輪	残高5.6	タガ1条と円孔。	ハケ(9本/cm) (F)ヨコナデ	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	含細砂粒 赤色酸化土粒 ◎		
634	埴輪	残高8.7	タガ1条と円孔。	ハケ(9本/cm) (F)ヨコナデ	ナデ(指頭痕)	明褐色 橙色	含細砂粒 ◎		

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
635	埴輪	残高7.5	タガ1条と円孔。B種横ハケ調整。	ハケ(10本/cm) タガ ヨコナデ	ハケ(9本/cm) ナデ(指頭痕)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	含細砂粒 ○		
636	埴輪	残高13.8	タガ1条。	ハケ(8本/cm) タガ ヨコナデ	ナデ(指頭痕)	明褐色 橙色	含細砂粒 ○		
637	埴輪	残高12.0	タガ1条。	ハケ(7本/cm) タガ ヨコナデ	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1) ○		
638	埴輪	残高8.0	タガ1条と円孔。B種横ハケ調整。	ハケ(11本/cm) タガ ヨコナデ	ナデ(指頭痕)	橙色 にぶい橙色	石(2) ◎		
639	埴輪	底径(15.0) 残高9.4	底部。	ハケ(8本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1~3) ◎		

表54　L区出土古墳時代　遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
640	壺	口径(17.0) 残高2.3	口縁部の小片。丸く収められた口端部直下に断面三角形の突帯が1条巡る。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰黄色 灰褐色	長(1) ◎		
641	埴輪	残高8.9	周形埴輪で、縦付円筒のような形態。透状部分の透部にヘラ描沈線文様が1条確認できる。	ハケ	ナデ	橙色 橙色	長(1) ◎		
642	埴輪	残高12.0	石見型層形埴輪。2条の平行沈線で縁取られた鍔辺と上辺が鋭角に交わる。	ハケ	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		59
643	埴輪	残高4.5	家の軒先部分破片。薄い突帯を端部に貼り付けている。	ナデ	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石(1) ○		
644	埴輪	残高7.4	円筒状に作られたパーツ。人物の脚の可能性が高い。	ナデ・ハケ	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	長(1) ○		
645	埴輪	残高4.9	外面にハケ目と線刻文様を描かれる破片。	ハケ(11本/cm)	ハケ(指頭痕)	黄橙色 黄橙色	石(1) ○		

第3章　まとめ

今回は、鶴が峠遺跡における全調査のうち、中・後期の古墳群を中心とするH区からL区の遺構・遺物を報告した。弥生時代についても各区において土坑、またL区においては竪穴住居1棟の検出もみているが、前回報告のG区において調査された弥生時代の土坑群のように、丘陵上に集中して分布するという状況ではなく、各区に点在するといった程度の分布であり、また年代も前期末に遡るものはなく、中期初頭～前半の間に営まれたものがすべてであった。

H区の古墳調査中に、7号墳丘下層から古墳時代前期の祭祀跡と考えられる遺構・遺物が検出されている。灰状の黒色土や炭化物・焼土を伴うので、調査中は窯跡という呼称で調査されたが、土師器焼成にかかわる遺構としては、焼土面が顕著でないこと、勾玉の検出があったりすることなどから、報告にあたっては、なんらかの祭祀的な行為が行われた跡と判断した。しかし、この鶴が峠丘陵上にこの時期の遺構は皆無であり、この遺跡のみでこの遺構の位置づけを行うことは難しい。この丘陵周辺での発掘調査自体実施された例はなく、該期の集落・古墳等の分布も把握されていない現状では、単発的な発見としか現在のところは評価できない。

古墳は合計13基の検出をみた。墳丘や周溝のみのものが、H区で6基、L区で3基、竪穴式石室を主体部とするものがJ区で1基、横穴式石室を主体部とするものがH区で3基である。墳丘や周溝のみで主体部の残存がない古墳のうちでも、L区の3基はいずれも周溝や墳丘から須恵器や形象を含む埴輪を伴っていた。これらから出土した須恵器は、G区の古墳群出土のものと同様、出辺編年のTK23型式に相当する特徴を持ったものである。これらの須恵器に伴い、L区1号墳では円筒・朝顔形埴輪と、巫女をはじめとする人物や、蓋、盾、家などの器財埴輪の出土があり、2号墳ではやはり円筒・朝顔形埴輪とともに、蓋、家、また人物かと思われる不明品が出土している。3号墳でも円筒・朝顔、形象埴輪としては人物、盾などの出土がみられた。G区出土埴輪と同様、ここでも円筒や朝顔で底部から口縁部まで接合できた例はないが、その法量やタガ・透孔などの特徴には大きくかわりはない。ただ、須恵質に焼成されたものを一定量含むこと、外面調整にB種横ハケを施されるものが散見されるところがやや異なる点ではある。墳丘相互が切り合わない配置にある点でもG区古墳群と同様であり、これらの古墳もまた5世紀末頃の段階で同時期に併存していたものと考えられる。H区検出の1～6号墳のうち、遺物を出土して時期比定可能なものは1～3号墳の3基で、これらもやはり5世紀末頃の須恵器を出土している。残り3基については年代を云々する材料に乏しいが、6基のすべてがやはり切り合わない位置関係で存在していることからすると、北に隣接するG区古墳群と同様、丘陵尾根伝いに同時期に併存していた可能性が高い。これら、墳丘地山整形痕・周溝のみしか遺存していない古墳群に伴う主体部に関しては、J区1号墳の竪穴式石室も含めて前年度の報告で検討し、これらの古墳の主体部として考えられるものとして、箱式石棺、木棺直葬に加えて、小竪穴式石室を挙げている。J区1号墳に伴うとして報告した遺物は、1点の須恵器坏のみでやや危うい部分もあるが、松山平野で検出された小型の竪穴式石室の例からみても、この須恵器坏が示す年代、5世紀末頃の古墳と考えるのが妥当と考えられる。また、J区1号墳に確実に伴うとは言い切れないが、J区において採集された埴輪片はこの古墳に伴っていた可能性が高いと判断している。さて、松山平野の小

型竪穴式石室の調布例からすると、石室の構築法には J 区 1 号墳の主体部のように墳丘の積み上げとともに石室を構築するものと、平井町で調査された塩山峠 7 号墳にみられるように積み上げた墳丘面に再度墓壙を掘り込んで、石室築造を行うものとがあり、いずれの場合も墳丘地山面にその痕跡が残ることはない。木棺直葬墳は主体部確認例が稀少で言及できないが、箱式石棺の例をみてみると、これらについては地山面に墓壙を掘り込む例が多い。本調査例では地山面そのものがかなり削平されていると考えられるので、墓壙痕跡がないことをもって箱式石棺を想定される主体部のひとつからはずすことはできず、どの形態も候補として挙げておかなければなるまい。ところで、H 区検出の 6 基の古墳群は、時期は G 区・L 区の古墳群と同時期と考えられるが、埴輪を持たない点で異なっている。L 区では調査されたすべてに埴輪が伴い、G 区では持つもの持たないものが存在し、H 区では持つものがないといった状況である。同一古墳群の中での祭式の相違といったことは考えにくいので、この差異はランクの差と考えたほうがよさそうである。採用された主体部も一律ではなく、先に述べた 3 とおりの中でランクによって異なった形態を採用していた可能性も考えられよう。ここで、G・H・J 区の 5 世紀末代の古墳分布についてみてみると、北の J 区から G 区を経て南の H 区に至るまでは一連の尾根筋で、基本的には北から南へ下る尾根筋上に 11 基が営まれている。埴輪を伴う古墳は、北の J 区 1 号から G 区 1 ～ 3 号までで、これより南のものには伴わない。したがって、尾根筋北寄りのより高所に位置する古墳のランクが高く、埴輪を伴っていたものと考えられる。さらに言うならば、これらの古墳の主体部も、J 区 1 号のような竪穴式石室を採用していた可能性も考えてよかろう。また、埴輪を持った 3 基が所在する L 区丘陵は、フォーク状に入り組んだ鎌が峰丘陵の最西端の尾根にあたり、これら古墳の所在する南北の尾根筋からは西の海岸線を背景にした海浜の平野を望むことができるというロケーションで、この尾根筋にもランクの高い古墳が占地したものと考えられる。

H 区では 3 基の横穴式石室を主体部とする古墳が調査された。3 基ともに破壊され、副葬遺物の残りも悪く、築造年代にまでは言及できないが、いずれも 6 世紀末から 7 世紀中頃までの遺物を出土した古墳である。なかでも 7 号墳は最も大型の石室を主体部とする両袖型の横穴式石室で、袖が羨道よりも内側に突出する玄門構造をとることに加えて、玄室奥の石屋形状施設と、九州地方の影響を強く受けた石室である。後期から終末期の大型石室で主軸直交の埋葬配置をとるものに、玄室奥の床面を敷石等で区画する例は当平野でも多くみることができるが、この石屋形のような施設を持つ石室は初例で、平野でも自立した存在である。一方、8 号墳は基底部の一部しか残っていないが、7 号墳に比べると規模が小さく、無袖といった在地的な要素を強く持った石室である。ただし、報告したように、この石室は玄門部床面に段構造を持っていた可能性がある。玄門部段構造は、当地方では九州地方の竪穴系横口石室の影響のもとに 6 世紀前半～中頃に成立し、その後当地方の特に小型の石室に普遍的にみられる特徴となっていくとされているので、そういった意味では九州的な要素を持っているといえなくもない。しかし、伝播の初期段階と違って、この特徴が普遍的に在地化していった後での要素と、7 号墳にみられる特徴とを同列におくことはできない。9 号墳も 8 号墳と同規模の石室で、玄門構造に九州的な要素を持たない、この時期の両袖型横穴式石室としては当平野で普遍的にみられる形態である。これら H 区の後期古墳 3 基は、その所在や配置からみて、築造時期はともあれ、7 世紀の前半から中頃のほぼ同時期に同一集団の墓として使用されていたものと考えられる。そのなかで最も優勢な一族の墓と思われる 7 号墳には、九州地方との強い関係を示す特徴を持った石室が採用されている。3 基の占地も含めて考えると、この石室の他との違いを、相対的な築造の古さによるものとし、

より古い石室に集団の出自の特徴が表れたとすることもできよう。その場合、7号墳のような大型石材を用いた大型の横穴式石室は、当地ではおおよそ7世紀を前後する時期以降の築造と考えられているので、他の2基の築造はこれ以降のこととなるが、残された副葬遺物からみてそれほど大きな時期差を認めることはできない。したがって、こういった構造の違いは築造時期差のみに由来するものではなく、この集団の出自を有力一族の墓に強く発現させた結果と考えたほうがよかろう。

文献

田辺昭三　『須恵器大成』　講談社 1981

巣田茂敏　「愛媛の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開－古代学協会四国支部第9回徳島大会資料－』古代学協会　四国支部 1995

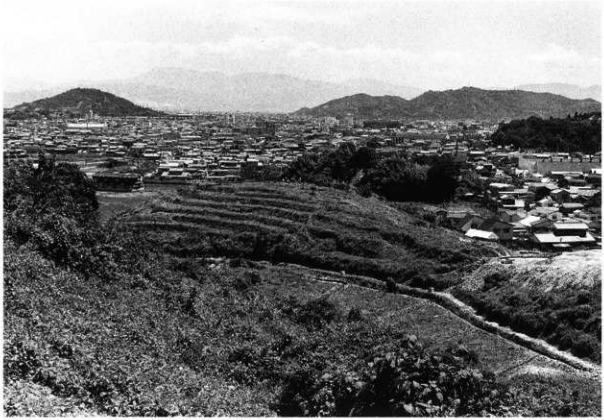
『鉢山峠7号墳』　松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997

『鴨が峠遺跡Ⅰ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2007

下條信行　「葉佐池古墳の石室構造の特徴とその系統」『葉佐池古墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2003

写真図版

調査前のH区丘陵（1）（南より）



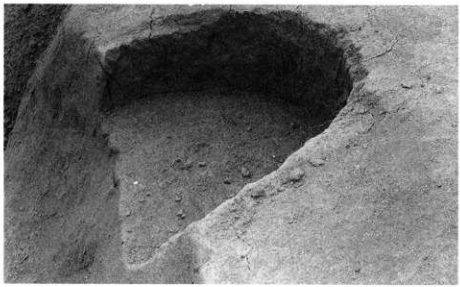
調査前のH区丘陵（2）（北東より）

図版2

H区ＳＫ１完掘状況
（北より）

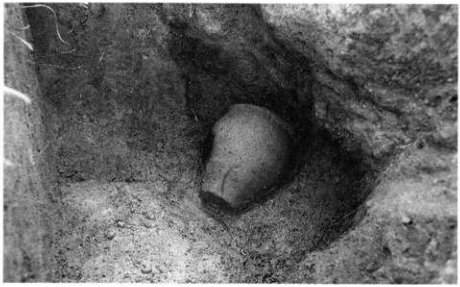
H区ＳＫ２完掘状況
（南より）

H区ＳＫ３遺物出土状況
（西より）

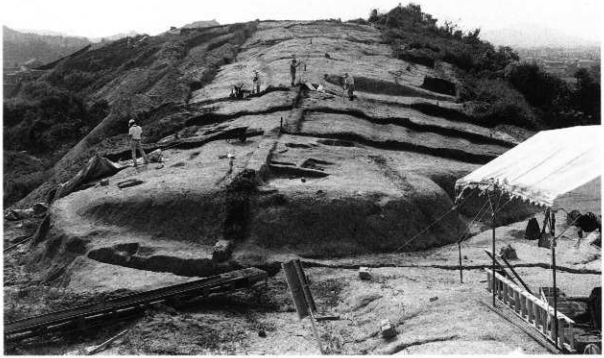


H区ＳＫ４完掘状況
（西より）

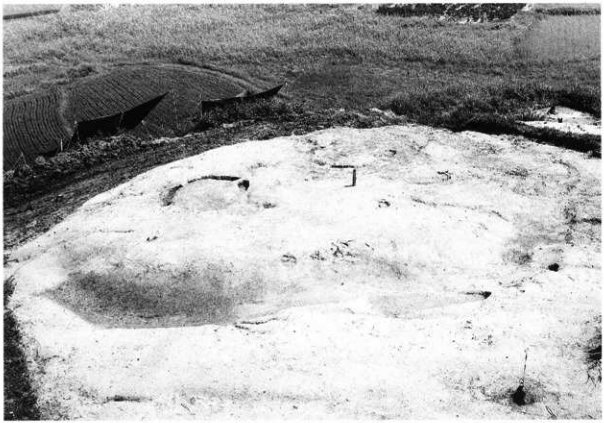
H区ＳＫ５調査状況
（西より）



H区ＳＫ５遺物出土状況
（南より）

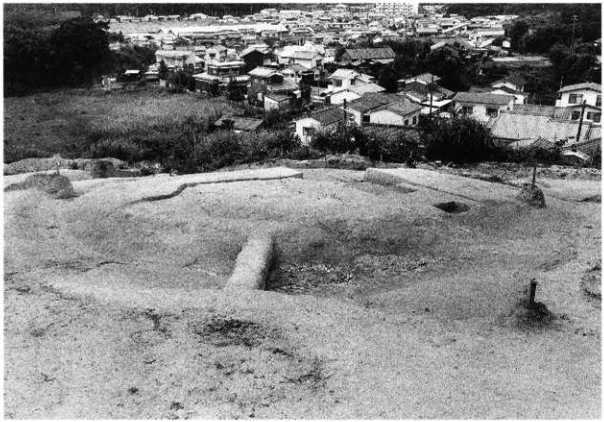


H区調査風景（北より）

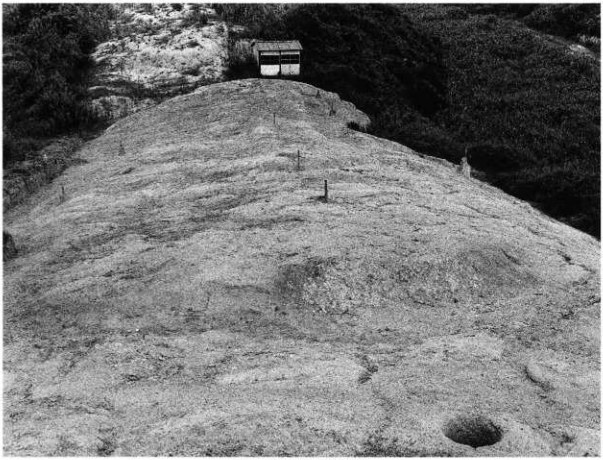


H区1号墳丘（西より）

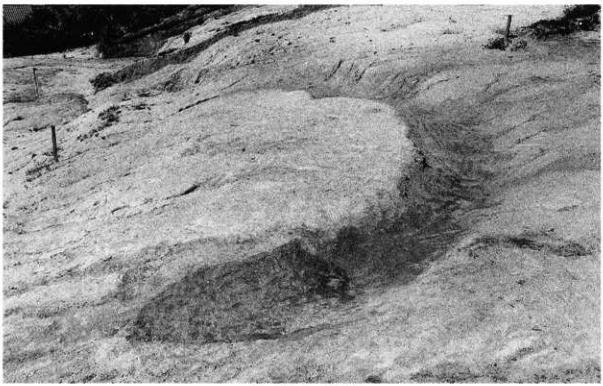
H区2号墳丘（北より）



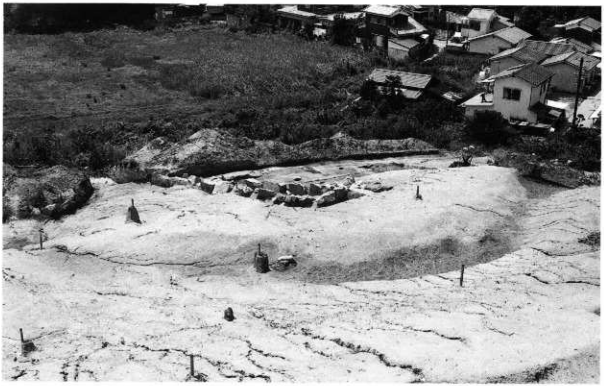
H区3号墳丘（東より）



H区4号墳丘（南より）



H区6号墳丘（東より）



H区７号墳全景（北東より）

H区７号墳横穴式石室調査状況（北より）

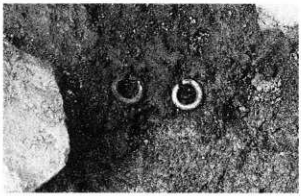
H区７号墳横穴式石室
遺物出土状況（１）

H区７号墳横穴式石室
遺物出土状況（２）

H区７号墳横穴式石室
遺物出土状況（３）

H区７号墳横穴式石室遺物出土状況（４）

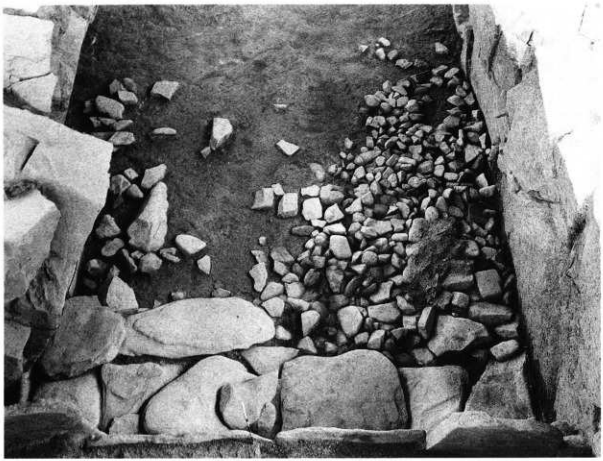
H区７号墳横穴式石室遺物出土状況（５）



H区７号墳横穴式石室遺物出土状況（６）

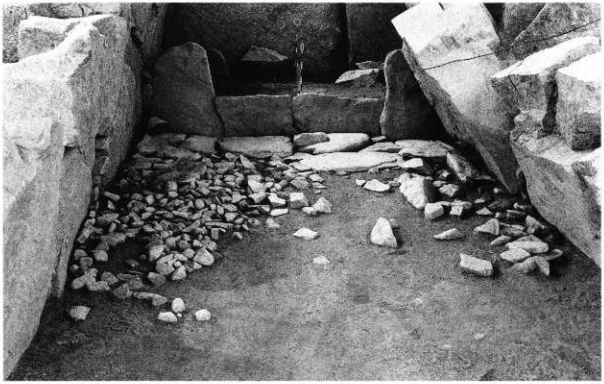
H区７号墳横穴式石室遺物出土状況（７）

H区７号墳石屋形遺物出土状況



H区７号墳横穴式石室玄室床面（北より）

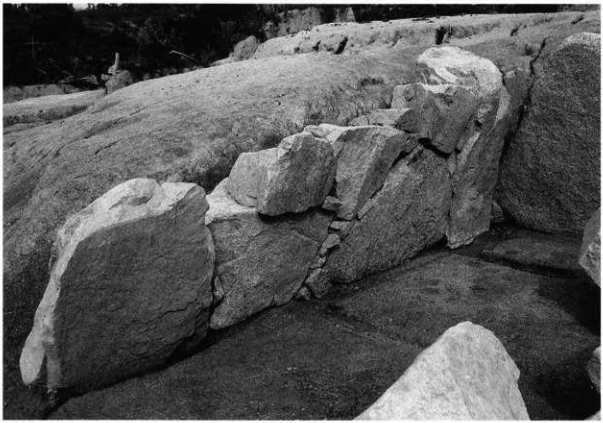
H区７号墳横穴式石室石屋形床面



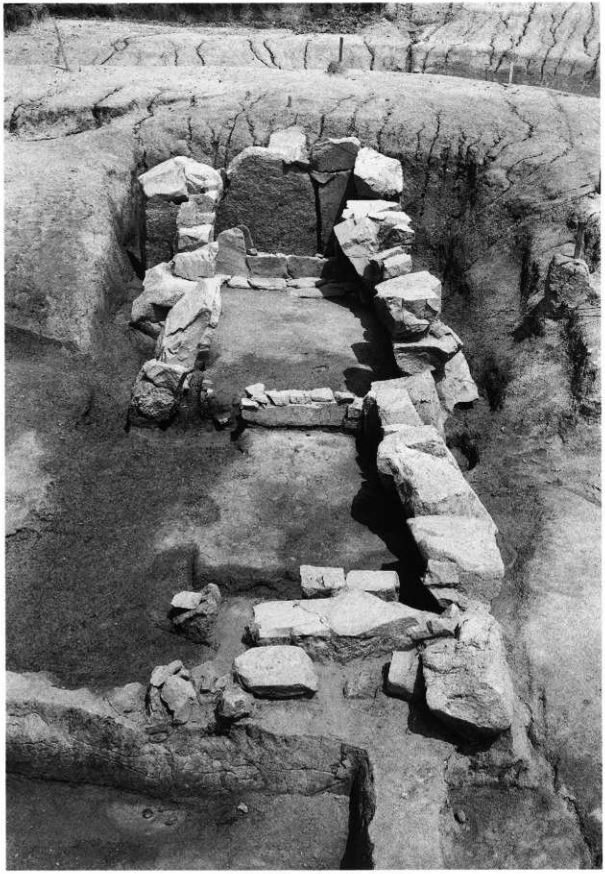
H区7号墳横穴式石室玄室完掘状況（南より）

H区7号墳横穴式石室石屋形近景（1）（南より）

H区7号墳横穴式石室石屋形近景（2）（南西より）



H区7号墳横穴式石室玄室西側壁近景（南東より）



H区7号墳横穴式石室完堀状況（南より）

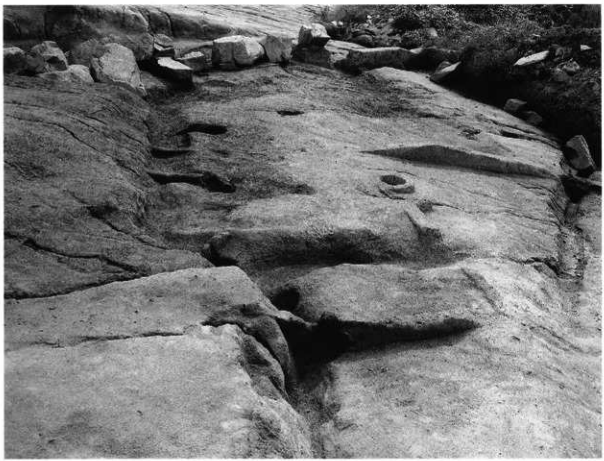
H区祭祀跡検出状況（南西より）

H区祭祀跡遺物出土状況（1）（東より）

H区祭祀跡遺物出土状況（2）（南より）

H区祭祀跡遺物出土状況（3）（西より）

H区祭祀跡遺物出土状況（4）



H区祭祀跡完掘状況（西より）